
ポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊

ムウマージ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊

【Nコード】

N2465N

【作者名】

ムウマージ

【あらすじ】

ポケモン達しかいない世界

その世界の小さな森で一人と一匹が出会った

一人は、目が覚めるとポケモンになってしまった少年レン

一匹は、そのレンを見つけたポケモンのフシギダネ

レンには、人間だった時の記憶がほとんどなかった

なぜポケモンになったのか

なぜこの世界に来たのか

それを見つげるためにレンはフシギダネと共に救助隊を結成するの

であつた・・・

ポケモン不思議のダンジョン

赤の救助隊

青の救助隊の二次創作

プロローグ(前書き)

この前のプロローグはあかんかった
これで・・・(*、´、`) b OK!

プロローグ

プロローグ

青い空、白い雲、輝く太陽

穏やかな晴れた陽気

そんなお昼の草原で

ねっころがって、休む人一人

「・・・平和・・・だよな」

そんな彼がポツンと呟く

「はぁ・・・ここで平和だと逆に暇だよ・・・」

「いつもいつも、同じ事やって、いつも通り過ごす・・・」

「こんなワンパターンな日常、飽きてきた・・・」

「な〜んか、どっかに非日常とか転がってないかな〜」

『非日常・・・ですか』

頭の中に声が聞こえてくる

「わっ！」

突然の声にびっくりした

「な、今は・・・」

周りを見回す

『驚かせてすみません・・・』

ザッ・・・ザッ・・・ザッ・・・

草を足で踏み進む音が聞こえてきた

その音が鳴る方向をじっと見る

ザッ・・・ザッ・・・

音を出している張本人が見えた

黄緑色の髪と細長い手、白い長いスカートのような物が付いている

・・・サーナイト？

「・・・」

『レンさん・・・ですよね？』

「・・・なんで俺の名前知ってるんだ？」

『仲間から聞きました・・・あなたのお仲間から』

「仲間・・・？」

『それより、レンさん、あなたにお願いがあります』

「お願い？」

『はい・・・ある世界が危機が迫っています』

「危機・・・？」

『はい、その世界は、ポケモンの世界です』

「ポケモンの世界・・・？」

『私たちはポケモンの世界を救うために救世主を探しています』

『私たちは、探し続け、ついに見つけたのです』

「俺の事が・・・？」

『そうです、あなたが・・・私達の探し求めた救世主なのです』

「待ってくれ、俺は救世主になれるような力なんてないぞ」

『私達が探して求めたのは見せかけの力ではありません』

『私達が求めたのは真の勇気です』

「真の勇気・・・？」

「俺にはそんな物ないぞ・・・」

『いえ・・・あなたには、あります、真の勇気が・・・』

「・・・」

「一つだけお願いがある」

『なんでしょうか・・・？』

「俺をその世界に送る前に、俺の記憶を消してくれ」

「そして、俺が救世主としてふさわしいか、見極めてくれ」

「もし・・・ふさわしいとわかったら、この事を俺に話してくれ」

『・・・わかりました』

「もう一つ・・・俺をポケモンにしてくれ」

「俺は、他のポケモンと一緒に戦う・・・その方がなんとかなるだろうし・・・」

「できるか・・・？」

『・・・はい、可能です』

「それじゃあ頼む・・・」

『わかりました・・・』

『それじゃあ、お願いします・・・』

俺の周りに光が現れる

・
・
・
い、
意識が
・
・
・

プロローグ（後書き）

、イ。。（）／、イ。。（）／、イ。。（）／
そのまま本編にゴ—

第1話「小さな森の大きな出会い」

ポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊

第1話「小さい森の大きな出会い」

ここは・・・？夢の中・・・？

風がきもちいい・・・

誰かの声が聞こえる・・・

誰だ・・・？

「おきてよ・・・おきてつてば」

「う、うん」

俺は、ゆっくりと体を起こした。

周りは、小さな森だった。

「あ！きがついた！よかつたー」

目の前で、フシギダネが話しかけて・・・え！？

「ポ、ポケモンがしゃべってるー！！」

森に驚きと疑問の叫び声が響いた。

「なにいつてるの？ピカチュウ？」

ピカチュウ？おれにいつてんの？。

「俺はピカチュウじゃない、人間だ」

「ええ！人間！？でも、どっから見てもピカチュウだよ！」

「だから、俺はピカチュウなんかじゃ・・・」

俺は、前に出した手を見て、言葉を失った。

手は、肌色の5本指ではなく、黄色い5本指の手だった。

俺の視線は、手から流れるように体へ動いた。

体も同じで、黄色だった。

これって・・・まさか！

俺は、自分の頭の上をさわった。

先が少しがっついていて、すこし長い・・・これは・・・ピカチュウの・・・耳・・・。

もしかして・・・

俺は、後ろを向いた。

背中には、茶色の模様があった。

お尻からカクカクした形の尻尾が生えていた。

ってこれは・・・

「ピ、ピカチユウになってる〜!!」

今回、二度目の叫び声が森に響いた。

「だ、だいじょうぶ?」

「すこしだめ(汗)」

「ね、ねえ。あなた、どうして、ポケモンになったのかわかる?」

「それは・・・わからない・・・」

「わからないって、どうゆうこと?」

「おぼえないんだ・・・」

森が少しの間、静かになった。

「それじゃあさ、名前は?自分の名前」

俺の名前?名前・・・よかった、これは憶ぼえてる。

「俺の名前はレンだ」

「私の名前はフシギダネよ、よろしくね」

「ああ、よろしく」

第1話「小さな森の大きな出会い」(後書き)

はい！第1話おわかりました！

正直、初なので、緊張してます

何か悪い点ありましたら、指摘おねがいします

第2話「初救助！小さな森でキヤタピーを救え！」

第2話「初救助！小さな森でキヤタピーを救え！」

「ねえ、レン」

「なんだ？」

「レンは人間だった事と、名前しかおぼえてないんだよね？」

「ああ、そうだ」

「それって記憶喪失じゃないかしら？」

記憶喪失か…でもどうして…

そんなことを考えていたら、地震が！

「じ、地震！」

これは結構

「まただわ・・・」

また！？そんなに起きてんのか！？地震！

揺れはだんだん、おさまって行き、揺れはなくなった。

「おさまったわ…」

「フシギダネ、またってどうゆう事？」

「なんか最近地震が多いのよ。」

「そのせいで慣れちゃた（笑）」

慣れるくらい地震がおきてんのかよ！

そんなことをおもっていると、

「だれかー！たすけてくださーい！

バタフリーが飛んできた。

「どうしたんですか？」

フシギダネがバタフリーに聞いた。

「実は私のキヤタピーちゃんがさっき起きた地震でできた地割れに
落っこちちゃたんです。！」

「えー！！！」

「助けにいこうとしても、ポケモン達が襲ってくるんです！」

「ポ、ポケモン達が一！」

「きつと、地割れで自我を失ってるのよ！」

「あの子はまだ幼いから自分では出られないし、私がいっても、襲われて助けにいけないし???オロオロ???」

「大変だ！助けにいこう！」

「ああ！」

「バタフリーさん！その地割れがある所に連れて行ってください！」

「わかりました！こつちです！」

俺達は、バタフリーについて行った。

地割れの前

「ここです！」

バタフリーの指差した場所には大きい地割れがあった。

「おい！キャタピーちゃん！」

フシギダネがキャタピーの事を呼ぶが返事は聞こえなかった。

「これはそうとう深いわね??？」

「こうしちゃいられないわ！行きましょ！レン！」

「ああ！」

俺達の中に入ってしまった。

小さな森

「なんだ？ここ、ダンジョンみたいに入り組んでるな??？」

「ここは不思議のダンジョンみたい・・・」

「不思議のダンジョンってなんだ？」

「不思議のダンジョンっていうのはね、入るたびに地形が変わるダンジョンの事よ」

「ふ〜ん」

話をしているとヒマナッツやポツポが近づいて来た。

「こいつらはもしかして??？」

「バタフリーの言ってたポケモンね」

ヒマナッツとポツポは戦闘体制に入った。

フシギダネも戦闘体制に入った。

「レン、技を使って倒すわよ」

技！？そんな、俺、技のだしかたなんかわからないの؟؟？。
すると、ポツポが俺に攻撃してきた！

「うわぁ！」

俺は攻撃をなんとかよけることができた。

くそ！どうすれば・・・あーも！もうやけだ！。

おれはポツポに突進していった。

すると、俺の走るスピードが上がり、ポツポのたいあたりした！

今のはでんこうせっか！

でんこうせっかでたいあたりをし、バックステップで下がった。

下がった場所の横からもう1体のポツポがたいあたりをしかけてきた！

やばい！

俺はポツポのたいあたりのダメージを少しでも減らそうと、体に力を入れたそのとき！

バチツ・・・

バリバリ！

俺の体から電撃が放たれた！

これがでんきショック！

でんきショックとでんこうせっかがつかえる・・・
よし！

「でんこうせっか！」

俺は、でんこうせっかでポツポにたいあたりし、

「でんきショック！」

でんきショックで攻撃！

ポツポは先頭不能になった

「やるじゃない！レン！」

「さあ、はやく先を急ぎましょ！」

タッタッタツ・・・

「やばいな・・・囲まれた・・・」

「どうするの？」

「分かれて戦うしかないだろ」

「そうね」

「俺は右側、フシギダネは左側の奴らを」

「わかったわ。」

俺は、ポツポ2体ケムツソ2体・・・

「でんこうせっか！」

ドン！

でんこうせっかで、体当たりし、

「でんきショック！」

でんきショックで攻撃！

「つるのむち！」

バシン！

フシギダネは、つるのムチでヒマナツツを攻撃し、

「たいあたり！」

ドン！

体当たりでもう一度攻撃！

「でんきショック！」

バリバリ！

でんきショックでケムツソを攻撃！

でんこうせっかで攻撃しようとした、その時！

ドン！

「痛っ！」

横からポツポが体当たりを仕掛けてきた！

「やったな・・・！」

「でんこうせっか！」

ドン！

俺を攻撃したポツポは、でんこうせつかで倒れた。

「もういないよな・・・」

「そうね」

「さ、もたもたしてるとまた集まってくるわよ！」
タツタツタツ・・・

小さな森 最下層

「え〜ん、お母さんど〜いつ

たの〜」

「助けに来たよ」

「お姉さん達、誰？」

「あなたのお母さんにたのまれてきたのよ。さ、帰りましょ！」

「うん！」

俺たちはキヤタピーを連れて出口へむかった。

「ありがとうございます！ほんと、なんとお礼をいいたらいいか・
・・・」
「そんな、いいですよお礼だなんて」「あの、せめてお名前
だけでも??？」

「私はフシギダネ、それで彼はレンよ」

「カ、カツコイイ・・・」

な、なんか、キラキラした尊敬のまなざしでみてる???

まあ、いいか、ポケモンを助けた後は気持ちいいし。

「ありがとう！レンさん！フシギダネさん！」

「あの、これがせめてものお礼です」俺たちは、バタフリーから、

オレンの実と、モモンの実、そして、チーゴの実をもらった。

「私達はこれで??？」

バタフリーたちは、どこかへさっついていった。

「さっきは手伝ってくれてありがとう！あなた、結構強いよね。」

「それで、これからどうするの?」

「.....」

「ねえ、レン、ちょっとついてきて」

サツサツサツ・・・

俺はフシギダネについていった。

第2話「初救助！小さな森でキャタピーを救え！」（後書き）

今回の教訓

バトルシーンはむずかしい

更新がおそすぎる俺

これからはやく更新できるようにがんばる！

第3話「救助隊結成！チームスターズ」（前書き）

今回、短いです（汗）

第3話「救助隊結成！チームスターズ」

第3話「救助隊結成！チームスターズ」

「ここなんだけど・・・」

フシギダネが案内してくれたのは、木の実の上をかたどった屋根の家の前だった。

「すげえ・・・」

なんでだろう、自分は人間なのに、今はとにかくすごくうれしい！

「あ、レンかんどうしてるね。」

「よかった。ここなら、レンも気に入ると思ったし、なにより、すみやすそうだから」

「・・・それで、よかつたらさ、いっしょに救助隊、やらない？」

「救助隊？」

「救助隊っていうのは、さつきキャタピーちゃんをたすけたでしょ、あんなふう困ってるポケモン達をたすけるのが救助隊なの」

「ふん」

「それで、どうするの？」

「よし、救助隊やろうぜ！」

「うん！」

「それで、救助隊のチーム名はどうする？」

「うん。」

「スターズなんかどう？」

「スターズ・・・いいね！」

「それじゃあ、ちょっとついてきて」

サツサツサツ・・・

「ここは？」

「ポケモン広場よ、ここにはいろいろなお店があるわ」

「カクレオン専門店、ガルーラの倉庫、ペルシアン銀行、コクリン

の連結店などあるわ」

「ふーん」

「まあ、私達がいくのは、ペリッパ―連絡所なんだけどね」
「サツサツサツ・・・」

「あれがペリッパ―連絡所よ」

フシギダネがつるのムチで指した場所には、ペリッパ―の形をした
建物が建っていた。

よくつくれるな・・・

「それと、この掲示板には救助の依頼が載ってるのよ」
ほんとだ、いろいろのってる・・・

「さ、こっこつち」

「あ！待てよ！」

俺たちはペリッパ―連絡所の中へはいつていった。

「えーと、救助隊関連は・・・こつちね」

カウンターの上の案内板を見ていった。

「あー、救助隊になりたいんですけど・・・」

「はい、君たち救助隊になりたいんだね！」

「はい！」

「それじゃあ、これに、名前とチーム名をかいてね」

「チーム、スターズと」

「チームスターズだね、それじゃあ、救助隊になった君達に
プレゼント！」

ペリッパ―は、箱を取り出し、カウンターの upper に乗せた

「あけてみて」

「あ！救助隊バッチ！」

「知ってるんだね、念のため説明しておくね」

「救助隊バッチは、救助隊の証だよ」

「そして、これはどうぐばこ、ダンジョンでひろった道具をしまつ
事ができるよ」

「これで、説明はこれくらいだね、さあ、明日から救助活動、がん

ばってね！」

「はい！」

こうして、俺達の救助隊活動が始まった。

第3話「救助隊結成！チームスターズ」(後書き)

第3話終わりました

たぶん、第4話は結構かかると思います

第4話 救助！でんじはのどぐつ！（前書き）

えー

すごく遅くなってすいませんでした

レン「おい、こんどおそくなったら・・・」

わかったから・・・

そのでんきシヨックやめて・・・

第4話 救助！でんじはのどろくつ！

第4話「救助！でんじはのどろくつ」

「ふぁー、朝か・・・」

「・・・やっぱり、ピカチュウのままだ・・・」

「・・・なんか、気分がさえないな・・・」

「・・・もういつかい寝よ」

俺はもういちど、横になって、寝た。

・・・

「んー、ふう・・・よし、きぶんがさえてきた！」

「ピカチュウのままなのは変わらないけど・・・」

「そういえば、フシギダネと救助隊やるっていつてたな」

「どこにいたんだ？」

俺は外へむかった。

「あー！」

フシギダネが、家の前で寝ていたっていうか、なにやってんだよ・・・

・

「・・・はっ！」

フシギダネが目を覚ましたようだ

「あははは、おはよう、レン」

「おはよう、てか、なんで、ここで寝てたの？」

「レンと救助隊組むから、どうしても眠れなかったから、家の前で

待ってたら、いつの間にか寝ちゃったみたい」

寝ちゃったって・・・

「とりあえず、これから、どうするんだ？」

「うーん・・・あっ！そうだ！ポストになにかあるかも！」

フシギダネは、ポストの中を調べた。

「で、どうだった？」

「なにも・・・」

「そうか・・・」

俺たちが落ち込んでいると、
バサツバサツ

ペリッパーが、こちらに飛んできた。

そして、ポストの上にとまり、ストンつと、手紙をいれた。
すげえ・・・

「なんだろう?」

「レン、ポストの中を見てみて」

「わかった」

俺は、ポストの中を調べた。

ポストには依頼の手紙があった

「お、依頼の手紙だ!」

「ホント!? よんでみて!」

「えーと、

ビビビ、キミタチノコト ハキャタピーチャンカラキイタ

オネガイ ダタスケテホシイ

ワタシタチノ ナカマガタイヘンナコトニナツタ

リユウハ ワカラナイガ

デンジハノドウクツ ニ

フシギナデンパ ガ ナガレテ

コイル トコイルガ クツツイテシマッタノダ

レアコイル トシテ、イキテイクニハ 1ピキタリズ

コノママデハ チユウト ハンパニ ナツテシマウ

タノム タスケニキテクレ

コイル ノ ナカマ ヨリ」

「読みにくい・・・」

「これでもまだいいほうらしいよ。コイルって、だいたい字を書く
ことができないらしいし」

「そうなのか・・・」

「それより、早くでんじはのどつくつにいきましょう」

「そつだな」

俺たちはそつゆつとさつそくでんじはのどくつへむかった

でんじはのどくつ

「オオ！キテクレタカ！ビビビ」

「ナカマハ、コノドウクツノ6Fニイル、ビビビ」

「よし、いこう！」

サツサツサツ・・・

「しかし、どうしてコイルとコイルがくついつたんだろう・・・」

「コイルは、ふしぎな電波が流れたっていったわよね？」

「たしかにいつてたけど、もしかして、ポケモンの仕業とかじゃね

？」

「あくたしかにあるかも」

俺たちがはなしていると、

サツサツサツ・・・

「きたな・・・」

ポケモンたちがやってきた。

コラッタ1匹、ポチエナ2匹、ニドラン 1匹だ

「はやめにおわらせるよ」

「うん」

「でんきショック！」

バリバリ！

でんきショックがコラッタにあたった。

だが、まだ倒れなかった

俺がもう一度コラッタにでんきショックで攻撃しようとしたその時！

ドン！

「いつ！」

うしろからポチエナがたいあたりをしてきた！

「このっ！」

俺はたいあたりをしたポチエナにでんきショックをした！
バリバリ！

ポチエナは、・・・どうやら倒せたようだ
よし、コラッタも・・・

「でんきショック！」

コラッタはどうやら力尽きたようだ

「おわったか・・・」

「だいじょうぶか？」

「うん」

「さあ、早く行こう」

「うん」

サツサツサツ・・・

その後、俺たちは襲ってくるポケモンたちを倒していった。

でんじはのどつくつ 最下層

サツサツ・・・

「あーレン！あれじゃない」

フシギダネがつるのムチで、前を指した。

そこにはコイルがいた。

二匹のコイルがくつついた。

「オーイ、タスケテクレービビビ」

「クツツイテ、ハナレラレナイービビビ」

「レン早くたすけましょ！」

「おう！」

「レンはそつちを、わたしはこつちをひっぱるわ」

「せーのー」

俺とフシギダネはコイルとコイルをひっぱった

・・・ドサア！

「やった！離れた！」

「ワイー、ハナレター！ビビビ」

「とりあえず、外に出よう」

サツサツ・・・

でんじはのどくつ 前

「ワイ、ワイ！」

「ヨカツタナ！オマエタチ！」

「アリガトウ、コイルタチヲタスケテクレテ。」

「いや、当然のことをしたまてだよ」

「コレハオレイダ」

コイルから500ポケ、ふっかつのタネ、チーゴのみをもらった。

「ソレデワ、コレデ・・・」

コイル達はどこかへ去って行った。

「それじゃあ、帰ろうか」

「うん」

サツサツサツ・・・

雷緑基地 前

「今回の救助もうまくいってよかったね」

「そうだな」

「それじゃあ、私、疲れたから、かえるね。おやすみ」

「おやすみ」

サツサツサツ・・・

フシギダネは家の方へ歩いて行った

それじゃあ、俺も帰るか

サツサツサツ・・・

夜

・・・

ここは・・・

夢の中か…

あれ？だれかいる・・・

だれだ・・・知ってる人かな・・・

・・・

駄目だ・・・思い出せない・・・

第4話 救助！でんじはのどろくっ！(後書き)

はい、第4話完

第5話「ポケモン広場へ」(前書き)

今回は短いです(汗)

ごめんなさい

第5話「ポケモン広場へ」

第5話「ポケモン広場へ」

「ふぁー、朝か・・・」

そういえば、変な夢をみてたような・・・

まあ、いいか

さーて、今日も救助がんばろう！

ポストの中に依頼入ってるかなー

俺は、外に出て、ポストを調べた。

「やつほーレン。」

「あ！ポスト調べたんだ！どうだった？」

「実は・・・カラツポだった。」

「ええ！カラツポ！？」

「うーん、そうだね・・・私たち、最近救助隊はじめたばかりだからねえ・・・」

「しかたないからペリッパー連絡所にいきましょう。」

「ペリッパー連絡所？」

「そう、私達が救助隊になるときに行つたでしょ。その時の掲示板に救助の依頼が ありから、それをやりましょ」

サツサツ・・・

ポケモン広場

「あ、そうそうポケモン広場は、いろいろなお店があるんだ」

「たとえば、そこにあるのが、カクレオンのお店、あそこでは、救助に役に立つ道具が売ってあるの」

「向こう側にあるのが、ガルーラ倉庫、あそこには道具を預けることができるの。」

「そして、この奥にあるのが、

ペルシアン銀行、ゴクリンの連結店、プクリンの友達サークルがあるの。

で、その先が、ペリッパ―連絡所があるわ」

「ふーん」

「それじゃ、ペリッパ―連絡所にいきましょう」

「サツサツサツ・・・」

「ペリッパ―連絡所」

「サツサツ・・・」

「これが、救助の依頼がある掲示板よ」

掲示板には、救助の依頼や、オレンのみを持ってきて欲しいなどの依頼があつた

なんか関係ないものがあるけど・・・まあいいか

あれ、これ全部、でんじはのどつくつだ・・・

そうだ！

「それで、どれにするの？」

「じゃあ、これぜんぶにしようぜ」

「ええー！」

「だって、これ全部、でんじはのどつくつつの依頼だし」

「そうだけど・・・んーそうね、がんばって、一流の救助隊になる

には、これくらいのことやらないとね」

「よっしゃ！がんばろうぜ！」

「うん！」

「サツサツサツ・・・」

「・・・」

救助隊基地 前

「はあ、はあ疲れた」

「そりゃあそうよ5個も依頼をこなしたんだから」

「それじゃあ、私はつかれたから帰るね。じゃあね」

「おう、また明日な」

「サツサツサツ・・・」

さて、俺も疲れたから寝るか

「サツサツサツ・・・」

第5話「ポケモン広場へ」(後書き)

次もお楽しみください

第6話 救助！八ガネやま！（前書き）

どうもームウマージですー

遅くなりましたー

すいませんでした

レン「気をつけるとあれほどいったよな・・・」

ごめんごめん

レン「このっ！でんきショッ・・・」

すいみんのたね！

レン「ZZZZ・・・」

それではどうぞ

第6話 救助！八ガネやま！

第6話「救助！八ガネやま」

夜

・・・

また、この夢か・・・

・・・また、人影が・・・

あれ？なんか言ってるような・・・

・・・だめだ、うまく聞き取れない・・・

ゴゴゴゴゴゴ！

地震？

うわっ！激しくなってきた！

・・・夢じゃないな・・・

・・・

朝

「んーふうーよく寝た」

『あのーもしもし？』

声が聞こえる・・・けど、姿は見えないな・・・

『もしもし？あのーアレンさん・・・ですよ？』

やっぱり、誰もいないな・・・

『・・・あつ、もしかして姿が見えない？これは失礼しました！』

すると、突然

ポコッ！

「うわあ！」

床から、なんかでできた！？

「はじめまして、わたしたちダグトリオと、もうします」

「じつは、昨日の夜、地震があったあと・・・。わたしたちの子供のデイグダがエアームドというポケモンにさらわれまして・・・。」

「高い山の頂上に連れ去られたんです。そんな高いところわたした

ちでは、とても上ることはできないし……。ですので、ここはひとつアレンさんにおねがいしたい、というわけなんです。」

「エームドは、とても凶悪なやつです。気を付けてください。なにとぞ、よろしくおねがいます。でわ!」

ダグトリオは、地下に戻って行った。

「……………」

「えーと…………どうしようかな……………」

「しかたない、フシギダネに話すか……………」

サツサツサツ……………」

「おはよう!レン!」

「ああ、おはよう……………」

「ん?どうかしたの?」

「いや、それがな……………」

俺は、家で起きたことを、フシギダネに話した

「…………え!?さつき救助の依頼を受けたって!?!」

『そのとおりです!』

ポコッ!

「うわあ!」

「うおっ!」

またダグトリオがとびだしてきた!?

「わたしたちの子供ディグダがエームドにさらわれたのです!エームドのいる場所はハガネやまノ頂上です!なにとぞ、よろしくおねがいます!ではっ!」

ダグトリオはまた地下にもどっていった。

「…………なるほど…………行こうか……………」

サツサツサツ……………」

ハガネやま

「ここが・・・八ガネやまか・・・」

「なんか、結構高くないか？」

「たしかに高いそうだけど、意外と低いらしいわ」

「へえー・・・」

「さっ、早く行きましょ！」

「そうだな」

サツサツサツ・・・

「ところで、どうしてエアームドはディグダをさらったんだろっ・・・

・・・？」

「さあ・・・」

サツサツサツ・・・

「来た・・・3対か・・・」

ヤジロンが2匹とオニスズメがきたな・・・

「ヤジロンはフシギダネにまかせた・・・」

「レンは、オニスズメを倒して・・・」

「でんきショック！」

オニスズメに、でんきショックを当てた！

飛行には電気だから、でんきショックはこうかばつぐんだ！

こうかばつぐんだから、オニスズメは力尽きたようだ

「よし！」

「つるのムチ！」

ヤジロン達につるのムチを当てた！ヤジロンは、地面タイプ、だから、草タイプはこうかばつぐんのはず！

ヤジロン達は、力尽きたようだ

「やった！」

「さあ、早く頂上に行こう！」

「ええ！」

サツサツサツ・・・

ハガネやま 頂上

「ここが頂上だともうんだけど・・・」

「あーレン！あそこ！」

フシギダネがつるのムチで指した場所には・・・ディグダが！

「おーい！だいじょうぶー？たすけにきたよー！」

「こ・・・こわいです」

「あんたたち！ここに何をしにきたザマス！」

「どこだ！？どこからか声が！？」

「どこにいます！姿を見せろ！」

バサア！

空からエアームドが降りてきた！

「俺たちは、チーム雷緑！ディグダを助けに来た！」

「エアームド！悪さはやめて、ディグダを解放しなさい！」

「何言ってるザマス！悪さをしているのこいつらザマス！」

ディグダが？どうゆうことだ？

「こいつらが地底で暴れているから、地震が起きていて、そのせいで、ワタシは安心してねむれないですよ！」

「はあ！？地底でディグダがあばれてるから、地震がおきてるって・・・もしそうだったら常に地震がおきてるよ・・・」

「そ、それはちがうわよ。たしかに最近地震がおきているけど、ディグダが地底で、暴れるからって、地震は起きないわ」

「うるさいザマス！文句があるなら勝負ザマス！」

「戦うしかないのか・・・」

「つるのムチ！」

「遅いザマス！」

フシギダネのつるのムチがよけられた！

「つつく！」

「イタッ！」

「フシギダネ！だいじょうぶか！」

「いてて・・・なんとかね・・・」

「このつ、でんきシヨック！」

「当たらないザマス！」

クソッ！やっぱり当らない！

「つつく！」

「痛っ！」

「レン！だいじょうぶ！？」

「ああ、大丈夫だ・・・」

どうしよう・・・スピードが早すぎてあたらない・・・

「レン、わたしにまかせて・・・」

タッタッタッ

「つるのムチ！」

「当たらないザマスよ！」

「でんきシヨック！」

「な・・・」

たおせたか？

「うむむ・・・まいったザマスここはいったん逃げるザマス！」

バサア！

エアームドはどこかへ行ったようだ

サッサッ

「おいエアームドは追っ払ったから、だいじょうぶだから、早く降りておいでよー」

「ダ、ダメです。怖くて降りられません…」
「しょうがないわね、助けに行くから待っててね」
「サツサツサツ…」
「ん！？フシギダネ！あぶない！」
「え？うわあ！崖だ！あぶないあぶない…」
「うわあ！この崖、すごい崖だわ！下が見えないわ！」
「まじで下が見えないな…」
「こんな崖に落ちたら、ひとたまりもないな…」
「どうしよう…私のつるのムチでもとどかないし…」
「ビビビ！そうゆう事だったら私たちにまかせろ！」
「あ！あなたたちはこの前のコイルじゃない！」
「話は聞いた我々が空から、助けよう」

「さあ、掴まれ」
「だいじょうぶだ、間違っても感電はしない！」

救助基地前

「うう…僕、とつても怖かったです…」
「ずっと高い所にいたせいでしょうか…まだ足が浮いてる感じなんです…」
「…え？あ、あし？あるの？」
「で、でも、助かったんだし、よかったじゃん」
「はい、みなさんありがとうございます」
『おお！息子よ！たすかったのか！よかったよかった！』
「あれ？どこにも声の主がないけど…」
「声はすれども姿はみえず…この展開どこかでもみたことあるような…」
『…あつもしかして姿が見えない？これはどうも失礼しました』

！」

ボコッ！

「うわっ！」

ダグトリオが地面からとびだしてきた！

「どうもダグトリオです」

「あ！パー」

「デイグダ、心配したぞゲガはなかったか？」

「うん！こわかったけど、大丈夫！レンさんたちのおかげだよ！」

「おかげで助かりました、ありがとうございます」

「お礼ならコイル達にいつてよ、きつと、コイル達がいなかったら、今回の救助は無理だったし」

「それはそれは、コイルさんありがとうございました！」

「いえいえ、ポケモンどうし、助けあうのは当然のことだ」

「これはほんのお礼です」

ダグトリオから、500ポケとモンスカーフとカテキンをもらった
「それでは、レンさん、フシギダネさんありがとうございました！
では！」

ダグトリオ達は、地下へ戻って行った

「それでは我々も・・・」

「あっ！ちよつとまって！」

「なんだ？」

「あのさ、私たちの仲間にならない？」

「仲間？」

「うん。今回の救助はコイル達がいなかったらむりだったし、今後、救助するのにも、仲間が必要だななって、思ってるの」

「ね、レンもそう思うでしょ？」

「まあ、たしかに必要なだな」

「どうかな？私たちの仲間になつてくれないかな？」

「救助隊か・・・なんか楽しそうだな！ビビビ」

「だが、仲間になるには、近くに我々が住む場所がみつようだよな」?

「この辺で、我々がすむ場所があるのか？」

「うーん。それは・・・」

「そうか・・・ないのか・・・」

「しょうがない。残念だが仲間になるのはあきらめてくれ。じゃ、
ビビビ！」

コイル達はどこかへ去って行った

「うーん、ざんねん・・・」

「仲間を増やすためにはポケモンが必要みたいね・・・」

「あ！そうだ！明日ポケモン広場に行ってみようよ！」

「友だちサークルっていうちょっと変わったお店があるんだ」

「ふーん、そんな店があるのか・・・」

「この間広場に言った時はだれもいなかったんだけど、明日になればやってるんじゃないかな？」

「お店の場所はペルシアン銀行の隣なんだ。いつもならプクリンがいるはずだよ」

「そこに行けば仲間にできるような方法があるかもしれないよ！」

「それじゃあ、明日ね！」

「ああ、それじゃあな」

タツタツタツ・・・

「今日は疲れたーさっさと家に帰ってねよう・・・」

夜

・・・

・・・また、あの夢か・・・

あの人がいつたい誰なんだろうか・・・

・・・あれ？こんどは少し聞き取れる・・・

・・・え？人間？役目？

あ、ま、まって。もう少し話を聞かせてよ
・・・うう、だめだ・・・意識が・・・

第6話 救助！ハガネやま！（後書き）

はい！第6話終わりです。

レン「ZZZZ……」

まだ寝てるな……

それでは、次回もよろしくおねがいます！

第7話「仲間をふやすため」(前書き)

どうも、第7話完成です

でわ、どつど!

第7話「仲間をふやすため」

第6話「仲間をふやすため」

次の日の朝

「んーふう」

もう朝か・・・

そういえば今日は、フシギダネとなんか約束してたな・・・
なんだっけ？まあ、会えばわかるか
サツサツサツ・・・

「おっはよう！レン！」

「おはよう」

うう、眠い・・・

「ふぁー」

あ、やべっあくびが・・・

「ぷっ、あははは！どうしたの？そんな寝ぼけた顔して！」

「うう・・・最近変な夢みるんだよ」

「変な夢？それってどんなの？」

「実は・・・」

俺はフシギダネに今まで見た夢の事を話した

「うーん、なるほどね・・・」

「そういえばレンって、実は人間なんだよね」

「うん」

「その夢とレンが人間だったことと関係あるのかな？」

夢と自分が人間だった事との関係か・・・

「・・・ねえレン・・・」

「なんだ？」

「レンは・・・人間に戻りたいの？」
「そういえば、そんなこと考えたことなかったな・・・」
「どうだろうな・・・」
「あれ？悩んでるの？」
「まあ、私と一緒にいる方がたのしいもんね！」
「今日はポケモン広場の友だちサークルに行く約束よね」
「ああ、そうゆう約束だったな・・・」
「さ、早く行きましょ」
「サツサツサツ・・・」

ポケモン広場

「サツサツサツ・・・」
「ここね」
「すみません」
「ボク 友達 だいすき！」
「ここは プクリンの友だちサークルだよ！」
「あれ？ここはじめて？」
「そうか！君たち救助隊をはじめたんだね！」
「だったらここはピツタリ！ここは救助隊の仲間を増やすための友だちエリアが買えるんだ」
「君たちははじめてだから、ともだちエリアを1つサービスしてあげる！」
「1つサービスか。気前がいいな・・・」
「さあ、この中から選んでね」
「プクリンは、厚い本を机の上に出したこの中からか・・・大変だな・・・」
「どうしようかな？レン」
「ビビビ！雷緑じゃないか」
「あ、あなたたちはでんじはのどくつにいたコイル達じゃない！」

「そつだ！住むところがあれば、仲間になつてくれるのよね？」

「ああ、そつだが？」

「それじゃ決まり！ねえ、コイルが住める場所をお願い！」

「おっけー、それじゃあ、ここなんかどう？」

分厚い本の中から、何ページ目か開いて、コイルに見せた

「ここなんかどうかな？」

「おお！ここがいいな！ここで頼む！」

「おっけー、今日からここがコイルの住む場所だよ！」

「やったー！仲間が増えたー！」

「これから、よろしくね！」

「ビビビ！よろしくな！ビビビ」

サツサツサツ・・・

「こんどからは、ちゃんとかってねー」

「あれ？ポケモン達が集まつてる。なんだろう？」

「仲間を助けてください！おねがいますっ！」

ワタツコが、ダーテングに救助を頼んでんのかな？

「ダメだ！そんなに引き受けれるか！！」

「でも、どうしても風が必要なんです！おねがいです！」

「ねえ、どうかしたの？」

フシギダネがハスブレロに聞いた

「ん？あの騒ぎか？」

「ワタツコがダーテングに救助をたのんでんだけど、

あいつ、お金を沢山貰わないと、ひきうけないんだよ」

「ワタツコもあんなに、頼んでるのに、かわいそつだよな...

よこしまポケモンなだけは、あるな・・・

「まてっ！...！」

誰だ？

「お、お前たちは!？」

ダーテングが動揺してる？

「おおフーデインだ！」

あれは、念力ポケモンのフーデイン、鎧ポケモンのバンギラス、火炎ポケモンのリザードンだ・・・

「ワタツコは、お前の風が必要なんだ。風を起こすぐらい、お前のそのうちわだったたら、簡単だろ？」

「うっ・・・わかったよ！」

「すげえ・・・」

「あのダーテングがおとなしく言う事聞いたぞ・・・」

「ねえ、ハスブレロ、あの人達は？」

「おまえら、しらねーのか!？ここらじゃ、有名な救助隊のチームFLBだぞ！」

「リザードンは、かえんほうしゃで山をもとかし、バンギラスは鎧の体とパワーが自慢」

「そして、救助隊リーダーのフーデインは力技をこのまず超能力で勝負する。」

「IQ5000のスーパー頭脳の持ち主で、世の中の出来事は全部記憶しているらしい」

「命令するのはすべてフーデインだ。いわばチームの司令塔だな」

「あ、ありがとうございました。」

「いや、当然のこと」

「また、あのような事があつたら、ワシにいいなさい」

「カ カッコイイ・・・」

「さすが ゴールドランクの救助隊だ・・・」

フリーデンがこっちに来てる。たぶん、ペリッパ―連絡所に行くの
だろう」

「サツサツサツ・・・」

「!?!」

フリーデンが突然振り返ってきた!

「うわぁ!」

「どうかしたか?フリーデン」

「・・・いや、なんでもない」

「いくぞ」

「サツサツサツ・・・」

「ひゃ〜!びつくりした!」

「ねえ、ハスブレロ」

「なんで、俺の後ろに隠れるん?」

「わぁ!ごめんごめん!」

「か、かあっこいい・・・」

「レン!僕たちも負けてられないよ!」

「がんばって早く1流の救助隊になろうね!」

「ああ!」

その時、俺は変な視線を感じたが、気にしなかった
でも、その視線は、確かなもので、木の陰から見てきた
小さく、少しだけその主の声が聞こえた

「そうはさせるかよっ!ケケッ!」

第7話「仲間をふやすため」(後書き)

はい、7話終わりです

なんか、最後にホラー演出がありました

これは、ちよつと、怪談をききながら、見てましたので、
なんか、感覚的に書いてしまったのかもしれない(笑)
まあ、次もよろしくおねがいします

第8話「悪の救助隊 イジワルズ登場！」（前書き）

なんだろう・・・最近、星の救助隊の更新がめちゃ早くなっている・・・

まあ・・・いいが、

でわ、第8話どうぞ！

第8話「悪の救助隊 イジワルズ登場！」

第8話「悪の救助隊 イジワルズ登場！」
次の朝・・・

「おはよう！レン」

「おはよう」

「ここかい？雷緑つて、チームがあるのは？」

「ここ、なんにもねえぜ？」

「ケツ、こんな所で救助隊やるうなんて、信じられねえぜ」
「なんだ？あいつら・・・」

「あなたたちは？」

「あつ！こんな所にポストが！」

「ホントだ！中見ちゃおうぜ！」

「ちよつと！なにしてんのよ！」

「おお！救助の依頼入ってる！」

「これはおいしいわねえ」

「みんないたたく事にするか」

「ちよつと！それは、私たちの物よ！」

「横取りしないで頂戴！」

「ケツ誰がやったつて、解決すりゃいいじゃねえか！」

「そうゆう問題じゃないわよ！」

「だいたい、あんたたちはなんなのよ！」

「あたしたちも救助隊なのよん」

「といつても、ホントは悪いことしかしてないんだけどな」

「ほら！救助隊つてタテマエがあった方がなにかと、ごまかしがきくだろ？」

「アタシたち世界征服をたくらんでいるのよん」

「せ・・・世界征服ー！！！」

世界征服って・・・いまさら・・・そんなこと・・・」

「ケケツそうよ」

「そのために金を稼いで仲間も集めてるのよん」

「世界を我が物にするためにな！」

「人呼んで、悪の救助隊 人読んで、イジワルズとは、俺たちの事だ！」

「じゃ、またな！ケケツ！」

「あつ、まてや！」

タタタ・・・

くそ、早い！

「いつちやった・・・」

「ねえ、ポストの中・・・」

俺は、ポストの中を見た

「あつ！依頼が・・・依頼が全部持ってかれた！！！」

「そんな・・・全部もってかれちゃたの・・・？」

「そんな、落ち込んでも仕方ないこれからどうするか考えよう・・・」

┌

俺たちが、これから、どうするか、悩んでいると・・・

バサツ、バサツ・・・

スコンスコン

バサツバサツ・・・

「よかつたー、ペリッパーが依頼が持ってきたから、なんとか、救助続けることができるわ！」

「しかし、あいつら・・・今度あったら、承知しないんだからね！

！（怒）

「ああ、俺もだ！！！」

そんな事があつたけど、無事に、救助をすることはできたけど、あんなことがあつたせいか、めちやくちや疲れた・・・

「それじゃあね！レンまた明日！」

「ああ、またな」

サツサツサツ・・・

はあ・・・マジ疲れた・・・

早く寝よ・・・

第8話「悪の救助隊 イジワルズ登場！」（後書き）

第8話終わりましたー

それでわ、次回もよろしくお願いします！

第9話「対決！イジワルズ！」（前書き）

ほんとすいませんでした！！

レン「あやまってすむもんじゃないだろ！これ！」

今度から気をつけるから！ねっ？ねっ？

レン「たく・・・そういつてまた更新が遅れるんだよな・・・」

う・・・

フシギダネ「この2人はほっといて、第9話どうぞ！！」

第9話「対決！イジワルズ！」

第9話「対決！イジワルズ！」

次の朝・・・

「レン、おはよう！」

「おう！おはよう！」

「レンさん！フシギダネさん！」

あれ？この声聞き覚えが・・・

「ん？この声は、キャタピーちゃんじゃない！ひさしぶりね！」

「あ・・・」

「ん？どうかしたの？」

「お願いです！友達を助けてください！」

「え？」

「実は、友達のトランセルくんと一緒に遊んでただけ・・・」

「トランセル君が森で迷っちゃって出れなくなっちゃんです！」

「ほおお それはたいへんだな。ケケツ！」

「あつ！あんた達は！？」

「イジワルズ！なんでお前らがここに！」

「トランセル君は俺達がたすけてやるう」

「なにいつてんのよ！キャタピーちゃんは私たちにたのんでのよ
！」

「そんなこといっても、お前たちの実力で助けられると思うのか？」

「なんだと！」

「誰が助けようとか関係ないね」

「助けた奴が偉いのさ」

「なあキャタピーちゃんこうしないか？」

「どちらか先にトランセル君助けたチームにお礼をあげるとい
うのはどうか？」

「え・・・そんな・・・ボクお金もってないです・・・」

「そんなの心配しないでいいよ」

「お金なら、あとでお母さんから、ガツポリもらっからさ！ケケツ
！」

「そうだ、ついでに俺達の仲間にもなってもらおう」

「キヤタピーちゃん仲間になったら、イジワルズも幹部にしてあげるからねケケケツ！」

「ちょっと！救助隊のくせに、そんなことして、恥ずかしくないの
！」

「ケケツ！恥ずかしくなんかね！」

「そうゆうわけだフシギダネ！先に助けたほうが勝ちだからな！」

「おい、行くぞ！さっさと終わらせようぜ！」

「あ！まて！」

タツタツタツ・・・

くそっ！また逃げられた！！

・・・

「どうしよう・・・僕お金もってないし・・・」

「イジワルズにはいるのも嫌です・・・」

「おねがいです！レンさん！フシギダネさん！トランセル君を助けてください！」

「心配しないで！私たちが、絶対先にトランセル君を助けてあげる
！」

「レン！速く行きましょ！」

「おう！」

タツタツタツ・・・

怪しい森 入り口

「ここがトランセル君の迷った森か・・・」

「暗いな・・・俺、暗い所嫌いなんだよな・・・」

「そんな事いつてないで、さっさと行くわよ！」

「ちよ、引つ張るなつて！」

怪しい森

「うう．．．怖い．．．」

自分で、さつさと行こうって言ったのに、怖がつてるよ．．．

「はあ．．．」

がさがさ！

「ひい！」

草むらから、ナゾノクサが飛び出してきただけなんだが．．．

「だ、だいじょうだつて、ナゾノクサが飛び出してきただけだつて」

「え．．．ほ、ほんとだ．．．」

「もう！驚かせないでよ！」

バシン！

あ．．．ナゾノクサが、フシギダネのつるのムチにやられた．．．

しかも、一撃で．．．

「だ、だいじょうぶか？」

「う、うん．．．」

「は、速く行こう」

「そ、そうね．．．」

サツサツサツ．．．

フシギダネ．．．以外に、怖がりなんだな．．．

その後も、同じやりとりが、何回か繰り返されたけど、無事最上階に着くことができた

怪しい森 最上階

「だいぶ、奥まできたわね．．．」

「ああ．．．たぶんこの先が、一番奥だと思うんだが．．．」

「それじゃあ、先に行きましょう！」

俺達が、先に進もうとした、その時

『ちよつとまったー!!』

タタタタ!

ゲンガー達が、前に立ちはだかつてきた!

「ケケツ! トランセルを助けるのはこの俺達だ!」

「ここから先は・・・行かせるわけには、いかねえなあ!」

「な、なんで、私たちの邪魔をするのよ!」

「アラ? 言わなかった? あたし達世界征服するって」

「キヤタピーのお母さんから、お金をたんまりいただいて・・・」

「キヤタピーも仲間にできれば・・・また、一步野望に近づくって
もんよ」

「ケケツ! そのために、お前達は邪魔なのさ!」

「悪いがここにくたばってもらうぜ!」

「覚悟しな! チームスターズ!」

「したでなめる!」

「ふん! そんなのあたるかよ!」

「どくばり!」

突然、横から、鋭いものが刺さった

「いつ!」

「アーボか!」

「でんこうせつか!」

「まずは、アーボから倒す!

「ねんりき!」

でんこうせつかで、アーボに突進していると、突然俺の体が止まった

「レンをはなしなさい!」

「つるのムチ!」

「バシッ!

俺の体が自由になった! これでいける!

「でんこうせつか!」

タタタタ！

ドシン！

「があ！」

「うらみ！」

ゲンガーがうらみを仕掛けてきた！

うらみは、技PPをゼロにする技！つまり、でんごうせつかのPPがなくなつた！

強いぞ・・・こいつら・・・

「ほのおのパンチ！」

「きゃあ！」

「フシギダネ！」

まずい！ほのおのパンチは炎タイプの技！草タイプのフシギダネには、相性がわるい！！

「うう・・・」

「大丈夫か！」

「なん・・・とか・・・」

「フシギダネ！これを食べえ！」

俺は、道具箱から、オレンの実を出してフシギダネに投げ渡した

「他人の心配より、自分の心配をしたほうがいいんじゃないかしら？」

「炎のパンチ！」

やべっ！避けれない！

ドオン！

「ぐあ！」

いってえ・・・

「かみつく！」

ガブ！

「ぐう！」

くそ・・・やればなしで終われるかあ！

バチッ・・・

「でんきショック！」

バリバリ！

「ぐあああ！！！」

俺のでんきショックをまともに食らったな・・・

アーボは、力尽きたようだ

これで、あと2人！

「フシギダネ！行くぞ！」

「うん！」

タツタツタツ！

「ふん、2人同時にかかってきて勝てるんでも思ってるのかしら」

「さいみんじゅつ！」

俺をねらってきてる！

ゲンガーの催眠術が俺に直撃した・・・

「くそ・・・」

バタツ・・・

く・・・眠くなって・・・

ドン！

背中に、なにか叩きつけられたような痛みがっ！

「レ・・・ン！」

フシギダネ・・・

「レン！起きなさいよ！」

「うう・・・」

なんとか、目を覚ました

「フフン 今、目を覚まさせてあげるわ」

「ほのおのパンチ！」

ドオン！

「うぐっ！」

空中に高く舞上げられた

チャーレムがこつちに向かってきた！

このままじゃ、地面にたたきつけられる・・・！

やられてたまるか！

バチツ・・・

「でんきショックー！」

バリバリ！

「きゃあああー！」

よし・・・チャーレムにでんきショックを当てれた！

「おらああああ」

このまま地面に突き落としてやる！！

ドゴオン！！

タツ

チャーレムは力尽きたようだ

あとはゲンガーのみ！！

「もうやられりまったのか！みんな！」

「そうよ・・・あとはあんただけよ！ゲンガー」

「さあ！諦める！」

「ケケツ！やだね！」

「催眠術！」

またか！

今度はフシギダネを狙ってるのか

なら、おれはサツサツと俺がかたずけてやるぜ！

タタタタタ！！

「でんきショックー！」

バリバリ！！

「ぐあああああー！」

「はあ・・・はあ・・・」

「倒したわ！」

「ちくしょー！覚えてろよオ！！！」
「タツタツタツ！」

「ゲンガー達はどこかへ走って行った」

「さ、邪魔者もいなくなっただし、トランセル君を探しましょ」
「そうだな」

「あの〜」

「もしかして、助けに来てくれたんですか？」

「あ、君がトランセル君だね」

「さあ、帰りましょ！キヤタピーちゃんが心配してたわよ」
「わーい！」

「サツサツサツ・・・」

「スターズ救助基地 前」

「ありがとうございます！」

「よかったね！トランセルくん！」

「ありがとう！キヤタピーちゃん」

「ホントにありがとう！レンさん フシギダネさん！」

「でも・・・僕お金持ってないです・・・」

「いいよいいよお礼なんてさ」

「うう・・・せめて、なにかくれよオ・・・」

「それよりトランセルくんが助かってよかったわね！」

「か、かつこいい・・・」

「僕、ますますあこがれちゃいました！！」

「僕も大きくなったら救助隊やりたいです！」

「フフ、それは楽しみね！キャタピーちゃん頑張ってるね！
「はい！！！」

「あ！そうだわ！私ね、いつも考えてたんだけど・・・」

「この家を改築して、もっと立派な救助基地を作りましょうよ！」

「お、いいなそれ！」

「それイイですね！！！」

「僕も大きくなったらここで働きたいです！」

「ボ、僕も！」

「それじゃあ決まりね！」

「僕たちの救助基地、絶対完成させましょうね！！！」

『おおー！！！！』

「それでは、レンさん、フシギダネさん ありがとうございました
！」

「それじゃあね！気をつけて帰ってね！」

「はあ・・・タダ働きはもうしたくないわ・・・」

「でも、ゲンガーをぎゃふんといわせたから、まあいいかしら」

「レン、今日は疲れたから帰るはね！」

「また明日も頑張りますよね！」

「それじゃあねー」

「じゃあなー」

タッタッタツ・・・

さ、俺はさっさと寝よう

ゲンガー達にやられた所がまだずきずきする・・・

サツサツサツ・・・

第9話「対決！イジワルズ！」（後書き）

はい！第9話完了です！

ちゃんと気をつけますんでゆるしてください！

第10話「救助！沈黙の谷　そして・・・」（前書き）

はい第10話完成です！

それでは、どつど！

第10話「救助！沈黙の谷　そして・・・」

第10話「救助！沈黙の谷　そして・・・」

朝

「んーよく寝たー」

さてと、今日も、頑張っていくか！
サツサツサツ・・・

「おっはよー！レン！」

「おう！おはようフシギダネ！」

「あのーすみません」

「ん？誰かな？」

振り返ると、ワタッコがいた

「あのー・・・救助隊スターズはこちらでしょうか？」

「そうよ、あ、あなたはたしか・・・」

「仲間を助けてください！おねがいしますっ！」

「ダメだ！そんなんで、引き受けられるか！」

「でも、どうしても、あなたの風が必要なんです！おねがいします
！！」

「あ、思い出した！広場で、ダーテングに頼みこんでいたワタッコ

だ！

「ダーテングが救助を引き受けた僕たち見てたよ」

「その・・・ダーテングさんの事なんですか・・・」

「救助に行ったきりで、戻ってこないのです・・・」

「なんだって!？」

「仲間のワタツコが岩場に挟まって動けなくなってたんです」

「私たちワタツコは、風に乗ればどこにでも行けるのですが・・・」

「空は雷雲でいっぱいなのですが、なぜか風が吹かないのです」

「風が・・・吹かない? 変だな・・・それは・・・」

「だから、ダーテングは葉っぱのうちわで強風を巻き起こせるので、その風でなかまを助けてもらおうと

頼んだのですが・・・」

「でも、ダーテングは帰ってこない・・・こうゆうことね?」

「はい・・・」

「そんなに難しそうな救助でもなさそうだし、確かに変だよね・・・」

「それじゃあ、レン・・・まあ、レンもわかってるよね」

「もちろんだ」

「よし、僕たちが探しに行くよ!」

「ホ、ホントですか!?! ありがとうございます!」

「うん! だいじょうぶ! まかせて!」

「行きますよ! レン!」

「ダーテングさんが、救助に行ったのは沈黙の谷です」

「すみせんがお願いします・・・」

沈黙の谷 入口

「ここが、沈黙の谷か・・・」

フシギダネが下を覗いた

「うわぁ・・・すごいガケね・・・」

「さすが、谷って言う程の高さがあるな・・・」
「それで、この谷の奥に仲間のワタッコがいるんだね？」
「そうです・・・すいませんおねがいします」
「だいじょうぶ、まかせて！」
「行きましょ！レン」
「おう！」
「・・・あ、あのー！」
ワタッコに止められた
「ん？どうかしたの？」
「じ、実はいいわすれた事が・・・」
「ここは沈黙の谷とゆう場所なんです・・・」
「ここには恐ろしい怪物が眠っているとゆううわさがあるんです」
「瞬間、時間が止まった気がした」
「か、かいぶつー！」
「い、いえ！あくまでも・・・言い伝えなんです」
「でも、ダーテングさんもどつてこないし・・・」
「一応、お伝えしたいほうがいいかなと思ひまして・・・」
「うう、イタタタ急におなかが・・・」
「！ど、どういたんですか！？」
「い、いやおなかが急に痛くなっちゃって・・・イタタタ！」
「ど、どうやたら朝に食べたものが悪かったみたい・・・」
「いったいなに食べたならこんな時にこうなる！！」
「レンも、お腹痛いよね？」
フシギダネ・・・
俺はフシギダネにゆっくり近づいて
「フシギダネ、あきらめろー！」
「ええ・・・レン裏切らないですよ・・・」
「いやだね、てか、どちらにしろ行くんだから」
「うう・・・」
「あ、あのー・・・だいじょうぶですか？」

「え・・・あ、う、うん、だ、だいじょうぶ！」
「ハハハハ・・・」
「ち、ちなみにその怪物ってどんな奴なの？」
「私もよく知らないんです・・・」
「なにせ、言い伝えですしるかどうかも・・・」
「そっか・・・」
「その怪物がいないことを祈りつついつてくるよ」
「仲間のワタツコは、一番下にいると思います。気をつけて!!」
「うん！わかつたわ！」
「それじゃ、行きましょ！レン」
「お、おう・・・」
「まったく・・・フシギダネがこんなの信じるタイプだったのかよ・・・」
タツタツタツ・・・

沈黙の谷

「もう!どうしてあそこで、一緒に同じことしてくれなかったのよ
お!!--」
「だって、どうせ今日がやらずに明日に延期されんじゃねーの？」
「ぐう・・・」
「そ、それに、怪物がいるかも知れないのよ!」
「たくう・・・そんなのいるわけないだろ？」
「どうせ、怪物って言っても、言い伝えだし、もしいたとしても、
なんか、デカイポケモンとかだろ？」
「・・・」
フシギダネ、黙り込んだ

「おい、来たぞ・・・」
ヤンヤンマや、カモネギが近づいて来てる

「でんきショック！」
バリバリ！

カモネギにあたって、一発で撃沈
まあ、飛行タイプは、でんきタイプに弱いからな・・・
それじゃ、もういつちよ

「でんきショック！」

ヤンヤンマに当たった

まあ・・・これも・・・一撃だよな・・・
「・・・」

まだ、黙り込んで・・・
いつまで、黙ってるやら・・・

沈黙の谷 最下階

おそらく、ここが一番下だな

「あつ、君がワタツコだね」

「助けにきたぜ、だいじょうぶか？」

「はい・・・私は、平気ですが・・・」

「よかった、仲間がまつてるよ」

「それが・・・奥に、ダーテングが・・・」

「そうかダーテングが奥に・・・」

「行こう！」

タッタタッタ・・・

ダーテングが倒れている！

「だ、だいじょうぶか！しっかりしろ！」

「・・・ぐう俺の事は、いい。早く・・・逃げろ！」

「に、逃げろってどうゆう事だよ！！」

！？急に真つ暗になった！

「な、なんだ！？まっくらでなにも見えない！」

ギヤオオオオオオオ！！

「ひゃあ！か、怪物う！！」

「ま、まさか！」

「き、きたっ！早く・・・逃げる！」

『どけ！貴様ら』

『コイツは私の眠りを妨げたのだ！！』

『邪魔する奴は容赦しない！もちろん貴様らもな！』

何回も、フラッシュして、声の主がなんとか見えた・・・
黄色い体、宙を舞う姿　まさかあいつは・・・

ギャオオオオオオ！！

一瞬で、光が充満し、とても目を開けてはいられなかった

「ダ、ダーテングがいない！！」

目を開けた時には、ダーテングは居なく、代わりに、黄色い体をもつポケモンがいた

「わが名はサンダー！いかずちのつかさ！」

「ダーテングを、助けたくば、雷鳴の山にこい！」

ギャオオオオオオ！！

「サンダー・・・」

「あ、あれが、怪物なの・・・」

「サンダーは伝説のポケモン・・・怪物って言われても、否定は出来ない・・・」

・・・

「とりあえず、戻りましょ・・・」

「ああ・・・」

サツサツサツ・・・

救助基地（仮）　前

「わーい！助かったんだあ！よかったあ！」

「でも、私が助かった代わりにダーテングさんが・・・」

「ワタツコ、教えて、いったいなにがあったの？」

「はい、分かりました・・・」

「ダーテングさんは、うちわで風を起こし・・・」

「岩場にいた私を助けてくれたんです」

「ここまで、よかったです・・・」

「ダーテングさんの出した風がかみなり雲を二つに切り裂き・・・」

「その時、あの怪物が姿を現したんです」

「アイツ、サンダーとか、いつてたよね・・・」

「サンダーだと!？」

突然、横から声がした。聞いたことのある声だった

それは・・・

「フ、フリーデン！」

チームFLBのフリーデンだった

「サンダー・・・伝説の鳥ポケモンの一つだ」

「ずっと、眠っていたと聞いたが・・・」

「ダーテングが起こしちゃったってわけね？」

「いや、ダーテングの風はきっかけに過ぎない」

「そもそも、沈黙の谷に風が起きない事自体がおかしかった」

たしかに、谷だったら、空気の流れで風が起きても変ではない

「すべては最近よく起きている自然災害が原因であるう」

「眠りを妨げられたサンダーは怒っている」

「ダーテングを助けなければ・・・」

「奴は、強い、でんげきを食らえば、大ダメージを受けるかもしれない」

「わかっている。慎重に行かなくては・・・」

「ダーテングを助けに行くなら俺達もいくぜ！」

「だめだ！危険すぎる！」

「サンダーは強い、お前達の実力ではムリだ！」
「な、なんでよ！私達そんなに弱くないわよ！」
「それに、サンダーなんて怖くないわ！ね！レン！」
「ああ、もちろんだ！」
「お前、電撃を食らったことあるか？」
「ものすごく、痺れるんだぞ！？」
「俺・・・でんきタイプですが？」
「いや、俺、電気タイプだし・・・」
「サンダーはすごいぞ！お前のことなんか、食べちゃうかもしれな
いんだぞ？」
「へっ、そんなの俺のでんこうせっかで避けてやんよ！」
「僕達だって、救助隊なんだ！」
「ダーテングを助けたいんだ！」
「・・・」
「わかった・・・お前達の勇氣、認めてやろう」
「雷鳴の山へは、ワシたちとお前らで2チーム別行動で行くぞ」
「ワシたちは戦う準備を整えてから行くことにする」
「相手の力を考えると慎重にならざるを得ない」
「お前達も準備が出来次第、雷鳴の山へ迎え」
「目指すはダーテング救助だ！共に頑張ろう！」
よし、燃えてきたぜ！
「レン！私達も頑張りますよ！」
「とりあえず、今日のところは休もう」
「そうね！それじゃあ、お休み」
「おう！じゃあな！」
タッタッタ・・・
「それでは、ワシたちも、今日は、休むか」
「そうだな」
サツサツサツ・・・
フシギダネとフリーデン達も、立ち去って行った

さて、俺も眠るかな・・・
はぁ・・・疲れたぁ・・・
サツサツサツ・・・

第10話「救助！沈黙の谷　そして・・・」（後書き）

はい、第10話完了です！

第11話は、サンダーと対決！

お楽しみにー

第11話「対決！サンダー！」（前書き）

やっと・・・やっとできたぞおおおお！
第11話ぜひぞぞぞ！

第11話「対決！サンダー！」

第11話「対決！サンダー！」

朝

「あはよう！レン！」

「おう！おはよう！」

「さてと、今日は、ダーテングを救助するために雷鳴の山へ行くんだよね？」

「でも、フリーディンは、ちゃんと、準備をしてから、行けって言っ
てたし……」

「どうする？雷鳴の山へは、すぐでも、あとでもどちらでもいいわ
よ？」

「それじゃあ、今すぐ行くか」
タッタッタツ……

雷鳴の山 ふもと

「ここが雷鳴の山のふもとね」

「フリーディン達、もう向ってるのかな……」

「サンダーか……伝説のポケモンなんだよね……」

「うう……怖い……」

「いや、怖がってなんかいけないわ！」

「目標はダーテングの救助！」

「レン！がんばろ！」

「おう！」

タッタッタツ……

早速ピンチだな・・・

ビードル1体サボネア2体・・・

「どうする？」

「フシギダネは、ビードルを頼む」

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

でんきショックはサボネアにあたった

さすがに、一発で倒れたり・・・って、倒れちゃったよ・・・

ドスツ！

そんな事を考えていると、横から、鋭い痛みが来た

「痛っ！」

もう一体のサボネアが、毒針を放ってきたらしい

それじゃあ、でんきショックで・・・

「うぐっ・・・」

体の力が入らない・・・

サボネアの毒針でやられたらしい・・・

顔をあげると、もう目の前にはサボネアは居なかった

後ろにいるな・・・

突然、体の力が吸い取られるような感覚を感じた

「くそ・・・」

だんだん、意識が朦朧と・・・

「レン！」

バシン！

フシギダネがサボネアを倒したようだ

「レン！だいじょうぶ！？」

「ああ・・・な、なんとか・・・」

ゴソゴソ・・・

フシギダネはバックからオレンのみとモモンのみを取り出してくれた

「あ、ありがとう・・・」

「ふう……」

「だいじょうぶ？」

「ああ、おかげさんで」

「そう、よかった」

「？フシギダネ、あの箱……」

さっきまで気がつかなかったが目の前に青い色の箱が落ちていた

「ああ……これね、連結箱って言うらしいわ」

「連結箱？」

「技の連結をしたりだとかできるみたい」

技の連結……ああ……ゴクリンの連結店の奴か……

「レン……使ってみる？」

「……そうだな……ために……」

雷鳴の山 頂上

「ここが頂上ね……」

「おい！サンダー！でできなさい！」

ギヤオオオオオオ！！

バサア！

空から、サンダーが降りてきた！

「わわっ！」

「行ったはずだ！邪魔をする奴は容赦はせんとな！」

「こわくなんか……ないわ！」

「サンダー！ダーテングを返しなさい！！！」

「私たちは、救助隊よ！！！」

「ほお・・・そこまで言うのなら我怒り・・・貴様らに向けてやる
う!!」

ギヤオオオオオ!!

「高速移動!」

サンダーの奴、厄介な技を!

サツ!

し、しかも早い!

バチツ・・・バチツ

「くらえ!我怒りを!でんきショック!!」

バリバリ!!

「ぐあああ!!」

「ぐっ・・・」

サンダーのでんきショック俺のでんきショックより、遙かに強い!!

「レン!だいじょうぶ!!」

「ああ・・・だいじょう・・・!!」

「フ、フシギダネ!後ろ!!」

「えっ・・・」

「人の心配より、自分の心配をしたらどうだ?」

「つつく!!」

ドスツ

「きゃあっ!!」

まずい!つつくは飛行タイプの技!草タイプのフシギダネにはダメ
ージが大きい!

「フ、フシギダネ!!」

「うう・・・」

「だ、だいじょうぶか!?」

「なん・・・とか」

「フン!貴様らが私と戦うなど、10年早いわ!!」

「くそっ……」

ガサガサ……

バックから、オレンのみを取り出して、フシギダネに渡した
サツサツ……

「くらえ！ たたきつける！」

「フン！ 遅いわ！」

サツ！

バシン！！

やっぱり、普通に攻撃しようとしても避けられちまうか……
バチツバチツ

「くらえ！ 我でんきショックを！」

バリバリ！

「ぐあああ！」

くそっ……

体力が……

ガサガサ……

オレンのみを取り出し、口に入れた

「どうした？ さっきの威勢は？」

「うるせえな……」

「今から……本気出してやるよ！」

「フシギダネ……立てるか？」

「う、うん」

「そうか……それじゃあ……いくぞ……！」
タツタツタツ

「ふん！ 二人同時にかかるうと同じ事だ！」

「くらえ！ たたきつける！」

「なんどいつたら分かる！ 無駄だ！」

サツ！

「無駄なんかじゃないわよ……！」

バシン！！

「ぐっ……やるな……だが、隙が大きすぎる！」

「つつく！」

ドスッ！

「きゃあああ！」

「フシギダネ！！」

「まだ……大丈夫よ……」

「くらえ……つるの……むち！！」

バシン！！！！

「ぐああ！くっ……」

フシギダネの渾身の一撃はサンダーに当たった！

「まだだ……！」

「サンダー！これで最後だ！でんき……ショック！！」

バリバリ！！

「ぐああああ！」

「や、やったか？」

「はあ……まだやられん！！」

まだ立つのか！！

突然、俺の体が動いた

そして、全速力でサンダーに走って行った

これは……でんこうせつか！！

ドン！！

「がはあ！」

ドサア……

ついに……倒したか……

「はあ……はあ……」

さっきの攻撃で力を全部使い切った……

もう立っていられず、その場に座り込んでしまった

「レン……倒し……たの？」

「ああ……そうさ、倒したよ」

「ほら、フシギダネ、オレンのみだ」
「あ、ありがとう・・・」

「こ、これは！」

フリーデン・・・遅いすぎるぜ・・・

「くう・・・うお！」

「くるか！今度は俺達が相手だ！！」

「待て、もう戦うのはやめだ！！」

「だいぶ頭が冷えたようだ、ダーテングは返してやるう・・・」

「小僧ども。なかなかやるな・・・」

「だが、次はこうはいかぬ！」

「次に戦う時は本気で戦おう！それまで、腕を磨く事だな！」

ギヤオオオオオオオ！

バサア！！

サンダーが飛び立ったその時、周りが光に包まれ、その光が消えた
ときには、ダーテングが目の前に倒れていた

「あつ！ダーテング！」

「だ、だいじょうぶか？」

「あ・・・ああ、なんとか・・・な」

「良かったわ！無事で！」

「しかし、驚いたな・・・あのサンダーを追いはらっちまうなんて
・・・」

「たしかに・・・」

「お前、ピカチュウにしちゃ強いな・・・」

「・・・」

「前に、あった時にも感じたのだが・・・」

「おぬし・・・もしかやポケモンではないな？」

えっ？

「え、ええ〜！な、なんでわかったの!?」

「その通りよ！レンはポケモンなんかじゃない、レンは人間なんだ
!！」

「な、なんと！」

「人間だと！」

「だ、だが、そんな事ありえるのか？」

「レンもわからないらしいわ」

「気がついた時にはポケモンになっちゃって・・・」

「人間だったときのことも分からないらしいの・・・」

「そうだわ！フーディンなら、レンがポケモンになった理由もわかるんじゃない？」

「・・・すまぬ、わしにもわからん・・・」

「そっかあ・・・知ってると思っただけだなあ・・・」

「だが、突き止める方法なら、ある」

「え!?どんな!?」

「精霊の丘へ行け」

「そこに一日中た太陽を見つめ・・・未来を見通すといわれるポケモンがいる」

「彼の名はネイティオ。彼ならばなにか教えてくれるかも知れぬ・・・」

「そっか、そのネイティオに会えばいいのね！」

「レン！行きましょう！明日精霊の丘へ！」

「ああ！」

「さあ、速く家に帰って、体力を回復しなきゃ！」

「さ、ダーテングもはやく帰りましょう！」

「ああ・・・」

ネイティオ・・・そいつが俺がポケモンになった理由を教えてください
るかもしれない・・・

「レン！そんなところでボヤツとしてないで！速く帰りましょー！」

「お、おう！」
タッタッタツ・・・

「フーデイン、お前の事だ」

「まったく知らないと言っるのは無さそうだがな」

「・・・実は、何か知ってるんじゃないか？」

「ああ、気になる事は1つあるが、言わないほうがいいだろう・・・」

「彼らのために・・・な」

第11話「対決！サンダー！」（後書き）

はい、第11話 完 です

次回もゆっくり待って行ってね！！

第12話「精霊の丘へ、そして・・・」(前書き)

はい第12話かんせいです
では、さようぞー！

第12話「精霊の丘へ、そして・・・」

第12話「精霊の丘へ、そして・・・」

朝

「レン！おはよう！」
「おはよう」

「昨日、ちょっと広場で聞いてきたんだけど・・・」
「精霊の丘は大いなる峡谷の頂上にあるみたい」
「レン、速く行きましょ！大いなる峡谷に！」
「ああ・・・」

「レン？どうかしたの？」
「なあ、フシギダネ・・・」
「なに？」

「言いくいんだけどさ・・・」
「なんで、自分の事じゃないのにがんばるんだ？」
「自分の事じゃないのにつて、私とレンは、友達でしょ？」

「私、レンが居てくれるから、頑張れるの」
「だから、私もレンのために頑張らなきゃって」
「フシギダネ・・・」

「さ、今日も頑張らましょ！」
「おう！」

「まずは、大いなる峡谷へ行きましょ！」
タッタッタッ

大いなる峡谷 前

「ここが大いなる峡谷か・・・」

「この、大いなる峡谷の頂上が精霊の丘と呼ばれてるんだ」

「そして、その精霊の丘にネイティオがいるのか・・・」

「レンがんばって頂上まで行きましよう！」

「おう！」

タツタツタツ・・・

「降りてきたとたんこれかよ??？」

周りには、ポポッコ2匹ドードー2匹??？」

「どうするの?レン」

「フシギダネはポポッコを頼む」

「わかったわ」

「くらえ!でんきショック!」

バリバリ!

でんきショックはドードーにそのまま直線に向かって行った
サツ

ドードーは、でんきショックを横によけた

「ちっ??？」

舌打ちした、その時、俺の体が動いた

でんこうせっかだ

ドードーに、たいあたりし、宙返りをして、着地した

ドードーが立ち上がった

まだ体力があつたか

なら、倒して??？あれ?

俺がドードーを見た時には、ドードーは、通路に、逃げていた

あ、あれ?どうして?

ま、まあいいか

次は、もう一体のドードーだ

「たたきつける!」

空中を回転しながら、尻尾に力をいれて、敵に当てる！

バシン！

尻尾は、地面に当たった

「ちっ！」

よけられたか

ドスツ！

「痛っ！」

突然、背中に、鋭い痛みが来た

ドードーの攻撃だった

ドードーから、バックステップで距離を取り、また、ドードーに走っていった

「くらえや！たたきつける！」

バシン！

ドードーの体に当たった

ドードーは、崩れ落ち、倒れた

よし、倒したか

「レーン！」

フシギダネが走ってきた

「フシギダネ！大丈夫か？」

「うん、レンは大丈夫だったの？」

「ああ、何とかな」

「そう、よかったわ。さ、早くいきましょー！」

「おう！」

タツタツタツ???

精霊の丘

「ここが頂上……」

「みたいだな……」

「あ！レン！あそこにいるのがネイティオじゃないかしら？」

「もしもし？あなたがネイティオさん……ですか？」

「もしもし？」

「フシギダネが何回も、話しかけても、なにも言わない……」

「聞こえてなのかしら？もしもし？」

「もしもー！ーし！ー！」

「だめだわ、全然反応しない……」

「もしかして……立っただまま寝てるのかな？」

「まさか……」

「レン……どうする？」

「そうだな……」

「寝てるからって、攻撃したら、反撃されるかもしれないから……」

「くすぐってみれば？」

「え？くすぐるの？……わかったわ、ためしてみる」

「フシギダネは、ネイティオに近づいて」

「こちよこちよ
???

「こちよこちよこちよ」

「こちよこちよこちよこちよこちよ」

「こちよこちよ???

「はあ???はあ???」

「だめだわ、全然、反応しないわ???

「まさか、これでも反応しないとは???

「どじする？」

「????ぐふっ」

「え？」

「ぐふっ???ぐふっ」

「ぐふふふふふふ??」

「な、なんでいまさら??」

「まさか、鈍いのか？」

「さあ??？」

「クワーーーーッ!!」

「うわぁ！」

び、ビックリしたぁ???

ど、どうしたんだ???急に叫んでさ???

「太陽が???沈んでいく??？」

「え、えーと???ネイテイオさん??？」

「いかにも??？」

「ワタシはネイテイオ」

「ワタシの正体を見抜くとは??？」

「お前達、ただものでは、ないな？」

「し、正体って???そんな大げさな??？」

てか、分からなかった奴がいたのか??？」

「???いやわたしには、わかる??？」

「そこのお前??？」

手を俺に指した

「え???俺？」

「お前???ただのポケモンでは、ないな？」

「お前は???人間だな？」

え!?

「え、え〜!?な、なんでわかるの!？」

「私は1日中太陽を見つめる事で、あらゆるものが見えるのだ・・・」

「過去も・・・未来もな・・・」
「だ、だったら、教えて！」
「私の隣にいるレンって言うんだけど・・・」
「気がついたら、ポケモンになっちゃってて・・・しかも、人間の時の記憶がないの・・・」
「ネイティオだったらなにか、わかるでしょ？お願い！教えて！」
「・・・」
「最近、よく自然災害が起きている・・・」
「それが、世界のバランスが崩れたために起きているのだ」
「そして・・・お前が、ポケモンになっちゃってしまったのも・・・それと大きく関わっている・・・」
世界のバランスが崩れた事と、俺がポケモンになったのとの関係がある？どう言う事だ・・・？」
「レンが・・・ポケモンになったのと自然災害が大きく関わっている・・・だってえ！？」
「そ、それって、どう言う事なの！？」
「レンと自然災害がどう関係してるの！？」
「・・・」
「ねえ！なんなの！？」
「なんで、黙っちゃうの！ねえ！ねえってば！」
「それより・・・私は恐れているのだ・・・」
「崩れたバランスを・・・速く元にもどさないと・・・」
「世界は・・・とんでもないことになる・・・」
「え？そ、それって・・・どういうこと・・・？」
「私自身、そんな未来が毎日見えてしまい、その未来に怯えているのだ・・・」
「ネ、ネイティオ・・・」
「怖い・・・のだ・・・私は、世界が・・・壊れてしまうのが・・・」
世界が壊れる・・・一体なにが・・・」

少し離れた場所から、話を聞く1匹のポケモン・・・
・・・ゲンガーだ・・・

「ケケツ！驚いたぜ！」

「あのレンって奴、人間だったとはな・・・」

「いいこと聞いたぜ！面白い事になってきやがったぜ！ケケツ！」
タッタッタツ・・・

第12話「精霊の丘へ、そして・・・」(後書き)

はい！第12話完成です！

次回もゆっくり待っていつてね！

第13話「キュウコン伝説」(前書き)

イエーイ!

一日に2つ小説投稿だぜえー!

フシギダネ「やったね!さく」ry

レン「おいやめる」

第13話「キユウコン伝説」

第13話「キユウコン伝説」

朝

「おはよう！レンー！」

「おう、おはよう」

「今日もがんばって行くところと行きたい所だけど」

「レンは、昨日のネイティオの話……どう思う？やっぱり気になるよね？」

「まあ、たしかに気になるが……」

「だよね……」

「ネイティオは、このまま放っておくと、世界が壊れるって、言ってたよね……」

「なんとか、したいんだけど……でもさ、ちょっと、わかんないことがあるのよね……」

「レン、世界のバランスって……なんだろう……」

「そんなのわかんねえよ……」

「そうだよね……」

「はぁ……世界のバランスなんて、検討もつかないよ……」

世界のバランスか……一体どんなだろう……

「正直、どうしたらいいかわかんないや……」

「でも、私たちは、私たちでやれることをやって行くしかないよね？」

「やれる事を一つ一つずつ……ね」

「だな……」

「さ、救助活動がんばりましょうー！」

「おうー！」

「とりあえず、救助依頼見に、ペリッパ―連絡所に行くか」

タツタツタツ・・・

ポケモン広場

「あれ？あそこでなんか話してるよ？なんだろ？」

広場の中央ではハスブレロ、ブルー、マダツボミが話していた

「ちよつと、ビックリだな」

「伝説だとはかり思ってたんだけどね」

「でも、ホントですかね？私、ちよつと信じられないですけど・・・

」
「どうかしたの？」

「いや、あのな、キユウコン伝説ってあるだろ？昔話のさ」

「キユウコン伝説？なに？それ？」

「なんだ、知らないのか」

「キユウコンの尻尾に触った奴は、たたりをかけられる・・・て、

言う昔話だよ」

「ずっと、伝説だとはかり思われてたんだけど・・・」

「実は、本当にあつたんじゃないかって噂になつてるんだ」

「まあ、あくまで、噂なんですが・・・」

「私は、噂なんか信じませんけど」

「キユウコン伝説を詳しく聞きたかつたら、ナマズンってポケモン

がよく知ってるから、聞いてみるといいぜ」

「ナマズンは、この広場の北にある池にいるぜ」

「へ」

「そんじゃ、行ってみるか」

サツサツサツ・・・

ナマズンの池

「ほっほっほっワシの昔話を聞きたいか？」

「はい、キュウコン伝説を聞きたいです」

「キュウコン伝説とな。良かるう、では、話すぞ・・・」

むかし昔、キュウコンとゆうポケモンがおった。

キュウコンの尻尾にはじんつうりきがこめられており・・・

その尻尾に触った物には千年のたたりがかかるといわれておった・・・

にも、関わらず、ふざけてつかんだ奴が居たのじゃ

しかも、それは人間じゃった

「人間？」

「そう、人間じゃ」

案の定、尻尾を掴んだその人間は、千年のたたりがかけられた
だが、しかし、その時サーナイトというポケモンがその人間をかば
い・・・

なんと、みずからの身を犠牲にして、たたりをうけたのじゃ・・・

「なんで？」

「その、サーナイトってポケモンはどうして人間のかわりに・・・
？」

「サーナイトにとって、その人間は、自分のパートナーだったから
じゃよ」

「人間とポケモンには、強い絆があるんじゃ」

「ふーん・・・でも、人間っていい人もいれば、悪い人もいるんで
しょ？」

「たしかにそのとおりじゃ」

サーナイトをみて、かわいそうに思ったキュウコンは、その人間に
こう聞いた

『サーナイトを助けたいか？』と・・・

しかし・・・その人間は、そのサーナイトを見捨てて、逃げてしまつたのじゃ・・・」

そんな人間にキュウコンは失望し・・・こう言った

『いずれ、あの人間は、ポケモンに生まれ変わる』

「え！人間がポケモンに!？」

「レン・・・」

「まさか・・・」

『そして、その人間がポケモンに転生した時・・・』

『世界のバランスは崩れるだろう』と・・・

ネイティオが言つてた事と同じ・・・

「この話はこれでおしまいじゃ」

「どうじゃ？おもしろかつたじゃろ？」

「・・・」

「ほほっ面白くて声でないか？ほっほっほっ」

「そんな深刻な顔をしなくても良い」

「たしかに、最近本当の話かもと、噂されているが・・・」

「ただのおとぎ話にすぎぬよ」

「また、話が聞きたければ、ここに着なさいほっほっほっ」

「は、はい。ありがとございました・・・」

サツサツサツ・・・

救助基地に帰っている途中・・・

「ねえ、レン」

「今日は、もう帰ってもいい？」

「え？」

「なんか今日はノリが悪くてさ・・・」

「そうか・・・」

「ごめんね途中で帰ろうなんて言っちゃって」

「でも、なんか・・・やる気が起きないの・・・。」

「あんな話聞いたあとだしな・・・。」

「今日は、もう帰るって寝るわね・・・。」

「それじゃあ、また、明日・・・。」

サツサツ・・・

突然、フシギダネの足が止まった。そして、

「レン！ごめん！」

「え？突然どうした？」

「私、レンのことちよっぴり疑ってたの・・・。」

「でもね、私、もう迷わないわ」

「私、レンのこと信じるね」

「フシギダネ・・・。」

「だって、レンはかけがえのない友達だもの！」

「とつても、大切な・・・友達だからね・・・。」

「それじゃあ、レン！また、明日がんばりましょう！」

「ああ！それじゃあな！」

タツタツタツ・・・

それじゃあ・・・俺も寝るか・・・

今日は、テンション上がらないし・・・

明日頑張ろう・・・

サツサツサツ・・・

第13話「キュウコン伝説」(後書き)

はい第13話 完了です

次回もゆっくりまっけていってね!!

第14話 疑い(前書き)

投稿スピード早くなってきたあ!!
ただし、七不思議探検隊は全然進んでないが・・・

第14話 疑い

第14話「疑い」

・・・

また・・・あの夢だ・・・

この夢でいつも、見るあのシルエット・・・
誰なんだ・・・

あれ？なんか、言ってる！

だけど、うまく聞き取れない・・・この前よりは、聞こえるんだけどな・・・

こうなったら・・・

なあ、教えてくれ

君は・・・君は一体だれなんだ？

『・・・私は・・・』

『私は、サーナイト』

サ、サーナイト！？

『よかった・・・やつと・・・やつと会えた・・・』

え？やつと会えたって・・・どう言う事だ？

まさか、俺の事・・・前から知ってたって事？

『私は、あなたの・・・』

あつ、待ってくれ・・・

もうすこし、聞きたいことが・・・

くっ・・・意識が・・・

・・・

朝

「んーふう・・・」

変な夢だったな・・・
いつも、見る夢なんだけど・・・
なんか、この前よりは、ハッキリしたきたな・・・
えーと、たしか、夢に出てきた人影が誰かわかったような・・・
あ！そうだ！
たしか、サーナイトだったか・・・
あれ？サーナイトってたしか、昨日ナマズンの話してた・・・

「そう、人間じゃ」

案の定、尻尾を掴んだその人間は、千年のたたりがかけられた
だが、しかし、その時サーナイトというポケモンがその人間をかば
い・・・

なんと、みずからの身を犠牲にして、たたりをうけたのじゃ・・・
「なんで？」

「その、サーナイトってポケモンはどうして人間のかわりに・・・
？」

「サーナイトにとって、その人間は、自分のパートナーだったから
じゃよ」

「人間とポケモンには、強い絆があるんじゃない」

・・・

まさか・・・まさか、俺は・・・

俺が、サーナイトのパートナーだったのか・・・？

しかも・・・たたりの掛ったサーナイトを見捨てて・・・そのせいで
ポケモン

になっちゃったのか・・・

「くそっ・・・」

サツサツサツ・・・

「おはよう！レンー！」

「あ、ああ・・・おはよう・・・」

「あれ？顔色悪いよ？どうかしたの？」

「ま、いつか！今日もがんばって行きましょ！」

「おう・・・」

「あ、そういえば・・・」

「そういえば、今日、ここに来て、待つてるときに、広場の方、騒

がしかったけど・・・」

「どうしたんだろう？」

「行つて見ましょ」

「ああ・・・」

サツサツサツ・・・

広場に行くと、カメレオンの店には、いつもは、居るのだが、今日は、カメレオンが居なかった

「あ、あれ？いつもと、雰囲気が違うね・・・」

「あ、ああ・・・」

静かすぎる・・・不気味だ・・・

「あ、レンー！あそこにみんなが集まってるー！」

タツタツタツ・・・

「何話してるの？」

マダツボミに聞いてみた

「もう、私ビックリしました！ホントだったんですよー！」

「え？なにが？」

「キユウコン伝説の事ですよー！」

「私、うわさなんか全然信じなかったから、もうビックリで！」

「レンさん、フシギダネさん」

「あーキヤタピーちゃんじゃない！」

「キヤタピーちゃんも来てたんだ」

「はい」

「しーっ静かにしろ」

「今、あそこにいる奴が話してるんだ静かにしてくれ」

「え？誰が話してるの？」

「そ、それが……」

みんなの集まってる中心には……

『ゲ、ゲンガー!!!』

「……とゆうわけで、俺は、精霊の丘へ行つたんだ」

せ、精霊の丘に!?

「そしたら、そこですげーもん見ちゃったんだ！ケケッ！」

「すげーものって？」

「あるポケモンが、ネイティオに相談してたんだ」

「そのポケモン……姿はポケモンなだけど……」

「なんと！もともとは人間なんだってさ！」

「な、なんですって！」

「ほ、本当に居たんだな……人間からポケモンになった奴が……」

「しかも、ネイティオはその人間にこう言ったんだ」

「ポケモンになったのと世界のバランスが崩れたのは大きく関係し

ている……って

「そ、それって！キュウコン伝説のとおりじゃないかよ！」

「ケケッ！驚くのはまだ早いぜ」

「最近、災害がよく起きてるだろ？」

「ネイティオによると、あれは、世界のバランスが崩れたために起

こってるんだってさ」

「しかも崩れたバランスを早く戻さないと・・・」
「ど、どうなるんだよ!」

「世界はとんでもないことになるって言うてたぜ! ケケツ!」
「な、な・・・」

『なんだってー!ー!ー!ー!ー!』

「せ、世界がとんでもないことになるですつてえ〜!?!」

「僕達どうしたらいいんだよ!?!」

「あ、あいつ!」

「わざと騒ぎを大きくしてるわ!」

「まあ、まあ諸君、そんな慌てなくても」

「なんとかする方法はあると思うんだな、ケケツ!」

「ど、どんな方法だよ!?!」

「なあに、簡単な事さ」

「その人間がポケモンになったせいで、世界のバランスが崩れたのなら・・・」

「そいつが消えれば元通りになるだろ!?!」

「た、たしかに!?!」

「い、言われてみればそうだな・・・」

「ケケツ! しかもその人間はサーナイトを見捨てたひどい奴なんだぜ?」

「ツ!?!」

「倒されても文句なんて、言えないと思うんだけどな」

「なあ? レン?」

「え?・・・ええつ!?!?ま、まさか!」

「あ、あなたが・・・その人間だったのですか?!」

「ほ、ほんとなのか? おい!」

「ちよ、ちよつと待つて! これには、訳が・・・」

「テメエに聞いているんじゃないねえ! レンに聞いているんだ!」

「おい！レン！どうなんだよ！！」

「本当にお前は伝説にででくる人間なのか！？」

「……………」

「なにも…………言えない…………」

「レン…………」

「レン…………さん」

「ケケケケケツ！返す言葉がないようだな！！レン！！」

「そういう事だ諸君！！」

「レンを倒して平和になるうぜ！！ケケケケケツ！」

「あ、あれ…………？」

広場にいたみんなが俺達に向かってきた

「み、みんな…………どうしたの？ど、どうしたの？」

「レン！すまんっ！」

シュツ！

ハスブレロが攻撃してきた！！

「わわっ！なにをするのさ！」

「ま、まずいわ！レン！逃げましょ！！」

タッタッタツ…………

「ケケケケツ！いいきみだ！！」

救助隊基地 前

「はあ…………はあ…………」

「び、びっくりしたあ…………」

「まさか、みんな一斉に襲ってくるなんて…………」

「でも…………レン」

「どうして、言い返さなかったの！！」

「自分は違っつて！キュウコン伝説に出てくる人間じゃないって！

「！」

「・・・なあ・・・フシギダネ・・・」

「どうしたの・・・？」

「俺さ・・・もう・・・疲れたよ」

「え・・・疲れたって・・・どういうこと・・・？」

「俺には・・・救助隊やる資格ないよ・・・」

「ど、どうしたの！？救助隊やる資格がないって・・・」

「レンらしくないよ！いたいながあったの！？」

「実は・・・夢の中にサーナイトが出てきたんだ・・・」

「それで・・・やっぱり、自分はその人間じゃないかって・・・」

「そうだったの・・・そんなことが・・・」

「ねえ・・・レン」

「それでも・・・レンは、人間のときの事思い出したわけじゃないんでしょ！？」

「そうだけど・・・」

「だったら、まだホントの事はわからないじゃないの！！」

「私は・・・レンの事信じてるのよ・・・」

「だったら・・・」

「あっ！」

広場の方からフーディン達が歩いてきた

「先ほどの広場での騒動のあと、みんなで話し合った」

「世界を救うには、どうしたらいいのか・・・をな」

「そして・・・その結果・・・レン、お前を倒すことに決まった」

「え、ええー！！」

「ワシもまさかとは、思ったが・・・」

「そうであってほしくないと願ったのだが・・・残念だ・・・」

「ワシたちは・・・全力でお前を倒す！！」

そ、そんな・・・フーディンとここで戦うんなんて・・・

突然、足をとめた

「・・・一晩時間をやろう」

「えっ？」

「その間に荷物をまとめここから逃げるのだ」

「明日になれば……いろいろな救助隊が追いかけてきて……お前を襲おうとするだろう……」

「いや……お前だけではないだろう……」

「レン、お前についていくすべてのものを敵とみなし……」

「容赦なく攻撃してくるだろうな……」

「それは、ワシたちも同じだ。当然、お前達を倒しに行く」

「しかし……それでもなんとか逃げ切るのだ」

「逃げて逃げて……真実をみつげるまで、生き延びるのだ」

「フリーデン……」

「次に会う時は容赦しないぞ。ではな……」

「レン……」

「フ デイン達もあやつてレンの事信じてるんだ……」

「私も前に言ったでしょ？」

「もう、迷わないって……」

「なにがあっても、レンの事、信じるって……」

「たとえばかの救助隊が襲ってきたって、私はは怖くなんかないわ」

「なのに、レンが自分の事信じられなくて、どうするのよ……」

「レンさん」

広場の方から、キャタピーが来た

「キャタピーちゃん……」

「レンさん、僕と約束しましたよね？ここに救助基地をつくるって……」

……

「僕も……大きくなったら、救助隊やるって……」

「レンさん、くじけちゃだめです」

「レンさんは、僕にとってヒーローなんですから……」

「僕は、レンさんを信じています」

「レン、どうする？」

「ああ……わかったよ！もう諦めなんかしねえよ！」

「そうよ！それでこそ私の知ってるレンだよ！！」
「とりあえず、ここを離れちゃうけど……」
「絶対にまた、ここに戻ってこようね！！」
「かならず……真実をみつけてね！」
「ああ！！」

第14話 疑い（後書き）

はい第14話 完 です

第15話も・・・ゆっくり待っていてね！

第15話 「逃亡」(前書き)

ハイ！15話完成です！
でわ、びびりぞぞ

第15話 「逃亡」

第15話 「逃亡」

明け方

「おはよう、レン。」

「おう、おはよう」

「朝早いけど、さすがにもう起きてるよね」

「まあな」

「さて、出発の用意は出来た？」

「ああ、出来てるぜ」

「これからは逃亡の旅よ」

「きっと・・・危険な冒険になるし・・・」

「救助隊の仲間までまき沿いにしたくなんかないわ・・・」

「だから・・・仲間にはだまって・・・私達で行きましょうね・・・」

「

「ああ・・・」

「とにかく、私達を追ってくる救助隊から、にげて、にげて逃げ切らなきゃ・・・」

「そう・・・逃げ切るんだ・・・」

「あの時、フーディンが言ってたんだ」

「逃げて逃げて・・・」

「真実をみつけるまで、生き延びるのだ」

そつだ・・・俺は、いつたい、何者なのか・・・

その真実を見つづけるまで、逃げて…生き延びなきゃ・・・

たとえ、地の果てまでも・・・

「よし・・・それじゃあ行きましょー！」

「ああ！」

「レンさん！」

後ろから、声が聞こえた

「キヤタピーちゃん！トランセル君！」

「それにワタツコたちも！」

「よかつた！間に合つた！」

「私達、レンさん達を見送ろうと思つて

「ボ、ぼくも！」

ボコツ！

「おはようございます、デイグダです」

「僕も、レンさんを見送りたいです！」

「み、みんな・・・」

バサツバサツ！

ペリッパーがやつてきた

スコン！

「手紙だ、レン読んでみて」

「わかつた」

アバヨ！

しばらくサヨナラだ。

でも、また手紙を運べるその日がくるまで・・・

俺は、いつまでも待つてるぜ。

さすらいの郵便屋さん ペリッパーより

「ペリッパーも・・・」

「みんな・・・うう、みんな！ありがとうね！」

「さあ・・・そろそろ、ほかのポケモン達が起きてきますよ」

「さあ、早く！急いでください！」

「うん！」

「レン！さあ、出発しましょう！」

「ああ！」

タッタッタツ・・・

「気をつけてー！」

「レン達が帰ってくるの待ってますから！」

「うん！ありがとうね！」

「私達、絶対に戻ってくるわ！」

「それまで、みんな、元気でね！！」

こうして、レン達の果てしなくつらい旅が始まったのです
切り立った山を越え・・・

「うわっ！ここ地割れがすごいよ！？」

「ひでえな・・・」

燃える野原を乗り越え・・・

「ここも・・・自然災害の傷跡が・・・」

「山火事がまだおさまらないみたいだね・・・」

「どうして、燃えだしたんだ・・・？」

しかし、レン達は、泣き言もいわず・・・

遠くその、また、遠くへと進むのでした・・・

「はあ・・・大分遠くまできたな・・・」

「しかし、ここまで、来ながら思ったんだけど・・・」

「いろんな場所、荒れてたよね…」

「ああ……」

「きつと、災害で困ってるポケモンも、いるだろうし……」

「はやく……救助隊活動に戻りたいけど……」

「でも、今は我慢よ とにかく、今は、逃げないとね……」

「ん？なあ、声が聞こえなかったか？」

「え？」

遠くから、誰かの声が聞こえた

『たしか、こつちの方角みたいだぜ』

『こんだけ、大勢で来てるんだ見つかるさ』

『早く、レンを倒さないと……』

！？追手か！

「わわっ！もう、追手が来たの!？」

「レン！先に急ぎましょ！」

「ああ！」

タッタッタツ……

群青の洞窟 ウミシロ

「急がないと……まずいぞ！」

タッタッタツ……

二ドリーナとツチニンが近寄ってきた

「くそっ！邪魔だ！」

「でんきショック！」

でんきショックは、ツチニンに向かって、飛んで行った

ツチニンは、横に避け、でんきショックを避けた

「チッ！」

タタタタ！

ツチニンがこつちに走ってきた！

そして、

ザシユ！

「痛っ！」

ザシユ！ザシユ！ザシユ！

「ぐあっ！」

みだれひっかきで攻撃してきた

「いってえ……」

「やったなあ……」

「食らえ！」

「うらあ！たたきつける！」

バシン！

ツチニンに見事に当たった

ツチニンは、力尽きたようだ

「よし！」

「フシギダネ！倒せたか？」

「うん！でも、ほかのポケモン達が集まってきてる！」

「囲まれたら、厄介だ！早く逃げるぞ！」

「わかった！」

タッタッタツ……

「はぁ……はぁ……」

「やっと、抜けられた……」

「追手のポケモン達、撒けたかな……」

『おい！いたぞ！あそこだ！』

『レンを捕まえるんだ！』

「わわっ！来た！は、早く逃げましょー！！」

タッタッタツ……

『まてー！逃がすなー！』

「待ってって言われて、待つ奴がいるかー！！」

「はぁ……はぁ……」

「あ！あれは！！！」

フシギダネの向いた方向には、溶岩が溢れ出てきて、今にも噴火しそうな高い山が立っていた

「ほ、炎の山だわ！」

「炎の山！？」

「火口から、あんなに溶岩が流れてるなんて……」

「あそこを通るなんて……出来るの……？」

「でも……後ろからは、追手が来てるし……」

「どうしよ……レン」

『おっ！あそこにいたぞ！』

『捕まえる！！』

「選びようがないわ！」

「行きましょ！レン！」

「ああ！！！」

タッタッタツ……

第15話 「逃亡」(後書き)

はい!第15話 完 です!
第16話もゆっくり待ってね!

第16話 炎の山を抜ける！（前書き）

第16話出来ました！
では、どうぞ！

第16話 炎の山を抜ける!

第16話 「炎の山を越える!」

『くそーどこ行きやがった!?!』

『こつちににげたはずだ!もうちよつとさがそうぜ!?!』

『お~~~~!!!』

ドタドタドタ!!

...

「・・・もう・・・行ったかしら・・・」

「ふう・・・なんとか、やり過ごせたみたいね」

「でも・・・ここにいても、しょうがないよね・・・」

「逃げるには、この山を抜けるしかないし・・・」

「レン、行きましょう!」

「ああ!!!」

タッタッタツ・・・

炎の山

タッタッタツ・・・

「出来るだけ、急ごう!」

「うん!」

通路を抜けると、広い場所に出た

その広い場所には、ブビイ2体、マグマツク2体が居た

「ああ、もう!」

「俺は、ブビイの方をやる!」

「わ、わかつたわ!」

タッタッタツ・・・

「でんきショツク!」

バリバリ！

ブビィにでんきショックは、あたらず、横に避けられた

「ちっ！」

舌打ちして、着地して、前を見ると、ブビィが突進してきた

「やばっ！」

突進してきたブビィは飛び、後ろに反り、ひのこを出してきた

突然の事だったから、反応も遅れてしまって、ひのこをまともに食らってしまった

「熱っ！」

バックステップで距離を取った

「やったなあ・・・」

タッ！

ブビィの真上に飛び、たたきつけるを繰り出そうとした時

紫色の煙が、体に纏わりついてきた

「うぐっ・・・」

苦しくなった・・・

スモッグだ・・・

紫色の煙から、距離を取った

「げほつげほっ・・・」

毒を食らったか・・・

俺は、バックから、モモンのみを取り出し、口にほうばった

くそっ・・・どうすれば・・・

そうだ！

がさごそ・・・

俺は、バックから、種を取り出し、ブビィに向けて投げつけた

種は、ブビィの口に入った

その時、ブビィは、金縛りを受けたように、固まった

しばられのたねだ

「これで、1体ずつ集中できる！」

タッ！

「でんきショック！」

バリバリ！

ブビィに、でんきショックが当たったが、さすがに一撃では、倒れず、耐えたようだ

そのブビィは、突進して飛び、体を反り、ひのこを出してきた

「あぶね！」

ブビィのひのこを紙一重で避けた

そして、避けて、ブビィに突進してたたきつけるを繰り返した

しつぽはブビィの頭にあたり、ブビィは、倒れた

「よつと」

地面に着地した

次は、もう一体のブビィを倒すことにした

「でんきショック！」

バリバリ！

無抵抗のブビィにでんきショックを当てた

金縛りから自由になり、突進してきたブビィは

飛び、体を反った

「ひのこを出すつもりか！」

さすがに、何回も、食らったので、見切れるようになった

体を戻そうとした時、俺は、伏せた

だが、ブビィの口からでたのは、炎ではなく、紫色の煙だった

「え！？」

驚いてしまった

紫色の煙は、俺の伏せてる、下まで、降りてきた

「やばっ！」

そう思った瞬間、横に避けた

「あ、あぶねえ・・・」

横に避けた俺は、少し距離をとり、

タッ！

ブビイの上に飛び、

「たたきつける！」

尻尾を振りおろした

バシン！！

「あつ！」

その時、尻尾に熱を感じた

ブビイは、倒れた

尻尾を見ると、やけどをした跡があった

ブビイの特性、炎の体でやけどしたんだろう・・・

バックから、チーゴを取り出し、絞りやけど後に当てた

「ッ！」

少し、チーゴの実の汁が染みた

すると、やけどの痛みが引いた

俺は、少し落ち着いた

「レンー！だいじょうぶ！？」

「ああ・・・だいじょうぶだ」

フシギダネの前足に少し異変を感じた

「フシギダネ、火傷してるぞ」

「え？ああ・・・これね」

「フシギダネ、ちよつと、手をだせ」

バックから、チーゴの実を出し、

フシギダネの手の火傷に、チーゴの実の汁を垂らした

「ッ！」

フシギダネも痛みを感じたようだ

「だいじょうぶか？」

「う、うん・・・」

「そうか、それじゃあ、行こう・・・」

「そうね・・・」

タッタッタツ・・・

炎の山 頂上

「ここが・・・炎の山の頂上かな・・・？」

「けど、すごいよね・・・ここ」

「いくら、火山とはいっても、こんな溶岩の多さは、普通じゃないわ・・・」

「これも、災害の影響かもね・・・」

ゴオオオオオ!

「うわっ！熱い!!」

「こんな危険なところ、ずっといたくないよお・・・」

「早く抜けよう！」

「うん」

サツサツサツ・・・

『待てっ!!』

突然何者かの声が聞こえたその時

あたりが真っ暗になった

「あ、あれ!？」

「あたりが急に暗くなった!？」

『山の叫びが聞こえる・・・』

『苦しくて、悲鳴を上げているのだ・・・』

『お前たちなのか!？炎の山をくるしめるのは!？』

「え!？ち、違うわよ!私達じゃないわ!!」

「私たちは、たまたま、ここを通ろうとしただけよ!」

「お前こそ誰だ!姿を見せろ!!」

ギヤオオオオオオ!!

バサツ!

突然、空から、ファイヤーが降りてきた!

「山の怒りは私の怒り!!！」

「私の名はファイヤー!炎の化身!」

「山を荒すものは、許さん!!！」

「覚悟しろ!!！」

「高速移動!!！」

ファイヤーは、すごい速さで、飛んできて、

「つばさでうつ!!！」

バサア!!！」

「うぐつ!!！」

俺は、ファイヤーの攻撃で、空中に舞上げられた

「炎の渦!!！」

ファイヤーは、翼を煽ぎ、炎の渦を作り出した

そして、その炎の渦は、俺を囲い、俺を締め付けた

「熱っ!!！」

「レン!!！」

「食らいなさい!はっぱカッタ!!！」

「遅い!!！」

サツ!!！」

ファイヤーは、フシギダネのはっぱカッタ を避けると、フシギダ

ネに近づいて、

「つばさでうつ!!！」

バシン!!！」

「きゃあああ!!！」

「フ、フシギダネ!!！」

く、くそっ……

熱い!だけど……このままじゃ!

「うおおおおお!!！」

フ……

体に力を入れると、炎の渦は、体から離れた

「よし！」

炎の渦から、解放された俺は、ファイヤーに走って行き、

「でんきショック！」

バリバリ！

「うわああああ！」

でんきショックは、ファイヤーに当たった

「くっ・・・やりましたね」

ファイヤーは、そういうと、俺に向かってきた

「つばさでうつ！」

「でんこうせっか！」

シュン！

でんこうせっかで、ファイヤーの後ろに回った

「でんきショック！」

バリバリ！

「ぐう・・・」

でんきショックは、またファイヤーに直撃した

「まだ・・・やられません！」

「ひのこ！」

ファイヤーは、体を反る事もせず、すぐにひのこを出してきた

「熱い！」

あまりにも突然すぎたので、防ぐこともできず、ひのこをまとも食らってしまった

タッタタッタ・・・

誰かが、ファイヤーの後ろ走りぬけた

「はっぱカッター！！！」

「なっ！？」

ザシュ！

「ぐああああー！！！」

ドサァ！

「うぐぐぐ……」

「な、なんの！これしきのことです！」

「ファイヤーは、また戦闘しようとした

「待って！待って頂戴！」

「私達、悪さしにここへ来たんじゃないわ！」

「ただ……私達追われてこの山に來ただけなの……」

「それに、苦しんでいるのは、この山だけじゃないわ」

「今、いろいろな場所が、自然災害に苦しめられてるの……」

「私達、今は、追われてて出来ないけど……」

「でも、いつか、災害にくるしんでるポケモン達を助けたいんだ！」

すると、ファイヤーは、戦闘態勢を中断した

「……その話、本当なのか？」

「ほ、本当よ！信じて！お願い！」

「もし……嘘だと思うなら、私達の眼を見て！」

……

少しの間、静寂が続いた

「……よろしい」

「あなた方の話を信じましょう……」

「はああ……ビックリしたわあ」

「私……腰がぬけるかと思ったわ……」

「さあ、ここを通りなさい……」

「この炎の山を抜けるのです……」

「そして……約束してください」

「必ず……被害の原因を突き止め……」

「これ以上、災害が広がらないように食い止めることを」

「わかったわ……約束するわ」

「……と言っても、今すぐはムリだけど……」

「ギャオオオオオオオオオオ！！」

「わわっ！す、すぐやります！」

「今は、追われてるから、ちょっと無理だけど……」

「でも、私は救助隊よ」

「必ず、災害の原因を突き止めるわ。約束するよ」

「約束ですよ……」

「あなた方なら、きっと成し遂げてくれる気がします」

「私に立ち向かった勇氣……それを忘れなければ……」

ギャオオオオオオオオ！！

「わわっ！ま、まだなにか！？」

「いえ……」

「ただ、ここから飛び立とうと思っただけです」

「そ、そう……」

いちいち、まぎらわしい……

「ではっ！」

バサア！

ファイヤーは、空へ飛び立った

「はぁ……」

「怖かったー」

「ほんとだよ……」

「でも、ファイヤーが分かってくれて、本当によかったわ」

「さ、私たちも早く炎の山を抜けましょー！」

「ああ！」

タッタッタツ……

第16話 炎の山を抜ける！（後書き）

はい、今回結構長いです

第16話完了！

第17話ゆっくりまってね！

第17話 樹氷の森に潜むもの(前書き)

第17話完成しました！
では、どうぞ！

第17話 樹氷の森に潜むもの

第17話「樹氷の森に潜むもの」

「はあ・・・はあ・・・」

「け、結構たくさん歩いたね・・・」

「私、疲れたわ、ちよつと休みましょ」

「ああ・・・」

「いい景色ね・・・」

「ああ・・・」

「あ！ほら、見てよ！レン！」

フシギダネの向いた方向には、小さくなった炎の山があった

「炎の山があんなに小さく見える・・・」

「ほんと、だいぶ遠くまで来たよね・・・」

「ああ・・・」

「・・・ねえ、レン」

「炎の山は、越えるの大変だったし・・・」

「炎の山を越えられるポケモンって、少ないと思うんだ・・・」

「それに、そのあとに私たち、必死にここまで、逃げてきたし・・・」

「正直ね、私、思うんだ・・・」

「もう、ここまでできたらさ、もう、おってくるポケモンなんて、居ないんじゃないかな...?」

「いや、まだいる」

「え？まだいるって・・・」

「だれなの？それは」

「フリーデインだ」

「そうね・・・フリーデイン達のチームなら、ここまで、来れるよね・

「・・・」

「うん・・・しょうがないわ、行くしかないわね・・・」

「とにかく、誰も行けないような場所へ行きましょ」

「頑張つて行きましょ」

「あ、ああ・・・」

「あれ？どうかしたの？レン」

「フシギダネ、お前疲れてんじゃないのか？」

「追手が来るんだから、休んでなんかいられないよ」

「まあ・・・そうだが・・・」

「それに、私言っただじゃん」

「私は、レンについて行くって」

「フシギダネ・・・」

「そんな、不安そうな顔しないでよ平気だつて」

「行きましょー！レン！私、レンにどこまでもついていくわよ！」

「ああ！」

タツタツタツ・・・

こうして、レン達の

過酷な旅は、続きました・・・

彼らは、より、厳しい場所を求め・・・

北へ、向かいました・・・

山のまたその先の山を越え・・・

「きやつ！」

「だいじょうぶか！」

「う、うん」

ぬかるんだ沼を抜け・・・

「一気に走り抜けるぞ！遅れんなよ！」

「わかつたわ！」

凍った崖を登り・・・

「滑つて、登れないわ・・・」

「木を削って、それを氷に刺して登れないか？」

レン達は、とうとう、雪が積もる氷雪の地へと、やってきたのでした……

「さむ……」

「寒いわ……」

「うう……鼻水も凍っちゃいそう……」

「ああ……」

……

「すいぶんとさびしい所に来ちゃったね……」

「ああ……」

「雪もつもってるし……」

「それに、さつきから、ほかのポケモンも全然、見当たらないし……」

……

「もしかしたら、もう、誰も、居ないじゃないかな……」

「さあ……」

「あれ？」

「ん？どうしたの？」

目の前に、アブソルが立っていたが、フシギダネがアブソルの方を向いた時、

アブソルは、どこかへ去って行った

「あ、あれは!？」

「……」

「さつきのは、いったい……ポケモンみたいだったけど……」

「レン、知ってる？」

「あいつは……災いポケモンのアブソル……」

「ふーん……でも、こんなさびしい所でなにしてたんだろ……」

「さあな……」

「まあ、考えても仕方ないわね先、急ぎましよう」
「ああ」

ザツザツザツ・・・

「あ！レン、あれ見て！」

「あれは・・・」

正面には、樹氷が、立っていた

「樹氷よ！木が凍ってるわ！」

「すごい！氷の粉がそらから、降ってるわ！」

「きれい・・・だけど、ものすごく・・・厳しい場所なんだろうね・・・」

「でも、やっぱり、ここを越えないと・・・いけないんだよね・・・」

「

「うう・・・寒さがすごく厳しそうだし、行きたくないよ・・・」

フシギダネ、草タイプだしな・・・

「でも、逆にここに居てもしょうがないし・・・」

「前進あるのみ、がんばって越えていきましようね！レン」

「ああ！」

タツタツタツ・・・

樹氷の森

「うう・・・さみい・・・」

「こんな寒い中、まともに、戦えないよお・・・」

ザツザツザツ・・・

通路を抜けて、広い場所にでると、そこには、

オオタチ2体イノム 1体がいた

「こんな寒い時に戦いたくないよお！」

「しかたないだろ！」

「フシギダネは、イノム と戦え！」

「はいはい・・・」

「くらえ！たたきつける！」

バシン！

俺の尻尾は、オオタチに当たらず、地面に叩きつけられた

「チッ！」

オオタチから距離を取り、再度攻撃しようとした時

ドン！

「うぐッ！」

オオタチが、でんこうせつかで俺に体当たりしてきた！

「いてて・・・」

「やったな・・・」

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

でんきショックは、オオタチに当たった

「よし！」

ガッツポーズを取ったその時

ザシユ！

「痛っ！」

背中に鋭い痛みが来た

もう一体のオオタチか！

後ろを向いて、バックステップして、距離を取った

そして、オオタチに突撃した

タッタッタツ・・・

「くらえ！たたきつける！」

バシン！

俺の尻尾は、オオタチの頭に当たった

オオタチは、頭に攻撃を食らったせいかわらぬ、フラフラしてる

もう一体のオオタチの方を見た

突進してきた！

ドゴッ！

「うぐっ！」

腹に突っ込んできた！

反動で、少し吹っ飛んだ

「ぐうう・・・」

立ち上がると、周りには、オオタチ一体しかいなかった

あれ？逃げたのか？

前にもこんなことあったような・・・

まあ・・・いいか

タッタッタツ・・・

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

でんきショックは、オオタチにあたり、力尽きたようだ

「ふう・・・終わったか・・・」

「フシギダネ、だいじょうぶか？」

「レ、レン！ちよつと助けて！！」

「ど、どうした!？」

「ほかにポケモンが来てるの！」

タッタッタツ・・・

「ゲ！」

「レン！どうするの!？」

ノズパスや、イノム が何匹か来てる!？」

「ど、どうするって...!」

「逃げるしかねえだろ！」

タッタッタツ・・・!

・・・

何者かがこの森に侵入している

冷気が弱まっているのも、そのせいなのか・・・

何としてでも止めなくては・・・

この森を・・・守るためにも・・・

「はあ・・・はあ・・・」

「な、なんとか、逃げ切れたわ・・・」

「大分奥まで、来たな...」

「うん、ここを抜ければ、出れるかもね・・・」

「頑張りましょ！」

「ああ！」

・・・

「あれ？レン今なんか言った？」

「え？なんも言っていないけど？」

「そうよね・・・？」

「なんか、声が聞こえたような気がするけど...気のせいかしら・・・」

「

・・・

・・・ひきかえすのだ

ここは通れない・・・

「だ、誰だ!？」

ここを通ることは許されない・・・

どうしてもここを通りたければ・・・

その時は・・・私を倒してからにしろ!!

周りの氷が、空からの光に反射して、目を開けられないくらい光を放った

「うわっ！まぶしい！」

「目が開けられないよ！」

ギヤオオオオオオ!

空からフリーザーが降りてきた!

「私はフリーザー!氷の使い！」

「この森に入ってきた物は、全力で倒す!！」

「覚悟しろ!!」

第17話 樹氷の森に潜むもの(後書き)

ハイ第17話 完です

18話もゆっくりまってるね！

第18話 VS フリーザー！（前書き）

どうも、第18話完成です

では、さようなら！

第18話 VS フリーザー！

第18話 「VS フリーザー！」

「覚悟！！」

「くらえ！でんきショック！
バリバリ！」

「高速移動！」

シュ！

避けられたか！

横に避け、俺に突っ込んできた！

「つばさでうつ！」

バシン！

「うぐっ！」

「レン！」

「だ、だいじょうぶ！？」

「だいじょうぶだ！」

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

「くっ！」

「まだまだ！」

「でんこうせっか！」

フリーザーに突撃していき、

ドン！

「ぐあっ！」

「やったな……！」

「くらえ……こなゆき……！」

バサア……

ゴオオオオオオ

周りの雪が舞い上がり、吹き荒れた

「うわぁ!!」

「きゃぁ!!」

「くっ・・・」

「フ、フシギダネ・・・!」

「レ・・・ン・・・」

フシギダネは、凍りついていた

「くそっ・・・」

「言っただけで、全力で倒すと!」

「さぁ、ここから立ち去るのだ!!」

「俺達は、逃げ切らなきゃ・・・だめなんだぁ!!」

「電光石火!!」

シュ!

「うらぁぁぁ!」

ドン!

「ぐっ!」

「まだまだぁ!」

「たたきつける!」

空中で一回転し、フリーザーの頭に尻尾を叩きつけた

「ぐぁぁ!!」

「まだ・・・やられん!!」

「つばさでうっ!」

バサァ!

「ぐぁ!!」

「痛つてえ・・・」

「やったな・・・!」

「でんこうせっか!」

シュン!

「たたきつける！」

サツ！

バシン！

「ちっ！」

避けられたか！

「つばさでうっ！」

「あぶねっ！」

バックステップフリーザーの攻撃を紙一重で避けた

「こなゆき！」

やばい！フシギダネがつ！

「させるかあ！」

「でんこうせつか！」

タツ！

ドン！

「ぐっ……！」

「はぁ……はぁ……」

ゴソゴソ

バックの中からオレンの実を口の中に入れた

パリン！

氷の碎けるような音がした

「フシギダネ！」

「レ……ン……」

「だいじょうぶか！」

「う、うん……」

タツタツ

「フシギダネ、俺が、フリーザーの気を引きつけるから、お前は、後ろに回り込んでくれ」

「わ、わかったわ……」

「でんこうせっか!」
シュ!

「その攻撃は、もう、見切った!つばさで打つ!」
「やばっ!」

バシン!

「ぐあっ!」

フリーザーの攻撃で、宙を舞った

「よっと・・・」

なんとか、体制を立て直した

「でんこうせっか!」

シュ!

「何度やろうと無駄だ!」

タン!

でんこうせっかで、フリーザーの前まで行き、上に飛んだ

「な、なに!」

「たたきつける!」

バシン!

「ぐあっ!」

フリーザーの翼に尻尾が当たった

「くっ・・・」

「つばさで打つ!」

バシン!

「がはあ!」

隙を取られて、フリーザーに攻撃された

ふと、フリーザーの後ろを見た

フシギダネが、フリーザーの後ろに回り込んでいた

フシギダネは、こちらをみると、うなずいた

「前だけじゃなくて、後ろも注意しないとだめだぜ・・・!」

「どういうことだ?!」

「はっばカッタ!」

ザシユ!

「ぐあ!」

「さっきのフシギダネかつ・・・!」

「とどめだあ!」

「でんきシヨック!」

バリバリ!

「ぐああああ!」

ドサア!

フリーザーは、やっと、力尽きたようだ

「はあ・・・はあ・・・」

「お願いだ!フリーザー!」

「俺達は、どうしても、先に行かなくちゃいけないんだ!」

「頼む!ここを通してくれ!」

「くつ・・・だめだ!ここを通すことは、出来ない!」

「なんでだよ!」

「この森の冷たい空気が、ここにきて、かなりあたたかくなっていく・・・」

「温かく・・・?」

「ここ、めちゃ寒いんだが・・・」

「もりの冷気が乱れ、雪が解け始めている・・・」

「いままで、溶けた事のない雪が解け始めているのだ!」

「これは、いままで、一度もなかった事だ!」

「そして、お前達が森に現れた・・・」

「これは、お前達の仕業では、ないか!」

「そ、そんなことねえよ!そんなの、ただの偶然だ!」

「なあ、フリーザー、聞いてくれ!」

「この森の雪が解け始めたのは、俺達のせいじゃない!」

「ここだけじゃない、今、いろんな場所で災害が起きているんだ!」

「俺達が、ここに来なくても、冷気は、乱れていた!」

「そんなこと・・・信じられるかっ!!」
「バサア！」

「うわっ!!」

「問答無用だ！覚悟しろ!!!!」

『待てっ!!』

どこからか、声がした
ザッ!

「ア、アブソル!!」

「この者たちの言う事に偽りはない」

「自然災害は、今、至る所で起きている」

「ほ、本当なのか・・・」

「本当だ」

「私には、自然災害をキャッチする力がある」

「しかも、今回は、いままでとは、違う特別なものだ」

・・・

「ここだけでは、ないのだな、災害が起きているのは・・・」

・・・

「わかった、お前達を信じよう」

「さあ、ここを通るがよい」

「フリーザー!!」

「ただし!!」

「これ以上災害が広がらないように食い止めるのだ!」

「頼んだぞ!!」

「ああ、約束する!任せろフリーザー!!」

「バサア！」

フリーザーは、どこかへ、飛び去って行った

「ふう、助かった」

「ありがとな、おかげで助かった」

「・・・」

「礼を言う暇があるなら、一刻も早く、自然災害を食い止めることだ」

「このままでは、良くない事が起こる・・・私の本能がそう告げているのだ・・・」

「まあ・・・そうだが・・・」

「私は、自然災害の恐ろしさを察知し、危機を感じたままここへ、やってきたのだが・・・」

「ここからは、力を合わせた方が良さそうだな・・・」

「私は、お前達の仲間になろう」

「ホントか!？」

「本当だ」

「災害を食い止めるには、協力した方がいい」

「ありがとな!」

かくして・・・

樹氷の森を越えたレン達は、さらに北へ目指しました・・・

そして、先に進めば進むほど・・・

厳しさも増していったのです

第18話 VS フリーザー！（後書き）

はい 第18話 完 です

第19話 「氷雪の霊峰を抜けて・・・」

ゆっくりまっつてね！

第19話 「氷雪の霊峰を抜けて・・・」(前書き)

はい、ちょっと遅れましたが、第19話完成です
では、どうぞ！

第19話 「氷雪の霊峰を抜けて・・・」

第19話 「氷雪の霊峰を抜けて・・・」

雪山の道

ザッザッザッ・・・

・・・

雪山の道がひたすら続いてるんだけど・・・
周りの景色が変わってる気がしない・・・
ここまでかなり歩いたんだけどな・・・
フシギダネも大分疲れてるみたいだし・・・
それよりも、今まで、必死に旅を続けてきたけど・・・
この先に・・・なにかあるんだろうか・・・
本当に・・・本当にこれよかったのか・・・

「うう・・・寒すぎる・・・」

「あたりが、雪だらけなせいか、ずっと同じ景色だし・・・」

「これ・・・本当に先に進んでるのかしら・・・」

「ところで、レン。思ったんだけど・・・」

「等々、誰もいない場所に来たって感じだし・・・」

「この先、歩いてても、ないもない気がするし・・・」

「私、もうへとへとだし・・・」

「ねえ、レン。私たち・・・どうなっちゃうのかしら・・・」

「わかんねえよ・・・そんなの」

「・・・ゴメンね。私不安にさせちゃうような事言っちゃって・・・」

「先が分からなくても、歩けば道は開けるよね！」

「きつと、だいじょうぶよこの先に何かがある」

「レンを信じて、ここまでやってきたんだし……」
「私……どこまでも着いて行くよ……」

「そうだよな……」

「フシギダネは、俺を迷わず信じてくれる」

「なのに、俺が迷っちゃ駄目だ」

「もっと、自分を信じなきゃ……」

「そう決心したその時、めまいがおきた」

「うぐっ……」

「な、なんだ……？」

「め、めまい……か？」

「どうかしたの？レン」

「突然、声が聞こえてきた」

「『ついに……』」

「『ついにここまで……』」

「な、なんだ？」

「誰かが……誰かが語りかけてくる……」

「フ、フシギダネ……じゃないよな……」

「この声……どこかで、聞いたことのあるような……」

「『ついに……ここまでできたのですね……』」

「『お待ちしております』」

「「サ、サーナイト……」」

「『よかった！ やつとお会いできました！』」

「「き、君は……いつたい……」」

「「どうかしたのか？」」

「「レン、どうしたの？」」

「さつきから、独り言いつて・・・」

『ほかの方々には、私の姿は、見えません』

『ここからまつすぐもつすこし進んだところに、氷雪の霊峰という山脈があります』

『その頂上の奥に・・・キュウゴンがいます』
『キュウゴンが!?!』

『キュウゴンは、あなた方がくるのを待っています』

『どうかお気をつけて・・・』

「あ!ちよ、ちよつと待つて・・・」

・・・

「レン!ねえレンつてば!」

「どうしたの?レン、いつたいなにがあつたの?」

「あ、実は・・・」

俺は、サーナイトのことを話した

「そっかあ、そんなことがあつたんだ・・・」

「それで、さつき、ポケつとしてたんだね」

ザツザツザツ・・・

少し進むと、山のようなものが見えた

あれが氷雪の霊峰か?

「もしかして、あの山の頂上にキュウゴンが・・・」

「ああ、おそらくあの頂上にいるだろう」

「レン!ここまで・・・ここまで、頑張つてきたかいがあつたね!」

「ああ・・・」

「これで・・・レンの疑いも、やっと晴れるよ!!--」

「・・・」

「レン・・・そんな不安そうな顔しないでよ・・・」

「サーナイトを見捨てたのは、もしかしたら、自分かも知れない・・・」

「けど」

「そんなのありえないよ・・・」

「なんで・・・そこまで信じられるんだ？」

「なんでってそりゃあ、ちょっと前は疑った事もあったけど・・・」

「今は・・・あれ？どうしてだろ？」

「でも、レンは、いい人だし・・・」

「私が救助隊をやりたいと思ってたときに、森でレンとあった・・・」

「

「思い返すと、その時から、なにかピンと来るものがあったの」

「私は、レンを信じるわ」

「とにかく、頂上に行けば、真実がわかるわ」

「レン、アブソル、がんばりましょー！」

「ああ！」

タッタッタツ・・・

少し進むと、チルツト2体と、コモル 2体が近づいてきた

「俺が、チルツトと戦う。」

「フシギダネとアブソルはコモル と戦ってくれ」

「わかったわ」

「任せろ」

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

チルツトは、でんきショックは、横に避けた

攻撃を避けたチルツトが、突撃してきた

そして、くちばしで突いてきた！

「いてっ！」

避ける事ができず、手で防いだ

「やったな・・・」

「くらえ！でんきショック！」

バリバリ！

隙だらけになったチルツトに当たった

効果抜群で力尽きたようだ

よし、もう1体だ！

そう思つて振り向いた瞬間

パシン！

「うおっ！」

突然、後ろから叩かれた感覚した

それと同時に体の力が抜けた

「レン！」

「でんこうせっか！」

ドン！

横でチルツトが倒れた

「だいじょうぶか！」

横にアブソルが来た

チルツトを倒したのは、どうやらアブソルのようだ

「あ、ああだいじょうぶだ」

「アブソル、コモル は？」

「もう倒してるさ」

「レン！だいじょうぶ！？」

「だいじょうぶだ」

「よかった・・・」

「とりあえず先に進もう」

「そうね・・・」

タッタッタッタ・・・

第19話 「氷雪の霊峰を抜けて・・・」(後書き)

はい！第19話 完です！

第20話 「真実」

ゆっくりまっ歩いてね！

第20話 「真実」(前書き)

はい！第20話完成です！
では、どうぞ！

第20話 「真実」

第20話 「真実」

氷雪の霊峰 頂上

「はぁ・・・はぁ・・・」

「やっと、着いた・・・」

「ここが、頂上よね？」

「ああ、ここが頂上だ」

「キユウコンは、どこにいるんだ？」

周りを見渡していると

『いた！レン達をみつけたぞ！』

『おっ！あそこか！』

誰かの声が聞こえた

タッタッタ・・・

「フ、フーデイン！！」

声の主は、フーデイン達だった

「やれやれ、やっと追いついたぜ」

「おかげでこんな遠いとこまで来るハメになっちまった・・・」

「まあ、そういうなバンギラス」

「やっとここまで、ケリをつけられるんだ」

「俺は、戦いたくて、もうつづつずしてたんだぜ」

「フシギダネ、悪く思うなよ」

「俺は、容赦はしないからな！」

「そ、そんな・・・」

「レン・・・できれば、こうなりたくなかったんだが・・・」

「これも運命だ・・・」

「平和をもたらすことがワシ達、救助隊の使命なのだ・・・」

「ワシ達は・・・お前を全力で、倒す!!」

「戦うしかないのか!」

「行くぞ!!」

タツ!

『待て!』

謎の声が聞こえた瞬間、眩い光が周りを覆った
光が消えたあと、頂上の中には、

金色の体と、9本の尻尾を持つポケモンがいた
それは、

「・・・!キユウコン!!」

キユウコンだ

「な、なに!?キユウコンだと!??」

「あ、あれがキユウコン・・・」

「伝説は・・・やはり、実在していたのか・・・」

「フリーデイン、戦う必要はない」

「この者は、私の客だ」

「お、教えてくれ!キユウコン!」

「伝説にでてきた人間は、誰なのかを!」

「いや・・・そもそも、伝説にあった出来事は、本当なのか!??」

「その答えによつては・・・ワシは、そいつを倒さなくてはなら
ん!!」

「・・・崇りの話しが伝説としてどう伝えられたか・・・」

「私の知るところでは、ない」

「ただし・・・あつた事は、本当だ」

昔、私はある人間に、崇りを掛けようとした

しかしその時、その人間のパートナーであるサーナイトが・・・

自らの実を犠牲に崇りを受けたのだ

にも関わらず、人間は卑怯な事に・・・サーナイトを
逃げだした・・・

やがて、その人間は、ポケモンに転生した・・・

ポケモンに姿を変えたその人間は・・・今もなお生きている・・・

「その、人間とは・・・？」

「その人間とは、誰の事なんだ・・・？」

「レン・・・」

「安心しろお前ではない」

え・・・？

「今・・・今、なんて・・・いったの？」

「レンは伝説にでてくる人間では、ないと、言ったのだ」

「な、なんと・・・」

「・・・なんで・・・かな・・・」

「私、緊張してたせいかしら・・・体が・・・動かないよ・・・」

「よいしょ・・・」

フシギダネがゆっくりりと、俺に近づいてきた

「レン・・・」

「良かったあ！！やっぱり、やっぱりレンは違っただよ！！！！」

「私の信じたとおりだったわ！レンがそんなわけがないもんね！！」

「それと、もうひとつ」

「確かに、私は、世界のバランスが崩れると予言したが・・・」

「人間がポケモンになったことと世界のバランスが崩れた事は、関

係していない」

「自然災害がおきている原因・・・それは、また別のところにある

のだ」

「やい！フーディン達！違っただじゃないか！」

「さんざんレンを疑っちゃってさ！」

「い・・・いや、すまない・・・」

「ゴメンな。ゲンガーの奴に乗せられちゃった・・・」

「いや、俺は、そうじゃないと思ってたんだよ」

「レンがそんなひどい奴には、見えないモンな！ははは……」
嘘つけ、戦いたくてうずうずしてたって言っただくせに……

「それにしても……」

「苦しい旅を乗り越え、よく真実をみつけたものだ……」

「おもごとだ、レンよ」

「よかったわ！やっぱり私の信じてたとおりだったわ！」

「あれ？でも、ちよつと待ってよ……」

「じゃあさ、なんで、レンは、ポケモンになっちゃったの？」

そ、そういえば……

「レンが伝説にでてきた人間と違うってのはわかったんだけど……」

「だったら、レンがポケモンになっちゃった理由って、なんなんだろう？」

グラグラ……

「わわっ！じ、地面が揺れた!？」

「じ、地震か!？」

「ちかくへんどう地殻変動だ」

「ますます、自然災害が進んでいるのだ」

「そして、この地殻変動によって……」

「いままで地中深くに眠っていた大地の化身」

「グラードンが復活する!!」

「なに!?!グラードンだと!?!」

「グ、グラードンが!?!」

「な、なんなの!?!そのグラードンって!?!」

「神話の世界に語り継がれている伝説のポケモンだ」

「大地を盛り上げて、大陸を広げたポケモンであり……」

「カイオーガと死闘のすえ、眠りに着いたとされているが……」

「グライードンが、暴れだしたら、大変な事になる」

「早く、止めなくてわ!!」

「ワシ達が行こう」

「私たちも行くよ!」

「いや、お前たちは残ってくれ」

「グライードンは、いままでのポケモンとは、レベルが違う・・・」

「そういうこつた。お前らは、久しぶりに帰って、ゆっくり休んでるよ」

「心配するな、ゴールドランクは、ダメじゃねえ」

「早い所、かたづけて、すぐ戻ってくるぜ」

「よし、グライードンを沈めに行くぞ!」

『おう!!』

こうして・・・

フリーデン達は、ふっかつしたグライードンを沈めに地底へ行きました
一方、疑いの晴れたレン達は・・・

長かった旅を終え・・・

自分たちの居場所へと戻るのです・・・

第20話 「真実」(後書き)

はい！第20話 完 です

20話目かぁ・・・

レン「いよいよ終盤に近づいてきたな」
だねえ・・・

第21話「久しぶり!!」

第21話 「久しぶり!!」 (前書き)

はい!第21話完成です!
それでわ、どうぞ!!

第21話 「久しぶり!!」

第21話 「久しぶり!!」

ポケモン広場

広場には、ゲンガーとアーボ、ブルーや、ハスブレロ達がい

「ケケツ！お前ら！」

「なんで、レン達を追っていかないんだ？」

「そんなこと言われたってなあ……」

「俺達には、ムリだよ……」

「レン達、ずいぶん遠くまで逃げたっていうじゃないか」

「僕たち、いけても、せいぜい群青の洞窟までだよ」

「俺も、あとをおつたんだが……」

「あいつ等、炎の山へ入って行きやがった」

「俺は、とても、入って行けず、そこでもう見失ったよ」

「俺は、草タイプだから、炎は苦手なんだ」

「レン達がそのあと、どうなったかは、しらん」

「しかし……あいつ等、炎の山に挑むとは……」

「俺なんかと違ってたくましくなったもんだ!!はっはっはっ!!」

「ケケツ！なんてだらしない奴ばかりだ！」

「そういうゲンガー達は、なんなんだよ！」

「ずっと、広場においてなにもしてないじゃないか!!」

「そこまで言うなら、お前達こそ行けよ！」

「俺達は、いいんだよ！ケケツ！」

「レンがやられたって知らせを受けるのが、俺達の役目だからな！

ケケケツ！」

「ちっ！勝手に決めてやがる……」

「た、たいへんよ〜!」

広場に一匹のポケモンが走ってきた

「チャーレム、どうした?」

「レンが・・・レンが・・・!」

「おおっ!とうとう、レンの奴がくたばったのか!ケケッ!」

「違うのよ!その逆よ!」

「レン達が帰ってきたのよ!」

「ケケッ!?なんだと!?!」

「お、おい!あそこに・・・」

ダーテングの指さす方向には、

「疲れたあ〜」

「めっちゃ長い距離を休まず歩いてきたからな・・・」

「・・・レンさん!フシギダネさん!」

「か、帰ってきたんだ・・・!」

「みんな、ただいま!!」

「ふう・・・やっと帰ってこれたか」

「懐かしいな、この広場」

「うん・・・」

「おい!フシギダネ!」

「あっ!ゲンガー!!しばらくね」

(ケケッ!なんだ?あの自信にみちた態度は・・・)

(ケケッ!まさか・・・)

「ゲンガー!あんたの言ったことはデタラメだったわ!」

「レンは、関係なかったじゃない!」

「レンは、無実だったの!!!」

「ウゲゲッ!?!」

「な、なんだと！」

「本当なのか!？」

「ええ、キユウコンに直接あつて、聞いたの」

「レンは、伝説にで出来た人間では、ないってね」

「それがわかつたから、帰ってきたの！」

「ウゲゲゲッ！」

「ケケッ！ちよ、ちよっと待て、信用ならんな」

「そこまで、言うなら、証拠を見せてみるよ！」

「しょ、証拠？」

「そうさ！証拠さ！ケケッ！ほら、早くだせよ！」

「証拠は・・・ない・・・けど」

「ケケケケッ！証拠がなくちゃ、しょうがない!!」

「自分から、倒されにくるなんて、ばかな奴だぜ！ケケッ！」

「さあ、みんなレン達を倒すんだ!!ケケケッ！」

「・・・あれ？誰も・・・攻撃してこない・・・？」

「・・・ケケッ!??みんな」、どうした?レンをやっつけないのか?」

「僕は・・・前から、レンさんを信じてたんだ！」

「お前なんかにだまされるもんか！」

「キヤタピーちゃん・・・」

「ウゲッ！」

「・・・俺もだ」

「俺は、以前、レンに助けてもらった」

「お前達に言われて、しかたなく倒そうとしたが・・・」

「だが、レン達が悪い奴には思えない」

「ダーテング・・・」

「ウゲゲゲッ!!」

「俺も、レンを信じるぞ!!」

「そうだ!そうだ!証拠がなんだってんだ!!」

「みんな・・・」
「ウゲゲゲゲッ!!」

「ごうが〜い!ごうが〜い!」

ペリッパーが飛んできて、新聞をばらまいた

「なんだ?これ?」

「なんかの新聞・・・みたいだわね?」

ハスブレロが、新聞を手に取った

「よんでみるぞ、えーと、なにになに?」

ポケモンニュース Ⅱ号外!Ⅱ

『レンは、無実だった!!』

キュウコンに出会ったレンは、フーディンの立ち会いのもと・・・
自分が伝説にでてきた人間では、ないという事、証明した
これにより、ゲンガーの言った事は、真っ赤なウソである事が判明
した

ーおわりー

「ウゲゲゲゲゲゲ〜!!!!」

「キ、貴様ら〜!!」

「ゲゲゲッ!に、逃げろ〜!!」

ゲンガー達が、湖の方に逃げて行った

あれ?そっちは、たしか行き止まりのような・・・

「あ、までー!!このやるー!!だましやがってー!!」
ダーテング達も、ゲンガーを追って、湖の方へ走っていった

「お帰りなさい!レンさん!フシギダネさん!」

「うん!キヤタピーちゃん、ただいま!!」

「おう！ただいま！」

「約束どおり、帰ってきたわよ！」

「ぐすん……」

「よかったです……レンさんの疑いが晴れて……」

「うん、本当によかった……」

「これでもう、みんなから逃げ回らなくても、済むわ……」

「レン、今日は、疲れたし、帰って寝ましょ」

「ああ」

「明日から、救助隊もふっかつよ！頑張りましょ！」

「おう！！」

第21話 「久しぶり!!」 (後書き)

はい!第21話 完です

第22話もゆっくり待って行ってね!

第22話 サーナイトの心情(前書き)

はい恭作も終了し、こちらも再開！
ではどうぞー！

第22話 サーナイトの心情

第22話 「サーナイトの心情」

・・・

こ、これって・・・

夢か・・・

なんか・・・久しぶりだな・・・この夢

サーナイトが姿を現した

サーナイト・・・

『はい・・・』

俺さ、お前にちょっと聞きたいことがあるんだが・・・

『なんですか・・・？』

なんで、俺の夢の中に現れるんだ？

『私は、精霊の使いとして、あなたを見守る事・・・それが、私の役目です』

精霊の使い？

『わたしは、あるトレーナーの代わりにキュウコンの祟りを受け、このような、実態のない存在になってしまいました』

あるトレーナーって、あのキュウコン伝説にでてきた人間の事だよな？

ひどいよな、君を見捨てるなんてさ

『はい、確かに酷い人です』

『いじわるしたり、だましたり、本当にしょうがない人です』

『でも・・・私は、あの人を恨んでなんかいません』

え？なんでだよ・・・？

『それは・・・ホント、どうしてでしょう・・・私もよくわかりま

せんが・・・」

「酷い人なんですけど、なぜか、憎めないんですよ・・・」

「ちよつと変わった人なんですけど、いいところもあるんですよ・・・」

」

「それに私、あの時必死だったから・・・」

あの時・・・ってキュウコンのたたりの時か？

「はい、キュウコンの祟り時、私は、あの人を全力で守りました」

「トレーナーの身に危険が迫れば、その人を命がけでお守りする、

それが、私達サーナイトなのです」

「無事、お守りできた、私は、それだけで、うれしいのです・・・」

自分の命を犠牲にしてまで、トレーナーを守る・・・

やっぱり、すごいよな・・・サーナイトは・・・

「あと、私は、いまのような存在になっても、そんないやじゃない

ですよ？」

「私は、今の役目に誇りを持っています」

・・・役目？

「はい、万物には、すべて、役割があります」

「私には、私の役割があるように・・・」

「あなたには、あなたの役割があるのです・・・」

「あなたは・・・ある役目を背負って、ここに来ました」

「そして、あなたは、そのためにポケモンになったのです」

え？・・・それって、どういう事だ？

ゴゴゴゴ・・・

じ、地震!？

地震が起きると、サーナイトの体が薄れていった

あっ!ま、待ってくれ!もっと聞きたい事が・・・

・・・

朝

・・・
地震があつたよな・・・
地震があつたとき、あの夢を見てたよね・・・
たしか・・・サーナイト・・・なんか大事なこと言つてたよな・・・
えーと・・・

『あなたは・・・ある役目を背負つて、ここに来ました』
『そして、あなたは、そのためにポケモンになつたのです』

そつだ！サーナイトは、知っているんだ！なぜ、俺がポケモンになつたのか
あと・・・目的とか言つてたよな・・・なんだろう・・・

第22話 サーナイトの心情（後書き）

はい、第22話 完です

次回もゆっくり待っていつてね！

第23話 騒ぎの森のお騒がせ者(前書き)

溜めて置いた小説はこれで最後!!

これから、また更新遅くなっちゃうねしかたないね
とりあえずどうぞ!

第23話 騒ぎの森のお騒がせ者

第23話 騒ぎの森のお騒がせ者

「おはよーレン〜」

「ああ、おはよう・・・」

「・・・ん？どうかしたの？」

「あ、そうか！さっきの地震ね！」

「まあ・・・うん・・・」

「レンも私と同じ心配してるのね・・・」

「フーディン達、ほんとに大丈夫かな・・・」

「グラードンは、強いつて話だから、ちょっと心配なのよね・・・」

「でも、フーディン達も強いからだいじょうぶよね」

「だといけどな・・・」

「まあ、グラードンの事は、フーディン達にまかせておいたわけだし・・・」

「とりあえず、帰るのを待つしかないわね・・・」

「私達は、私たちに出来ることをやらなくちゃね・・・」

「だな・・・」

「ア、アノ〜・・・」

フシギダネと話していると、後ろから誰かの声が聞こえた

「ん？」

「ア、アノ〜僕、ソーナノって言うんだけど・・・」「ソーナス！」

「あの、ペリッパ―連絡所の掲示板にある、僕たちの頼みを見てほしいの」

「ソーナス！」

「必ず、見てほしいの!」

「ソォォォーナンスウ！」

「よろしく願います、なのそれじゃあ、失礼しますなの・・・」
「ソーナンス！」

ソーナノと、ソーナンスは、どこかへ去って行った

「なんだったんだろ？」

「さあ？」

「でも、さっきのソーナノってポケモン、ペリッパー連絡所の掲示板を見てほしって言ってたよね・・・」

「ああ・・・」

「ねえ、レン。連絡所に行ってみよ」

「だな」

ザッザッザッ・・・

ペリッパー連絡所

「えーと・・・」

「これじゃない？」

フシギダネがつるのムチである依頼を指した

依頼主はソーナノだった

依頼内容は・・・

『マンキーを懲らしめてください！』

場所 騒ぎの森

「掲示板にマンキーを懲らしめてくださいって書いてあったよね？」

「あの依頼はあなたたちのよね？」

「ソーナノ！」 「ソーナンス！」

「森でマンキー達が暴れて、みんな困ってるノ」 「ソーナンス！」

「なんで、暴れてるのかわかんないケド・・・」

「いつも、機嫌が悪いみたいで、ところかまわず、襲ってくるノ！」

「ソーナンス！」
「まあ、それは困るわよね・・・」
「レン行ってみましょ」
「ああ」
「よろしくお願いナノ！」「ソーナンスウ！！」

騒ぎの森

「ふーん、ここが騒ぎの森か」
「この先にマンキーがいるのね」
「行くぞ！」
「うん！」
タツタツタツ・・・

入って、何歩か進むと、タネボーとエイパムが出てきた
「フシギダネ、お前はエイパムと戦ってくれ」

「くられえ、でんきショック！」
バリバリ！
タネボーにあたったが、まだ体力はある様子だった
「もういっちょよ！」
「たたきつける！」

バシン！
タネボーの頭に尻尾があたる
タネボーはふらふらとして、倒れた
「よっしゃ！」

「きゃあああああ！！」
突然、フシギダネの叫び声が聞こえた
「レン！！助けて！！」
フシギダネの方を見た

エイパムやコンパンとかに囲まれていた
「フシギダネ!!」

急いでフシギダネに所へ向かう
ザツ!

エイパムが俺の前に立ちはだかってきた

「くそつ、邪魔だ!」

「でんこうせっか!」

サツ!

でんこうせっかで後ろに回った

「たたきつける!」

バシン!

後ろから、エイパムの頭に尻尾をたたきつけた

ふらふらとはしていたが、まだ体力があったようだ

「でんきショック!」

バリバリ!

瀕死のエイパムにでんきショックでとどめを指した

「フシギダネ!大丈夫か!」

フシギダネをかこっていたポケモンは全員倒れていた

「もう、遅かったじゃない!全部倒しちゃったわ!」

「みただいな・・・」

「さつ、行きましょ!」

「お、おう・・・」

サツサツサツ・・・

騒ぎの森 最下層

「ここか?最下層は・・・」

「ん?誰だお前は」

「俺ら、自分で言うのもなんだが・・・」

「ものすげー怒りっぱいんだぜ!」

「特にさ、間抜けな顔を見ると、ムカつくんだ!」

「うおー!そのアホな表情……」

「ムカつく!ムカつくぞ!!」

「ムキーーーー!!ヤッチマエー!!」

「無駄にうるせえ……」

「でんこうせつか!」
「サツ!」

マンキーたちの後ろに回った

「でんきシヨック!」

バリバリ!

「ムキー!ヤッタナー!」

「けたぐり!」

マンキーがおもつきり足を上げて蹴ろうとしてきた

「よつと」

普通に横に避けた、ていうか遅い

「たたきつける」

バシン!

攻撃してきたマンキーに尻尾をたたきつけた

力尽きたようだ

「クラエ!からてチョップ!」

後ろからマンキーが攻撃を仕掛けてきた

「やばっ!」

「つるのムチ!」

バシン!

攻撃しようとしてきたマンキーが倒れた

「あれ?もう倒れちゃったの?」

「みたいだな……」

ということは……

「あと一人か」

残ったのはマンキー1人

「じゃ、さつさと終わらせちゃいませよ」

「だな」

マンキーに近づくと

「ヒ、ヒイ！」

ギヤアアアアアアアア！！

しばらくおまちください……

ペリッパ―連絡所

「マンキー達、懲らしめてきたわよ」

「これでおとなしくなると思うわ」

「みなさん、本当にありがとうございますナノ！」「ソーナンス！」

「感謝のきもちで、いっぱいナノ！」

「これはほんのお礼ナノ」

ソーナノから、トゲトゲの木の実をもらった

……

「これって、栗の実？」

「はい。栗の実ナノ。実は僕たち……」

「お金とかもってないノ」「ソーナンス」

「だから、お礼といつても、その栗しかあげられないけど……」

「やっぱり、不満ナノ？」

「い、いや、別にそんなことないよ……」

「栗の実って美味しいし、私は好きよ！」

なんか『実はお金もほしいんだけど……』って顔してるぞ。フシ

ギダネ……

「コラア！！！」

後ろからどなり声が聞こえた

後ろを振り向く

「あっ！マンキー！！！」

「ソーナンスウ！？」

「まさかお前ら、やられたこと根にもって、ここまで追ってきたんじゃない……」

「その通り！」

「やい！さつきはよくもやってくれたな！」

「今度は負けねえぜ！ボコボコにしてやる！！！」

「ムキーー！！ヤツチマエー！！」

「ああ、もう！めんどくさいなあ！」

突然、マンキー達が止まった

「うおっ、あ、あれは！？」

「ク、クリだ！」

「ほ、ほんとだ！栗の実だ！」

「へ？」

『ヒソヒソ……』

「な、なにやってんの？」

「どうやら、なにか相談してるみたいナノ」「ソーダンス」

こっちに近づいてきた

「な、なによ……」

「あのさぁ……実はお願いがあるんだ……」

「お前が待つてるクリの実をさ……俺らに出来ないか？」

「俺らさ、栗の実が大好物なんだよ！」

「もうさ、クリの実なしじゃ、生きられねえってぐらいな！」

「……クリぐらい、自分たちでとってくればいいんじゃないの？」

「クリは、ほら、イガイガがついてるだろ？」

「イガイガをはがそうとするとチクチクしてよ……しまいには、

ムキーー！ってなっちまうんだ！」

「だからさ、お願いだ！栗の実をくれよ！」
「なんでも言うこと聞くからさ、な？な？」
「え、どうする？レン」

「どうしようか？」

「・・・あ、そうだ！！」

「お前ら、力仕事は得意だよな？」

「力仕事？」

「力はあるが、仕事は嫌いだ」

「でも、クリの実のためなら・・・」

「よし、じゃあ、こうするか！」

「俺たちの救助基地をもっとさ、立派なもんにするつもりだったんだ」

「救助基地？」

「そうさ！俺たち、救助隊の基地！」

「もしさ、救助基地の改築を手伝ってくれたら、クリの実をあげてもいいんだが？」

「ヒソヒソ・・・」

また相談し始めた

どうだ？

「わかった！手伝ってやろうじゃねえか！」

「ホントか！」

「ああ！任しときな！」

「どんどん、材料を運んで、ガンガン組み立ててやるぜ！！」

「・・・でも、そのかわり、クリの実は頼むぞ」

「ああ、わかってるって」

「僕も、僕も手伝います！」

「キヤタピーちゃん！！」

「僕、糸をはいて、材料を接着します！」

「僕も手伝うノ！」「ソーナンス！」

「お礼がクリの実だけじゃ、もうしわけないノ！」

「ソオオーナンスウ！！」

「みんな・・・ありがとな！」

「よし、早速とりかかろうぜ！」」「よっしゃ！」」「よっしゃあ！」

かくして、レン達の救助隊、スターズの救助基地の改築工事が始まりました

第23話 騒ぎの森のお騒がせ者（後書き）

はい、第23話 完です

次回もサービスサービスウ！

第24話 救助基地改築途中経過！（前書き）

・・・なんかすみません・・・
とりあえず・・・どうぞ

第24話 救助基地改築途中経過！

第24話 救助基地改築途中経過！

数日後の朝・・・

「ふぁー・・・」

「朝か・・・」

「とりあえず、外に出るか・・・」
タツタツタツ...

「レン、おっはよー」

「おはよう・・・」

「にしても、結構出来てきたね・・・」
家の半分ぐらいはできている
「だな」

「これも、みんなのおかげね！」

「ソーナンス！」

「でも、これからも大変なところが残ってるです」

「そうよね・・・でも、あと一息ね、頑張りましょ！キャタピーち
やん、ソーナンス、ソーナノ、マンキー！」

「・・・あれ？マンキーは？」

「あ！あそこに！」

マンキーは、家の横に置いてあった木材にもたれかかっていた
「どうかしたの？」

「頑張つて、続きを作ります！」

「やだ」

「はぁ！？」

「こんなかつたるい事、やってられるかよ・・・」

「ほんとだよな」

「まあ、クリの実がありゃあ別だけどな」

「・・・こいつら・・・」

「とにかく、クリの実くれないと、俺たちやる気しないぜ」

「困ったわねレン」

「マンキー達、クリの実あげないとやる気出してくれないみたいだし・・・」

「とりあえず今日は、騒ぎの森に行きましょう」

「あと、依頼をこなすぞ」

「うん」

ペリッパ―連絡所 掲示板前

「えつと・・・」

「これと、これと、これ、あとこれね」

「4つか」

「じゃ、行きましょー!」

タッタッタツ・・・

「はあ・・・疲れたー・・・」

「ほんと、今日はいつもより動いたからね・・・」

「でも、クリの実は確保出来たからよかつたよ」

「だな、」

「ん？クリの実持ってきたのか？」

「持ってきたよ、はい」

クリの実のイガイガをむいてマンキーに渡した

「おおっ！クリの実イーーーーー!」

「お前たち、気合入れるぞ!」

「お前、なにくつろいでるんだよ!やる気出せよ!」

「今から、頑張つて救助基地改築するぜ!!」

「どんだん材料運んで、ガンガン組み立て行くからよ!」

こいつら・・・おもしれえ・・・

かくして、クリの実を貰ったマンキー達は、やる気をだし、救助基地の拡張工事は再開されました

そして・・・救助基地はまたひとつ、完成へと近づいたのです

「レン、マンキー達またやる気なくしちゃうかもしれないから、これからもクリの実持ってきてあげましょ」

「そっだな」

第24話 救助基地改築途中経過！（後書き）

はい第24話完了です

なんか急いで作ったからいろいろおかしい所がありますね・・・
すみません・・・

第25話 騒ぎの森にて（前書き）

はい、第25話かんせいです

それではどじろー！

第25話 騒ぎの森にて

第25話 「騒ぎの森にて」

朝…

「レン、おはよー」

「おはよう……」

「レンやっぱり今日も騒ぎの森に行くの？」

「行くしかないだろ？」

「まあ、そうよね……」

そんな会話を交わしながら、ペリッパ―連絡所の方へと進む

ペリッパ―連絡所 掲示板前

「ん〜」

掲示板の依頼を見てると

「あれ？騒ぎの森の依頼……ないよ？」

「ほ、ホントだ……」

「じじいさん〜」

「うーん・・・」

少しの間考える

「仕方ない、騒ぎの森に行くか」

「分かったわ」

サツサツサツ・・・

騒ぎの森

いつもどおり、敵を倒しながら、階段を降りる

「なんか、今日は変な感じするんだよな・・・」

「え？それってどういう事？」

「いや、ん？なんていうか・・・敵が好戦的じゃない・・・か？」

ここに入ってから、倒した敵は5〜6匹ぐらいなのだ

「たしかにそんな感じよね・・・？」

「とりあえず、一番下まで降りてみるか」

タツタツタツ・・・

騒ぎの森 最下層

やっぱりここに降りてくるまでに倒した敵は少なかった

やっぱり何も・・・

ガサッ

後ろから物音が聞こえた

「なんだ!？」

勢い良く後ろを振り向く

後ろには、ヒノアラシがいた

「な、なんでこんなところにこいつが!？」

ここは森だ 炎タイプのヒノアラシが居るはずがない
じゃあ、何故だ？

「レ、レン!どうするの!？」

「とりあえず、倒すぞ!」

「う、うん!」

タッタッタッ・・・

ヒノアラシに向かって走る

「叩きつける!」

バン！

ヒノアラシは、俺の尻尾を横によける
そのまま顔をこちらに向けて、大きく息を吸う

「ヤバイ！」

急いで、ヒノアラシから距離を取ろうとする

ポウツ！

ヒノアラシの口から火の粉が飛び出してくる
火の粉をギリギリでよける

「ひえ・・・あぶね」

ヒノアラシがこっちに向かってくる
突然、凄い速さでこっちに走ってくる

「でんこうせっか！？」

後ろを振り返る

ヒノアラシが大きく息を吸い、そして、吐き出し

「熱っ！」

距離を取る

「大丈夫！？レン！」

「ああ、大丈夫だ、火傷しただけだし・・・」

「それよりあいつ、結構強いぞ・・・」

「うん・・・」

「行くぞ、フシギダネ」

タッタッタツ・・・

「はっばカッター！」

シュン！

フシギダネがはっばカッターを放つ

ヒノアラシはそれをよける

バチツ・・・

「喰らえ！電気ショック！」

バリバリ！

ヒノアラシに電気ショックが当たる

だが、ヒノアラシはまだピンピンしてる

「さすがに一撃じゃ倒れないか」

ヒノアラシが電光石火でフシギダネの後ろに回る

「させるか！」

「電気ショック！」

バリバリ！

ヒノアラシに向かって、電気ショックを放つ

ヒノアラシがまた、電光石火で逃げる

「なっ！」

「レン！後ろ！」

俺が後ろを振り向く前に、後ろに熱が来る

「あっつー！！！」

「くそ……」

「俺だつて……」

「電光石火！」

電光石火でヒノアラシに走ってくる

ヒノアラシが構える

ヒノアラシの前で、上に飛ぶ

「叩きつける！」

尻尾に力を込めて、振り下ろす

バシン！！

ヒノアラシはギリギリで持ちこたえてる

「ドドメー！！」

「つるのムチ！！」

バシン！

ヒノアラシが倒れた

「はぁ・・・はぁ・・・」

「た、倒した？」

「ああ、多分・・・」

「それで・・・敵が好戦的じゃなかったのは、この子のせい？」

「さあな・・・」

「こいつは、多分、救助隊だろうな」

「え？なんで・・・？」

「ほら、あつちに道具箱とバッチがあるだろ」

フロアの端に道具箱と救助隊バッチが落ちていた

「理由はわかんないけど、自我を失って、ここでさまよってたんだろな」

「レン、この子どもにするの？」

「このまま、放っておくのもなんだし、家に連れてってやるか」

「フシギダネ、道具箱とバッチ、持つといて」

「うん」

「よいしょっと・・・」

「えーと・・・穴抜け玉は・・・」

「お、あつたあつた」

「フシギダネへ帰るぞー」

「あ、うん！」

穴抜け玉を上に向かってかざす

すると、珠は光って、回りに青い光りが現れる

光はだんだん小さくなり、光りが完全消えたときには、

俺たちの姿は消えた

気がついたときには、俺の家の前だった

「あ、レンさんフシギダネさん、お帰りなさい」

「あれ？その方は？」

「ああ、こいつは、騒ぎの森で見つけた」

家に入って、藁のベットにヒノアラシを寝かせる

「フシギダネ、箱とバッチはそこに置いといて」

「分かった」

そう言うと、家にあるテーブルの横にバッチと箱を置いた

「フシギダネ、今日は帰ってもいいぞ」

「え、でも・・・」

「大丈夫だって、看病ぐらい俺でも出来るし」

「わ、わかった、じゃあ、今日は帰るね。」

「ああ、じゃあな」

フシギダネは、自分の家の方に帰った

「おい、マンキー、くりの実、見つけたぞー」

「おおー！くりの実だぁ！」

「ほれ」

「よし！お前ら、もっともっと気合入れるぞー！」

「おおー！！！」

俺は、家に入った

「さてと・・・今日の寝床どうするっかな・・・」

第25話 騒ぎの森にて（後書き）

はい 第25話 完 です

前半、マンキー達の事忘れてた（笑）

まあ、気にしない、気にしない！

次回もゆっくり待って行ってね！

第26話 ヒノアラシ(前書き)

遅くなっちゃったぜ

すまないんだぜ

それではどうぞ

第26話 ヒノアラシ

第26話 ヒノアラシ

・・・

「うう・・・ここは・・・？」

私、どうしちゃったんだっけ？

私は・・・えっと・・・

そうだ、騒ぎの森で地震にあつて気を失っちゃたんだっけ・・・

そういえば、ここは？

家・・・みたいけど・・・

助けられたのかな？

そうだ、バツクとバツチ・・・

あたりを見回す

端っこに置いてある丸いテーブルにバツクとバツチがあつた

「よいしょっと・・・」

テーブルの上にあるバツクとバツチを取る

とりあえず、外に出よう・・・

家の出口へと歩く

外は、明るくなつていて、多分もう昼頃だろう

「あ、起きましたか」

横から声が聞こえた

横を見ると、一匹のキャタピーがいた

「う、うん」

「あなたはレンさんとフシギダネさんに助けられたんですよ」
「レンと、フシギダネ？」

「ねえ、その人達つて、救助隊・・・なの？」

「うん、僕も助けられたんです」

「・・・レンって名前が少し気になるわね・・・」

「それで、その救助隊は、どこにいるんですか？」

「えっと・・・多分、お仕事に行ってるんじゃないですか？」

「おい！キャタピー！こことめてくれ！」

「一匹のマンキーがキャタピーを呼んだ」

「あ、わかりました！」

「それじゃあ、僕はあっちに行つてきます」

キャタピーはお辞儀すると、マンキーのいる方へ急いで向かっていった

「どうしようかな？大分かかりそうだし・・・」

「うーん???よし」

「私も、1依頼こなそっかな」

ペリッパ―連絡所に向かう事にした

ペリッパ―連絡所 掲示板前

さて、どうしようかな・・・

「んーできるだけ速くできる奴は・・・」

一番右端の依頼に目をやった

依頼主はパラセクト

【いなくなっちゃった友達を探してほしい】

依頼場所は騒ぎの森ね・・・

救助ランクはCね

よし、この依頼にしましょ
依頼の紙を掲示板から取る

タッタッタツ・・・

騒ぎの森

やっぱりここに来ない方がよかったかな・・・
まあ、いいやさっさと見つけて帰りますか

タッタッタツ・・・

階段まじかでタネボーとコンパンに立ち塞がれる

「めんどくさいなあ・・・もう」

コンパンがこっちに向かってくる

「ほいっと」

コンパンのたいあたりを横に避ける

「ひのこー！」

ひのこがコンパンにあたる

効果抜群でコンパンが一撃で倒れた

「もういつちよ！」

「でんこうせつか！」

でんこうせつかでタネボーの後ろへと回る

「ひのこー！」

ひのこがタネボーへと直撃した

タネボーはやっぱり倒れた

「よし、終わりっ！」

タッタッタツ・・・

「んーどこにいるのかな・・・」

あたりを見回す

「あ!！」

後ろから声がした

後ろを振り向く

そこにはピカチュウとフシギダネがいた

『あなたはレンさんとフシギダネさんに助けられたんですよ』

もしかして、この2人が私を助けてくれた人？

「えと・・・あの・・・」

「なんでここに・・・？」

「えっと・・・その・・・」

「・・・まあ、いいか」

そういつとピカチュウが先へと進む

「あ、ちょっとレン！待ってよ!！」

横にいたフシギダネがレンについて行く

「あ……あの……」

レンがこちらを振り向く

「着いて来るか？」

「あ、は、はい！」

タッタッタツ……

私の依頼も終わって、レンというポケモンにも会う事が出来た

第26話 ヒノアラシ（後書き）

はい第26話 完 です
次回もゆっくり待ってください

第27話 完成(前書き)

はあ・・・なんというかねえ・・・

まあいい

でわどどどぞぞ！

第27話 完成

第27話 完成

「す、すげえ……」

ピカチュウの頭の形で家が出来ていた

「これが……俺たちの救助基地……」

「レン！ついに……ついに出来たのよ！私たちの救助基地が……！」

「あ、ああ！」

「僕たち、すごく頑張りましたよ！」

「大変だったけど、苦労したかいがあったナノ……！」

「ソーナンス……！」

「みんな……うっ、みんな、本当にありがとう……！」

「あのよ、ちょっと聞きたいんだがよ……」

マンキーがはなしかけてくる

「ん？なに？」

「救助基地が完成したってことはさ……」

「もしかして・・・もう、クリの寒、もらえない・・・ってことか？」

「えっと・・・うん、そうだね」

「もう、こんなめんどくさいことしなくてもいいのよ」

「マンキー、いままでありがとうね！..」

「...」

マンキー達が顔を合わせる

「.....」

「ウキーーーーー！！..」

マンキー達が救助基地を攻撃してきた！

「あ！ちよ、やめてよ！..」

「このっ！止めるや！..」

みんなでマンキー達を必死に止めたおかげで救助基地は壊されずに済みました

そして、マンキー達には、くりの実をあげて、もう、暴れないと約束し、森へと帰ってもらいました

こうして

慌ただしかった救助基地の工事も終わったのです

「さてと、とりあえずだ」

「お前の名前を教えてください」

「私はミナっていうの」

「そうか・・・俺は・・・」

「レン・・・でしょ？それで、あなたの横にるのが、フシギダネ」

「あ、ああ、そうだ、なんで知ってるんだ？」

「キヤタピーに教えてもらったの」

「それで、お前は、救助隊なんだよな？」

「うん、クアルドっていうんだ」

「それで、仲間は居ないのか？」

「仲間は・・・居ない・・・」

「そうか・・・」

「えっと・・・あのさ、多分、信じてくれないだろうけど...言いたいことがあるの」

「なんだ？」

「…私は、ほんととは…ほんととはポケモンなんかじゃないの……」

「何！？」

「そ、それってどういう事なの！？」

「私は…本当の私は人間…なのよ……」

『え……？』

第27話 完成（後書き）

ヒャッハー！原作ムシ展開k t k r
次回もゆっくりしていつてね！

第28話 驚き(前書き)

はい、第28話完成です
いや、七不思議が出来てないね
では、どうぞ！

「あわっ!?!」

突然二人が叫んだ

「ちょ、どうしたんですか!?!」

「い、いや、うん、驚かせちゃってごめんね」

「えつとだ、とりあえず、理由を説明するとだな…」

「俺とお前は、同じなんだ…」

「…ええ?」

最初、この言葉の意味が分からなかった

「分かりやすく言うと、俺も同じ、元人間なんだ」

「え?ええ!?!」

「ま、まあ、そりゃあ驚くよな…」

え、ちょっと待って、私とレンは、同じで、私は人間でレンも人間で…

いや、待って、落ち着け、落ち着くのよ、私…

「あ、あの、レンさんは人だったときの記憶はあるんですか?」

「いや、俺も覚えてないんだ…」

「そつですか・・・」

「・・・なあ」

「は、はい？」

「ミナは、夢の中で、誰かに会ったことはあるのか？」

「え・・・夢の中で・・・ですか？」

「えっと・・・あ！」

「たしか、夢の中で、サーナイトに会いました！」

「ほ、ほんとか！？そ、それじゃあ、なんて言ってた！？」

「た、たしか・・・」

『いつか、あなたと同じ人が現れます
その時は、その人の仲間になって、協力してあげてください』
つて言っていました」

「そつか・・・」

「・・・なんか、反応が薄いわね・・・」

「それで、あなたはこれからどうするの？」

「それは・・・まだ決めてない・・・」

「それじゃあさ、私たちの救助隊に入らない？」

「え？」

「だって、あなた仲間がないんでしょ？」

「サーナイトだって、協力してあげてって言うってたし……」

「私たち、仲間がもつすこし欲しかったし」

「一石二鳥どころか、一石三鳥よ……」

「ね！レン……」

「まあ、仲間は多いほうがいいしな」

「そ、そんな、私なんかでもいいの？」

「もちろんよ……」

「あ、ありがとう……」

第28話 驚き(後書き)

はい、第28話 完 です
次回もゆっくりして行ってね！

第29話 芸術家志望ドール救助！（前書き）

つ、ついさっき起こったことをありのまま話すぜ！

俺はWiiで、ふつうに小説を書いていた

そして、全部書き終わったら、2000文字を越えていた

な、なにを言ってるかわからねーと思うが、俺もなにをしていたの
か分からなかった

頭がどうにかなりそうだった

催眠術とか、超スピードとかじゃ断じてねー

もっと恐ろしい物の片鱗を味わったぜ…

つまりなにが言いたいかと言うと、長いただそれだけ
それでは、どうぞ！

第29話 芸術家志望ダブル救助！

第29話 芸術家志望ダブル救助！

「ふあ〜・・・」

「もう朝なのか・・・」

サツサツサツ・・・

「おはよー、レン」

「おはよう・・・」

「おはようございますー！」

「さてと、今日からミナも加わって、3人パーティになったな」

「うん、ミナがどれくらい強いか楽しみでもあるしね」

「え、そんな…あんまり私にプレッシャーかけないでくださいよ…」

「まあ、気楽にやっつけてごうぜー！」

「それじゃあ、早速、連絡所に行きましょう」

サツサツサツ…

ペリッパー連絡所 掲示板前

「さーて、今日はいつたいどんな依頼があるかな」

掲示板を眺める

いくつかの依頼の中に気になる依頼があった

「ん？これは？」

「僕、ダブルと申しますって、随分、かしこまったタイトルね」

「で、どんな事が書いてあるんですか？」

「読んでみるな、えーと、

初めまして、僕、ダブルと申します

芸術家志望です

ある日、ただならぬ事件がありましたですね…

大人になるのがイヤで逃げ出したんですが、そしたら、道に迷ってしまいました…

森から出ようにも、出ることができず…うむむ…

場所は、遠吠えの森という所です！

だれか！たすけてくださーいっ！

だつてさ

「うーん、大人になるのがイヤで逃げ出したってどういう事なんでしょう？」

「さあな…」

「とりあえず、ダブルを助けて、聞いてみましょ」

という訳で、俺たちはダブルを助けるべく遠吠えの森へ行つた
遠吠えの森

「ここが遠吠えの森ね」

「なんか、暗そうだな」

「よし、行くか」

タツタツタツ…

「ねえ、レン」

「ん？なんだ？」

「ミナの事なんだけどさ…」

「どうかしたのか？」

「レンも人間で、ミナも人間なんですよ？」

「それだったらさ、ミナと会ったことあるんじゃない？」

「だって、元人間で、気がついたら、ポケモンになってるなんて、
偶然で済ませる事できないよな？」

「まあそうだが、そもそも、俺達、人だった時の記憶ないしさ…」

「ああ、そうだったわね…」

「ん？お二人さん、なに話してたんですか？」

「貴方の話してたの」

「え、私のですか？」

「うん、ねえ、ミナはレンの事なんか知らない？」

「え？レンさんの事…ですか？」

「うん」

「え、えーと…」

ミナが悩んでると、向こうから、ポチエナ、デルビル、ハネブーがやってきた

「はあ、こんな時に来るなんて…」

「話は後でね！」

「俺は、ポチエナと戦う、フシギダネはハネブー、ミナはデルビルと戦え！」

「了解！」

「はい！」

「くられ！電気ショック！」

バリバリ！

電気ショックはポチエナには当たらなかった

「チツ、避けられたか」

「なら…でんこうせつか！」

サツ！

ポチエナの後ろへ回る！

「たたきつける！」

尻尾を思いつきり振り下ろす

ガブツ！

腹の辺りに噛まれたような痛みが来る

「痛って！！」

ほかのポチエナに噛みつかれたようだ

「このやるつ…！」

俺が攻撃しようとしたポチエナがこちらを向き、突撃してくる

「なにっ！？」

ドンッ！

「ぐあっ！」

体当たりをもらに食らう

「くっ…」

「でんごうせつか！」

タッ！

今度は後ろに回らず、上に飛ぶ

「電気ショック！」

バリバリ！

上からの電気ショックはポチエナにヒットする
ポチエナは電気ショックを耐え、立っていた

「うらっ！トドメ！」

バシン！

尻尾をポチエナの頭へと力を込めて当てる！

「うし、次はおまえだ！」

「でんごうせつか！」

サッ！

ドン！

頭をポチエナの腹に当てる

「電気ショック！」

バリバリ！

でんこうせつかでポチエナに体当たりし、そのまま電気ショックを放つ

ポチエナは戦闘不能になった

「よしっ、フシギダネとミナは……」

「全部倒したよ！」

「終わりました！」

「よし、じゃあ早く行こうぜ！」

「うん！」

「はい！」

タッタッタッ…

「で、さっきの話の続きだけど、どうなの？」

「うーん、私自身、覚えてないんですけど…」

「最初にレンって聞いたときに、なんか聞き慣れたような感じがしました」

「それよ！」

「え？」

「それって、レンとミナは親友とか、恋人同士とかだったんじゃないの!？」

「こ、恋人…」

「あのなあ、フシギダネ、感じだから、違つかもしれないし、もし、そくだとしても恋人同士はないから、ぜったいにないから！」

「えー、でもさー」

「ないっつうの!はい、この話はこれで終わりだ!」

「さっさと、ダブル見つけて、帰ろうぜ!」

「ププツ、照れてんじゃん」

「ああ…迷っちゃったな…どこだろう、ここ…」

「全然出られないし、おなかもすいたし、困ったなあ…」

「おーい！」

「あっ！あなたは！？」

「もしかして、助けにきてくれたんですか！ありがとうございます！おかげで助かりました…！」

救助基地 前

「よかったね、ドーブル」

「けど、どうして、逃げ出したりしたんですか？」

「そうそう、依頼には大人になりたくないとかあったけど…」

「えっと…それは…」

「あっ！」

「おい、あそこにいたぞ」

「本当だ、早く連れ戻そう」

向こうから、2匹のドーブルがやってくる

「ドーブル？もしかして仲間？」

「はい…」

「さあ、来るんだ、大人になる儀式を始めるぞ」

「おとなしく、戻るんだ！」

「い、いやだ！」

「背中に足跡なんかつけられるぐらいだったら、大人になんかなりたくない！」

「ねえ、なんなの？その大人の儀式っていつのは？」

「我々、ドーブルの習性です」

「大人になるとみな、仲間から背中に足跡のマークを付けられるんです」

「前足を思いつきり、押しつけてね」

「そ、そんな格好悪い事できないよ！」

「それに僕、芸術家志望だし、デザインにはこだわりがあるんだ！」

「…そ、そうだ！僕決めました！」

「僕、レンさん達の仲間になる！」

『えっ！？』

「ここで僕、救助活動をするよ！」

「だから、群には戻らないよ、僕ここで頑張るから！」

「…そうか、それがお前の気持ちか、しかたない」

「長老には我々が話しておく」

「救助活動、がんばれよ！」

そういうと、二匹のダブルはどこかへ去っていった

「はあ、やれやれ…強引だなあ…」

「まっ、いつか」

「今日から、仲間だから、頑張つてね！ダブル！」

「やったー！ありがとうございます！」

「それで、僕、絵を書くのは得意なんです！」

「へー、そうなんだ…」

「たとえば…えつと…あつ！あれとか！」

「たとえば、あの旗のデザインを新しく作ってあげます！」

「もし、旗のデザインを変えたかったら、僕に声をかけてください
」！」

「それでは、僕は、青空草原で休んでいます。それでは」

サッサッサッ…

「さてと、今日はもう休もうか」

「だな、それじゃあ、またな」

「うん、また明日ね」

「はい、また明日です」

サッサッサッ…

フシギダネとミナはどこかへと帰っていった

「ふう、さてと、俺も寝ますか」

サッサッサッ…

第29話 芸術家志望ドール救助！（後書き）

はい 第29話 完 です

次回もゆっくうりしていつてね！

第30話 フーディンは(前書き)

2時間で書き上げた話です
それではごっぞ!

第30話 フーディンは

第30話 フーディンは

ドーブルを救助して数日後・・・

「ん〜つと・・・」

背伸びをして、藁のベットから立ち上がるつとする

ゴゴゴ・・・

「うお！？つと、地震か・・・」

・・・

「収まった・・・みたいだな」

「はぁ・・・最近多いよな・・・地震」

今まで少なかった地震が、ここ最近回数が増えてきたのである

そんなことを思いながら、基地の外へと歩いてゆく

「あ、レン、おはよう」

家の前にフシギダネとミナが立っていた

「おはよう・・・」

「おはようございます、さっき地震がありましたよね」

「うん、最近多いよね、こんなところさ」

「ここまで多いと、安心して、夜も眠れませんか・・・」

3人で話し合っていると、

「おーいーい！ー！」

向こうからハスブレロが走ってきた

「あ、ハスブレロ。どうかしたの？」

「早く広場に来い！もうみんな集まってるぞ！」

「え？集まってるって・・・なんかあったの？」

「詳しくはわからんが・・・ダーテングが呼びかけてるんだ」

「救助隊も集めてるみたいなんだ」

「レン、行ってみましょ」

「ああ」

タッタッタツ・・・

広場には、たくさんのポケモン達が集まっていた

「うわっ！ポケモン達が一杯だわ！」

「いろいろな救助隊を呼んだみたいだな」

「かなり遠くから、有名なリーダーも来てるみたいだぜ」

「ダーテングの奴、こんなに集めてどうする気だ？」

しばらくして、ダーテングが話し出した

「みんな、聞いてくれ」

「みんな、フリーディン達がグラードンを倒しに、地底に行った事は知っているな」

「もう、9日も経った」

「なのに、フリーディン達は帰ってきててもないし、なんの音沙汰もない……」

「正直、なにがあったかわからんが……」

「わからない……ってそんな事あり得んのかよ！だって、あのフリーディンだぜ！？」

「でも、現にフリーディン達は戻ってきてないじゃないか！」

「そうだよ！それに、そのグラードンって奴も相当強そうだし……」

「そんなに強いのか！？そのグラードンって奴！」

「なんなら、お前、地底まで行って、見てこいよ!」

「ええ〜!?!やだよ!俺は!」

「地底はマグマで溢れてる、そんなとこいったら、燃えちまうよ!」

「みんな!静かにしろ!」

ダーテングがみんなを静かにさせる

「たしかに、あそこは危険だ」

「だれでもいけるようなところではない」

「そこでだ、今回、この沢山の救助隊の中から、強い救助隊を選び

」

「特別な救助チームを編成しようと思う!」

「誰かおらぬか!あの地底に挑む勇者は!?!」

「ねえ、レン、どうする?」

「お前ら、やめときな」

ハスブレロが止める

「え?どうしてよ?」

「お前達もかなり強くなった・・・だが、お前等よりももっと強い奴は山ほどいる」

「だれかいないか!？」

「ワシが行こう」

一匹のカメックスが名乗り出る

「おおー!!」

「あのカメックスだー!!」

「あの、チームハイドロズの暴れん坊 カメックスか!？」

「噂では、グラードンとやらは地面タイプらしいな」

「この水タイプのワシのハイドロポンプでグラードンなんて、イチコロだぜ」

「アタシもいくわよん!」

次は一匹のオクタンが名乗り出た

「チームカラミツキのオクタンか!」

「しつこい攻撃が売り物で足を絡ませて、石頭で敵を打ち据える」

「持久戦になったらたらたらんだろうな・・・」

「アタシ、強いポケモンを見るとからみつきたるなるのヨ」

「俺を忘れてもっちゃあ、困るぜ」

ゴローニヤが名乗り出る

「チームゴロゴロの中でもっとも凶悪なゴローニヤだ!」

「体は岩石のように堅く大きな爆発だろうとダメージを受けられない
しい……」

「グランドンが地底で目覚めたのなら丁度いい……」

「俺のいわおとしてそのまま地底で眠ってもらっぜ」

「おお!カメックス!オクタン!ゴローニヤ!」

「あなた達であれば、申し分ない……」

「彼ら3匹で地底に向かってもらおう!」

「俺たちの代表だ!頑張ってくれ!」

「行くぞ!」

「頑張ってくれよー!」

「フーディン達を助けてくれよー!」

カメックスを先頭に3人は地底に向かって歩いていった

「な、かなり強そうな奴らだろ？」

「ここはあいつ等に任せておけよ」

「そう・・・ね、しかたないわねレン」

「私たちも行きたかったけど、どうせ足手まといになっちゃうし・・・」

「地底の事は、カメックス達に任せて、私達は、いつもどおり、救助活動をがんばりましょ！」

第30話 フーディンは(後書き)

はい第30話 完です

次回もゆつくりして行ってね！

第31話 誇り（前書き）

はい、遅くなりました
すみません

それでは、どうぞ！

レンのお仕置きがあるとおもったの？

第31話 誇り

第31話 誇り

カメックス達がグラードンのいる地底へと向かって、数日が過ぎた

「ん・・・ふあ〜」

「朝かあ〜」

サツサツサツ・・・

そついいながら、家から出る

「おっはよおー！レン」

「おはようございませす〜レンさん」

「おはよう・・・」

「朝なのにテンション高いなあ・・・フシギダネは・・・」

「え〜そうかな？」

「そうですねよ、たしかにテンション高いですし」

ゴゴゴゴ・・・

3人で話していると地震が起きた

「あわわわ!!」

「じ、地震か!?!」

「ゴゴゴゴ」

しばらくして、地震が止んだ

「収まった・・・みたいだな」

「はぁ・・・いつになったら止むんでしょうね・・・」

「カメックス達がグラードンを鎮めに行ってるから、もうすぐ収ま
ると思うよ」

広場の方から、ざわめき声が聞こえた

「ん?」

「どうかしたの?」

「いや、広場の方がなんか騒がしいんだが・・・」

「え?・・・ほんとだ・・・」

「どうかしたんでしょうか?」

「行ってみよう」

「はい」

タツタツタツ・・・

広場の方に向かった

ポケモン広場

広場にはたくさんの方のポケモン達が集まっていた

「また、なんでこんなに・・・」

「あ！ハスブレロ！」

「ねえ、どうかしたの？みんなでこんなに集まって・・・」

「フ、フシギダネ・・・そ、それがさ・・・」

「・・・と、とりあえず、奥に行ってみな・・・」

ハスブレロの言う通りに、人混みをくぐって、広場の中心にたどり着く

そこには

「あ！カ、カメックス！？」

ボロボロになったカメックス達がいる

「ど、どうしたの！？こんなにボロボロになって!？」

「ダーテング！なにがあつたんだ！？」

「・・・地底の・・・ダンジョンでやられたんだ・・・」

『え！？』

「くっ・・・あそこは半端じゃねえ・・・」

「グ、グラードンにあつことすら出来ませんでしたわ・・・」

「もう、あんなところに行きたくななかねえ・・・」

「・・・どうやら、地底のダンジョンは我々の想像を遙かに越えてるらしい・・・」

「ケケケケツ！」

「ここのつざい声は・・・」

「バカな奴らだ、はじめっからダメなのに無茶なんかするからこつなるんだよ！」

「ゲンガー・・・！」

「なに言ってるのよ！フリーディンを助けるためよ！無茶するのは当たり前じゃない！」

「ケケツ！ホント、頭が回らない奴だあ・・・」

「おまえ達なんかよりも、あいつ等の方がまだ賢そうだな」

「やべえよ・・・あのカメックスでさえやられちまうなんて・・・」

「相当、キツイぜ・・・ありゃあ・・・」

「あのダンジョンに行きたい奴なんて誰かいるの？」

「俺、絶対無理、燃えやすいし・・・」

「ボク、地震が嫌い」

「わざわざ、やられに行くようなもんだからなあ・・・」

「みんな・・・」

「ほれみな！あいつ等も自分達の立場つてもんがやっとなんかわかったみたいだな！ケケツ！」

「すまん・・・俺も・・・このぱっぱのうちわが燃えちまうから・・・」

「ダ、ダーテング・・・」

「ケケツ！がんばったからと言って、必ずそれがいいとはかぎらないのさ！」

「時にはあきらめるのも肝心なのさ」

「ん？我ながら、いいこと言ったかな？ケケケケケツ！！」

「このやろっ・・・」

「うう・・・」

「レン・・・私、分からなくなつて来ちゃった・・・」

「私たち・・・どうしたら・・・いいのかな？」

「たとえ・・・ムチャであつても・・・」

「フリーディンを助けるべきなのかな・・・？」

「決まつてるだろ・・・行くに決まつてるだろ！」

「そう・・・だよ、やっぱりそうだよ・・・」

「みんな！聞いて！」

「私達は行くわ！フリーディンを助けに！」

「ええ～～！？」

「なんだつて～～！？」

「おい、あいつら誰だ？」

「知らないなあ・・・」

「スターズの奴らだよ、こころじゃ、有名だよ」

「スターズって？あのキュウコン伝説の疑いがかけられた？」

「それ知ってる！最近それで逃げ回ってきたんだって！」

「大丈夫なのか？見た感じ弱そうだぜ？」

「たしかに……たしかに私達じゃダメかもしれない……」

「でも……それでも、私達は救助隊……」

「私は、災害に苦しんでるポケモンを助きたい……」

「だから私は救助隊になった！」

「だから私は絶対にフリーデンを助けるまで、諦めない！」

「それが……それが私達、スターズの誇りだから！」

「……ケツ、ケケケケツ！お前ら、本当に賢くないなあ」

「いい加減、みんなを見習ったら」

「いや、フシギダネの言う通りだ……」

「ウゲツ？」

「そうだな……怖がりすぎで、どうかしてたぜ……」

「ウゲゲゲゲツ？」

「俺達、肝心な事をわすれてたな・・・俺達、救助隊じゃないか！」

「誇り・・・か」

「俺たちだって持つてるさ！救助隊のプライドをな！」

「ウゲゲゲゲッ！アホか！？おまえ達は！？」

「なんでこんな奴の言うことなんか納得するんだ！？」

「行っても、返り討ちにあっただけだぞ！？」

「そうかな・・・」

「まだ一回失敗しただけじゃないか・・・」

「カ、カメックス！」

「こんな所で寝てる場合なんかじゃない！」

「ウゲゲゲ！」

「アタシもいじけているタイムはおわりよん！」

「諦めたら、そこで救助終了だしな・・・」

「オクタン！ゴローニヤも！！」

「ウゲゲゲ！おまえ等、さっきと言ってる事が全然ちが「そうだ！
そうだ！」」

「絶対にどこかに突破口があるはずだ！」

「みんなで協力しあえば、絶対なんとかなるよ！」

「救助隊同士、みんなで助け合って、ダンジョンを攻略してやろう！」

「おおー！ー！！！」

「ウゲゲゲゲゲゲ！おまえ等正気か！？」

「ひどい目に会っても知らないからな！？」

ゲンガーはどこかへ逃げていった

「ありがとう、フシギダネ、お主のおかげで大切な物を無くさずすんだ」

「礼を言う」

「みんな！ワシ達、救助隊の底力、いまこそ見せてようではないか！」

「おおー！ー！！！」

救助基地 前

「ゲンガーがでてきて、すったもんだしたけど・・・」

「いよいよ地底のダンジョンに挑むんだよね」

「ああ……」

「ほんと、ドキドキですよ……」

「出発は明日だな」

「なんかワクワクしてきちゃった」

「とりあえず、明日に備えて、ダンジョンに行く用意をしよう！」

「だな」

「ですね！」

第31話 誇り（後書き）

はい第32話 完 です

それでは次回、ゆっくりして行ってね！

ほんとにないよ？

第32話 地底のダンジョンへ(前書き)

はい 第32話完成です
それではどつぞ！

第32話 地底のダンジョンへ

第32話 地底のダンジョンへ

「・・・夢・・・か」

すぐ隣にサーナイトが現れる

「サーナイト・・・」

『明日ですね・・・地底のダンジョンに挑むのは・・・』

「ああ・・・なんか凄そうな所だけど・・・大丈夫だろうか・・・」

『大丈夫です、レンさんならきつと大丈夫ですよ』

『私も応援してます、頑張ってください』

「・・・ありがとな、ちょっと勇気出てきた」

・・・そうだ

「なあ、サーナイト・・・」

「地底って・・・どんな所だ？それにグライドンって・・・どんなポケモンなんだ・・・？」

『・・・いえ、残念ながら、私にはわかりません・・・』

「そうか・・・」

「サーナイトなら何か知ってるかと思ったんだけど・・・」

『いえ、私はただ励ましたくて・・・』

『すみません・・・』

「いやいや、だったらいいんだ」

「励ましてくれただけうれしよ、ありがとな」

『ただひとつ・・・分かることがあります・・・』

「・・・え？」

『貴方の役目が少しずつ終わりに近づいています・・・』

「俺の役目が・・・終わりに？」

『貴方はある役割を持ってポケモンとなり、この世界へとやってきました』

『その役割が、とうとう・・・終わりに近づいているのです・・・』

「お、教えてくれよ！サーナイト！」

「俺の役割ってなんなんだよ？」

『それは・・・時が来れば・・・今度の冒険が終われば、お話でき

ると思います』

『では・・・また』

そう言うとサーナイトは消えた

朝

「ふあゝ・・・」

「朝か・・・」

サーナイトは確か、今度の冒険が終わった時、教えるって言った・
・
今度の冒険・・・って、地底のダンジョンへ行くことなんだろうか・
・
俺がフーディンを助ければ、わかるのだろうか・・・

「おい！レーン！」

「レンさん！」

フシギダネとミナの声が聞こえてくる

それ以外にもざわつく声が聞こえてくる

「速くー！」

「・・・わかったよ」

そう言い返して、外に出ていく

「って、なんでここに集まってんだ!？」

外にでるとたくさんの救助隊達が集まっていた

「ここから地底のダンジョンに行くって昨日、みんなの話し合ったんだ」

「なにせ、お前等が一番の頼みでもあるんだからな！」

「だ、そうよ」

「そうなんか・・・」

「さあ、行くつぜー！グラードンのいる地底へな！」

「さあ、今度こそ最後まで行ってやるつじゃないか！」

「今度こそ、リザードンをコテンパンにしてやるわよん！」

「行くぞ、みんな！」

『おお～～～!!～!!』

ダッダッダッ・・・

「・・・ケツ、どうなってもしらないぜ」

マグマの地底 前

「ここか・・・マグマの地底」

「あちい・・・何だよここ、マグマが所々溢れてるぞ・・・」

「この様子じゃ、中も相当暑いな・・・」

「うう・・・私暑い所嫌いなのに・・・」

「そんな事言ってる場合か！さあ、行くぞ！」

フシギダネの手を引つ張る

「わっ！？ちょ引つ張らないでよ！」

「あ！レンさん！」

ザザザ・・・

「あ！待ってくれよ！」

他の救助隊もダンジョンに入っていく

第32話 地底のダンジョンへ(後書き)

はい32話 完 です

次回もゆっくりしてね！

第3話 マグマの地底の戦い 前編（前書き）

はい、今回は3部構成です！
ゆっくりしていいってね！

第33話 マグマの地底の戦い 前編

第33話 マグマの地底の戦い 前編

「もう、痛いじゃない!」

「別にいいだろ」

「全く・・・あれ?誰もきてないよ・・・?」

「え・・・?あ!ミナも来てないぞ!」

「嘘っ!?!」

「どこいったかったのかな・・・」

「入り口が変わったのか?」

「え?」

「ほら、入るたびに地形が変わるって言ってただろ?だから・・・」

「じゃあ、その内ミナや他の救助隊にも会えるって事ね」

「まだ確証はないけど、多分な」

ザッザッザッ・・・

少し進むとポケモン達が集まってくる

「こんな暑い中、ご苦労なこつた」

「あんま戦いたくなんだけどなあ・・・」

ポケモンは・・・サンドとニドキングか・・・余裕だな

「フシギダネ、お前は、ニドキングを頼む」

「おっけー！」

ザッ・・・

タツタツタツ！

サンドがこつちに走ってくる

俺は身構えた

タン！

サンドが地面を蹴り、真上に飛ぶ

何するつもりだ・・・！

サンドが爪を振り下ろす

それ横へと避ける

地面に着地するところらを向き、さらに爪で俺を切りかかろうとする

タン！

俺は真上へと避ける

今が攻撃チャンス！

尻尾に力を込める

「たたきつける！」

尻尾を振り下ろす

サンドはすぐにこちらを向き、爪に力を込める

「させるか！」

体全体に力を入れ、下ろすスピードを早める

バシン！

サンドの頭に尻尾が当たる

「があっ！」

それと同時に尻尾に痛みが走る

すぐさまサンドから距離を取った

サンドは、やはり体全体に力を分散させたせいか、倒れる様子はない
尻尾を見る

サンドの頭に当たった部分、そこから少し離れてる所に突き刺したよ
うな後がある

「爪か・・・っ！」

尻尾からさらに体全体へと痛みが走る

この痛みは・・・毒！？

まさか、毒針だったのか！？

クソッ・・・もう一筋縄ではいかないか・・・

毒で徐々に体力を削られたら厄介だ

早めに倒して、回復しなくては・・・

「キヤア！」

フシギダネの悲鳴が聞こえてきた！
フシギダネの方を向くと

フシギダネが倒れていた

「なっ・・・まさか・・・！？」

フシギダネのすぐ横にいたニドキングがこちらを向き、向かってくる
まずい、今来られたら確実にバッドエンド！

フシギダネも倒れてる
じゃあ、どうすれば・・・
・・・あ！

あつた、この状況を一気に変えられる方法！

道具だ！

すぐさまバッグからある物をだす

それをニドキングの口に向かってぶん投げる

わざわざ、口を開けて食ってくれた・・・

すると、ニドキングはその場から一步も動かなくなった

さっきに投げたのはしぼられの種

相手を硬直状態にする種だ

これで、攻撃を受けない限り、動きはしない

さらにバッグを漁る

俺はバッグから取り出した道具を口含み、サンドに突撃する

サンドはそれに対して、爪で攻撃しようとしてくる

今だ！

口から種を飛ばす

たとえるのなら、スイカの種を飛ばす

それと同じように種を飛ばした

すると、種はサンドの体に触れる直前で爆発した

さっきの道具はばくれつの種

投げて使う事もできるが、口の中で殻を割り吹き出して、空気に3

秒間触れば種の中に入ってる爆弾の元が爆発し、相手にさらなる

ダメージを与える

「これでどうだ・・・！」

サンドは・・・倒れていた

なんとかなつたか・・・

さて、あとはニドキングだが・・・

なんか動けない奴に攻撃するとすごい罪悪感が来るから、かといっ

てこのまま放置も・・・

・・・あ、そういえば、遠距離の道具があつたな

とりあえず後だ！

「フシギダネ！」

急いでフシギダネの元に向かう

「大丈夫か！？しっかりしろ！」

「う・・・ご・ん、あいつ、た・せなかつた・・・」

声が所々聞き取れなかったが、何を言ってるのかちゃんと理解できた

「大丈夫だ！俺が倒したから！」

「え、えつと・・・！」

バッグを慌てて探る

「あ、あった！」

ある種を取り出す

「ほら！これを・・・」

その種をフシギダネの口に入れる

「む・・・んつぐ・・・」

種を飲み込んでくれた

「うう・・・レン、ありがとう・・・」

「はぁ・・・よかった・・・」

さっきフシギダネの食べさせたのは復活の種

これは、力尽きたポケモンを復活させる、いわば元気のかけらと同じ物である

ほんとは、口の中で割って、相手の口に入れた方がいいが・・・

・
とりあえず、俺にそんな事はできん！

「フシギダネ、立てるか？」

「うん、大分直ってきた」

フシギダネがゆっくりと体を起こす

「急ごう、ほかの奴らが集まってくる」

「わかってる」

タッタッタツ・・・

「おっと・・・そうだ、あれ忘れてた」

「あれ？」

バッグから、ゴローンの石を出す

それをさっきのニドキングに向かって、投げる

ブン！

コッソ

ニドキングの頭に見事あたる

「おっっ！」

「な、ナイスショット・・・」

正直、この距離から当たるなんて思いもしなかった

「急いじつ、じつちに気がつくまえに」

「う、うん」

タッタッタツ・・・

第33話 マグマの地底の戦い 前編（後書き）

next story:

第34話 マグマの地底の戦い 中編

第34話 マグマの地底の戦い 中編

s i t e n 三ナ

「あ、あれれ・・・レンさん達は何処・・・」

あたりの見回す

「はぐれちゃったんでしょうか・・・」

「困りましたねえ・・・一人やられるでしょうし・・・」

ザッ・・・

前にゴローンが立ちはだかる

「わわっ！と、とりあえず、逃げましょう！」

ザッザッ・・・

逃げようとした後ろからもニドクインが迫ってきた

「え・・・ええ！？」

完全に囲まれちゃったよ・・・

ここ、通路だし、横道もなし・・・どうすれば・・・

ああ、どうしよう、どうしよう！

そう考えてる間にもどんどんこっちに・・・
もうダメかも・・・いや、諦めちゃだめだ！
相手は両サイドから来てる、片方をたおせば、なんとか逃げる事が
できる・・・

よし・・・！

ニドキングに向かって走り出す

タン！

地面を蹴り、ニドキングの真上へと飛ぶ

一撃で終わって・・・！

「かえんぐるま！」

空中で、宙返りをしながら炎を吐く
そして、ニドキングまで、突進する

回転して、ニドキングの様子までは分からないが、手で止めようと
していた

ドン！

ニドキングの腹に当たる

ニドキングは・・・

倒れていた

「やった！今のうちに早くにげなきゃ・・・」

後ろを振り返る

もう目の前までに、ゴローンが来ていた

「あ……」

やられる……！

「伏せる！」

突然、怒鳴るような声が響く

その声を意味を理解して、すぐさま伏せた

「ハイドロポンプ！」

ゴオオオオ！

唸るような音が真上を通過していく

背中に冷たい物が当たる

これは……水？

やがて、唸るような音は消えた

ゆっくりと顔を上げる

ゴローンは、7メートル先の壁で倒れていた

あの巨体を吹き飛ばすなんて……

「危ない所だったな」

声の主のいる正面を向く

そこにいたのはカメックスだった

「えっ、あつ、ありがとうございます……」

うわぁ……迫力ある……

「いって事よ、同じ救助隊なんだから」

「・・・そういえば、お主の仲間が見当たらんが・・・一人か？」

「は、はい、ダンジョンに入ったら、いつの間にかいなくて・・・」

「ならワシも同じじゃ！ちょっと目を離した隙に、先に行かれててのう」

「は、はあ・・・」

「しかし、一人で行くのも危険じゃな」

「よし、ここは、ワシとお主で、チームを組むとしよう!」

「ええ!？」

「ん？何か不満か？」

「い、いや、そんなことないですけど・・・私だと足手まといにならないですか・・・？」

「ガハハハ！そう心配しなくてもよい、ただ後ろを警戒してくれればいいのじゃからな!」

「わ、わかりました・・・」

わあ、後ろ任せられちゃったよあ・・・どうしよう・・・!
い、いや、いつも通りに警戒してれば・・・

ああ・・・やっぱり凄い人の側にいると凄い緊張する〜!

第34話 マグマの地底の戦い 中編（後書き）

next story:

第35話 マグマの地底の戦い 後編

第35話 マグマの地底の戦い 後編

S i t e n レン

マグマの地底 最下層

「はぁ・・・はぁ・・・」

「暑いし、辛いし・・・なんなのよ、ここ・・・」

「やばい・・・バッグの道具、だいぶ消費したぞ・・・」

技のPPも少ない

ガリガリ・・・

岩と岩が擦れるような音が聞こえてくる

「え・・・なんの音？」

「おいおい、ここでもでてく・・・」

そいつを見たとき、爆発でも起きたような衝撃に襲われた

「あ・・・あ・・・」

「嘘だろ・・・？」

イワークだ
しかも2体

「な、なんで……こんなのが……」

ガリガリ……

こっちに向かってきた!

「に、逃げるぞ!」

「うん!」

タッタッタツ……

通路に逃げ込む

「よし、このままあいつの前から消えれば……」

ガリガリ……

前からも聞こえてくるいやな音

「え……嘘……まさか!??」

目の前にハガネールがいた

「い……い……い……」

「いやああああ!」

「うわああああ!」

もう、絶望としかない

この圧倒的な威圧感と力の差

もう頭の中は「やられる」しかない

え？やられるの？ここで？救助失敗？生きて帰れるの？死ぬの？ここで？こんな所で？いままでがんばってきたのに？

「ハイドロポンプ！」

ゴオオオ！！

洪水のような水の音が聞こえてくる

そのすぐ後、イワークがすぐ横を通り抜けていった
ドゴン！

「よっし！」

「ちょ、カメックスさん、当たったらどうするんですか！？」

「その時はその時だ！ガハハハ！」

「そんな無責任な・・・」

「ほれ、お主は仲間の所に行つてやれ」

「あ、は、はい！」

サツサツサツ・・・

「レンさん！フシギダネさん！大丈夫ですか！？しっかりしてください」

「さい！」

すぐ近くにヒノアラシが寄ってくる

「あ……あ……？」

「ああ！しっかりしてくだ、さい！」

バシン！

「ぎゃー！」

「ぐあっ！」

ほっぺを叩かれる

「ん……あ、あれ？私たちどうしたんだっけ……」

「はあ……よかったあ……」

「！ミナ！無事だったの！」

「それはこっちのセリフです！」

「レンさん達、半分発狂してたんですから……」

「は、発狂してたの……？」

「はい、そりゃもう、あり得ないぐらいに叫んでましたし……」

「救助隊なんですから、もっとしっかりしてくださいよ！」

「あ、ああ、すまなかつた」

「さて、感動の再会してる所悪いのだが、そろそろ急いだ方がいい」

「え？」

後ろに振り向く

そこにはカメックスがいた

「カメックス！」

「ミナと一緒にだったの!？」

「いや、見つけたただけだ」

「さあ、グズグズはしてはおれん!早くここを抜けるぞ!」

「あ、ああ!」

急いで立ち上がり、カメックスの後を付いていった

タッタッタツ・・・

「ここは・・・?」

「どつちら、広いだけで何もいないよつだな」

「あー!あそこ!」

ミナが目の前を指さす
その先には

フリーデイン達がいた

「フリーデイン！」

急いでフリーデイン達に近寄る

「大丈夫か！？」

「あ、ああ……なんとか……」

「く、くそつ、なんて奴だ……俺たちでさえ歯が立たなかった……」

グラードンが手を握りながら、悔しそうに言う

「あいつは半端じゃねえ……お前らの勝てるような相手じゃねえぞ！」

「……一つだけ忠告しておく、奴は相当強い……気を引き締めてかかれ……」

「……わかった」

「はあ……はあ……」

「やっとたどり着いたわねえ……」

オクタンとゴローニヤが俺たちの入ってきた所にいた

「おっ！カメックス！無事だったのか！」

「ああ、なんとかな」

「今、残ってるのは俺たちだけだと思っ」

「他の奴らはここに来る前にやられたな・・・」

「この先にグードンがいるはずだ・・・」

「みんな、準備はいいか！？」

「勿論！」

「勿論です！」

「ああ、勿論さ！」

「勿論よーん！」

「勿論だぜ！」

「よし、行くぞー！！」

『おー！！』

タッタッタッタ・・・

「・・・大丈夫なのか・・・？」

「やられちまうんじゃない・・・」

「彼らは最後の砦・・・大丈夫、ここまでたどり着いた」

「きつと・・・グラードンを鎮めてくれるだろう・・・」

「ワシらはただそれを祈るのみだ・・・」

「・・・」

第35話 マグマの地底の戦い 後編（後書き）

はい、3部構成ストーリー 完 です

次回 決戦のバトルフィールドへ！

第36話 グラードンとの戦い！（前書き）

文字数が5000行ったあ！！

長いぞお！

それではどござ〜

第36話 グラードンとの戦い！

第36話 グラードンとの戦い！

タッタッタツ・・・

「・・・ここは？」

何も無い、ただ広いだけの場所だった

「グラードンは？」

「・・・居ない・・・ようだが？」

「じゃあ、どこにいるんだよ・・・」

グオオオオオオ！

雄叫び声が聞こえてきた

「な、なに！？」

突然、周りが暗くなった！

「な、なんですか！？」

パッ

周りが明るくなった

「え……?」

「なんじゃ……こりゃあ!」

俺たちの目の前、そこにまるでそそり立つ壁のように大きな巨体が
現れた

灰色の腹と赤い足を持つ……

「ねえ! レン! まさかこいつが……!」

「ああ……こいつが……グラードンだ……」

「おい、おい……嘘だろ!? こんな奴、相手に出来る訳……」

「でも、倒さなきゃいけないんだよ!」

「フリーデインだって、俺たちを頼りにしてんだよ!」

「そうだ……今、みんなが頼りにしてるのは、グラードンの前に
いる、ワシ達だけなんだ!」

「こんな奴と戦うなんて……でも……でも私たちが、私たちが
こいつを倒さなきゃいけないんだ!」

「そうです! それに、私たちの力をあわせれば、きっと倒せます!」

「そ、そうよーん! 私たちだったらできるわよーん!」

「みんな、覚悟決めろよ!」

『おう！』
『うん！』

グオオオオオ！！

「援護は任せろ！」

「よし・・・行くぞ！」

「でんこうせつか！」

走って、グラードンの後ろに回り込む

流石にあんな巨体じゃそう早く反応出来ないだろう・・・

タッ！

地面を蹴り、グラードンの背中を走る

グラードンの頭を越え、グラードンの頭上に来た

「たたきつける！」

尻尾に力を込め、グラードンの頭にぶつける

バシン！

グラードンは痛がるどころか、反応すらしない

「なっ！？」

グラードンがこっちを向いた！
手を俺に向かって、振ろうとする！

「危ない！ハンドロポンプ！」

ドゴオ！

カメックスの放った水が、グラードンの背中へと当たる
が、グラードンは怯んだ程度だった

「嘘！？」

「馬鹿な！？相性は良いはずだぞ！？」

このままじゃ確実に・・・死ぬ！

「レンさん！危ない！」

突然、つるが俺の体を掴み、引つ張る

「うおっ！」

フシギダネのつるのムチだった！

「はぁ・・・はぁ・・・ギリギリセーフ！」

「た、助かった！」

「ふう・・・よかった・・・」

「まだ安心はしてもらえないぞ！」

「俺に任せな！」

ゴローニヤはグラードンに向かって走っていく！

「くらいなあ！ころがる！」

ゴローニヤが丸くなり、まるで山から落ちてくる岩のようにグラードンの足に転がっていった！

ドゴンー！

グラードンの足にぶつかった！

グラードンが少しぐらついた

「す、すごい！あの巨体を揺らすなんて・・・！」

「やるじゃねえか！」

「へへっ！この俺にかかれば、これからチヨロいもんよ！」

「この調子でどんどん攻めていくぞ！」

「うらあ！もういっちょ転がる！」

ゴローニヤが丸くなり、グラードンに向かって、転がる！

グラードンが地面に向かって爪を立てた

「なにする気だ?」

そのまま爪を引き上げた

「な、化け物かよ!？」

爪に地面の塊が突き刺さったまま、ゴローニヤに向かって殴りつける

ドゴオ!

ゴローニヤに当たった

「ゴローニヤ!」

「ゴローニヤさん!」

「ぐ……があ!」

「やめなさい!」

オクタンがグラードンに向かって、丸いボールを吐き出す

ボールは、グラードンの頭に当たり、水となって、散った
グラードンはびくともしない

「こ、このままじゃ……!」

フシギダネがグラードンに向かって走っていく!

「フシギダネ！」

俺も後に続いて走っていく

「レ、レンさん！」

ミナも着いてきた

タッタッタツ・・・

「はっぱカッター！」

フシギダネははっぱカッターを繰り出す

グラードンはびくともしない

「このっ！つるのムチ！」

バシン！

フシギダネがグラードンに向かって、思いっきり叩きつけた

タツ！

俺は地面を蹴り、グラードンの腰まで飛ぶ

「たたきつける！」

グラードンに尻尾を叩きつける

タッ！

ミナが地面を蹴り、空中で回転する
ミナの体が炎を纏った

「かえんぐるま！」

炎を纏った体で、グラードンにぶつかる

「はっぱカッター！」

「たたきつける！」

「かえんぐるま！」

俺たちは攻撃を繰り返した
ゴローニヤを助けるために・・・！

でも、グラードンは岩を動かさない
ゴローニヤにぶつけたまま

「このっ！動きなさいよ！」

「ハイドロポンプ！」

「バブル光線！」

「ストーンエッジ！」

みんなでグラードンを攻撃する・・・
でも、グラードンは動かなかった

「みんな！あきらめるな！絶対にダメージは入っているはずだ！」

「そんなのわかってるわよ！」

一心不乱に攻撃する

「みんな・・・な、やめる・・・！」

「何いってんだよ！」

「絶対に助けるんだからな！」

「くそっ・・・離れろ・・・！」

「ぶざけんな！なんで離れなきゃいけないんだよ！」

「・・・許してくれよ！」

キイイイ！

ゴローニヤが光りだした

「まさかっ！」

「フシギダネ、ミナ！離れるぞ！」

「う、うん！」

「は、はい！」

タッタッタツ……

ドゴオオオン！！

巨大な爆発が起こる

グラードンが爆発で後ろへと倒れる

「ゴローニヤ！！！！！」

「ゴローニヤさーん！！！」

「あのバカ……！！！」

ゴローニヤの元へ向かおうとする

「待て！行くなならグラードンを倒してからにしろ！！！」

「で、でも！！！」

「だめだ！」

「……くそつ……！！！」

「みんな！全力でグラードンを倒すぞ！」

「元よりそのつもりだ！」

グラードンが立ち上がる

『うおおおおお！！』

「ハイドロポンプ！」

「バブル光線！」

「レン！私たちはどうするの！？」

「俺に考えがある！」

バッグの中を漁る

「こ、これって・・・！」

「もしかして、これで・・・」

「くそっ！いいかげん倒れろ！」

「フシギダネ！ミナ！準備出来たか！」

「うん！」

「はい！」

拳に力を込める

「はぁぁぁぁぁー!!」

「このぉおおおー!!」

フシギダネもそれに合わせ、背中に光の粒子を貯めていく

「行きますよおおおー!!」

ミナが体に力を込めていく

「よしっ……!!」

「グラードン!こっちを向け!」

「!?!何をするつもりだあいつら!」

ゆっくりとグラードンがこっちを向く

タッ!

壁に向かって走り、壁を蹴って、グラードンの胸あたりまで飛ぶ

「うおおおおお!気合いパンチ!」

拳に込めたすべての力をグラードンに向かってぶつける!

「ソーラービーム!!」

フシギダネの背中の中種から、光の柱が発射される!

「だいもんじ!」

ミナの口から巨大な炎の塊が吐き出され、途中でそれは大の字になる

三人同時に攻撃を仕掛けた！

グラードンに攻撃が当たった

グラードンが後ろに倒れていく

グオオオオオ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・さすがにもう倒せただろう・・・」

「それって、技マシンじゃない！」

「どこで見つけたのよ!？」

「ダーテング達がくれたんだ、昨日お前達と別れた時にな」

「これでグラードンを倒す」

「そして、こいつも付けるんだ」

「パワーバンダナですか？」

「ああ、そうだ」

「それで、この技マシンの中身は？」

「気合いパンチとソーラービーム、大文字だ」

「負担の大きい技ばかり・・・」

「ああ、だが、これぐらいじゃないとグラードンは倒せそうにない．．．」

「．．．たしかに．．．」

「二人共、覚悟はいいか？」

「．．．うん」

「はい」

パワーバンダナと威力の高い攻撃を食らわしてやったし．．．

「もう．．．倒れました．．．よね？」

「ああ．．．そのはず．．．ッ！」

グラードンが立ち上がった！

「なっ！バカな！あれほど強力な技を使って、まだ倒せないだと？」

グオオオオオ！！

グラードンのほうこうがこだます！
それと同時に地面が揺れ出す

「な、なに！？」

「地震!?!」

ゴゴゴゴ!

次々に、地面が割れていく!

「技だと!?!」

「グアツ!」

カメックスが吹き飛ばされる!

「カメックス!」

「キヤア!」

「わあっ!」

「フシギダネ!ミナ!」

「があ!」

体が宙に浮き、地面に叩きつけられる

「う・・・くっ」

あたりを見回す

地面は盛り上がり、瓦礫の山のようなだった
その中、グライドンがぼつんと立っていた

「大丈夫か・・・?」

返事が返ってこない

「まさか・・・やられた・・・？」

「くそっ、ここまで来て・・・ここまで来てっ！」

「こうなったら・・・」

最後の最後の力を振り絞る

「うおおおおー!!」

拳に力を込めていく
今残ってる力を全て

タッ

「気合い・・・パンチ!!」

グラードンを殴る

グラードンが前のめりに倒れていく

タッ

地面に着地する

「意識が・・・」

意識がだんだんと遠のいていく
最後に見えたのが、グラードンが倒れた所だ

・・・

あれ・・・？

俺は・・・いつたい・・・

周りが騒がしい

まるで祭りみたいな・・・

祭り・・・？

ゆっくりと目を開けてみる

空が見える

茶色い天井ではない

青と白が混ざった空

じゃあ、今俺は外にいんのか・・・？

「ぐ・・・うう・・・」

「あっ！レン！」

最初に聞こえてきたのはフシギダネの声だ

フシギダネが顔をのぞきこんでくる

「フシギダネ・・・？」

「大丈夫？どこか痛む所はある？」

「大丈夫だけど・・・フシギダネ、お前は大丈夫か？」

「うん、どうやら、オクタンが助けてくれたみたい」

「オクタンが？」

「そうよーん！」

オクタンが会話に参加してくる

「グラードンが地震を起こしたとき、私は地面に張り付いてたおかげで助かったのよ」

「あ！そうだ！グラードンは！？それにゴローニヤはどうしたんだ！？」

「大丈夫よ、グラードンはあるたの最後のー撃で倒れたし、ゴローニヤは、大怪我したけど、無事よ」

「そうか・・・はあ・・・」

「実質、レンがグラードンを鎮めてくれたのよ」

「だから、レンはみんなの英雄って訳よ！」

「英雄・・・ねえ」

あんましっくりこないなあ・・・

「そういえば、フーディンは？」

「じじいいるぞ」

隣に座っていた

「しかし、お主達はよくやったな、グラードンを鎮めるとは・・・」

「どうやら、グラードンは眠りを妨げられたせいで我を忘れていたらしい」

「そうなんだ・・・」

「・・・」

何かが聞こえた

「おい、今なんか聞こえなかった？」

「たしかに聞こえたぞ」

「誰の声だ？」

「・・・なのかな」

「レン！この声って・・・」

「ネイティオ!?」

「ネイティオじゃと?そうか!テレパシーが呼びかけてるだ!」

「・・・ポケモン達に告ぐ!ポケモン達に告ぐ!」

「大変だ!空から星が・・・星が接近している!ものすごい大きな・

・・巨大な星だ！

「その星は真つ直ぐこちらへ向かってきている！いままでたくさんの自然災害が起き・・・世界のバランスが崩れたのもこの星が近づいてきたせいだ！

「このままだと、この星の大地に衝突し・・・大変なことになる！

「なんとか・・・なんとかしなければ・・・！

「ネイティオ、教えてくれ！」

「防ぐ方法はあるのか！？」

「・・・あるにはある」

「レックウザに頼むこと、それだけだ」

「レックウザ？なんだ、それは？」

「はるか天空に住む、伝説のポケモンだ」

「レックウザに頼み、天空から星を破壊するのだ」

「だが、レックウザは、地上から見えないほど上空に住んでいて、だれも見ることがない・・・」

「天空に行くには、どうすればいい？」

「フリーディンと私でレポートの力を増幅させ、ポケモンを天空へと飛ばすのだ！」

「しかし……そこは雲の上だ、飛ばされたポケモンがそのあとどうなってしまうか……私にもわからない……」

「それなら俺たちが行く」

「だが……いいのか？なにがあるかわからない雲の上だぞ？」

「危険は承知よ！みんなが平和に暮らしていける！それが私の願いだから……」

「レン、フシギダネ、聞こえるか？ネイティオだ」

「これから私とフリーディンでレポートの力を増幅させる方法を話し合おう」

「出発は明日、それまで体をやすめるといい」

「最後に……これは危険な冒険だ、だが……がんばってくれ、頼んだぞ」

「大丈夫だ！俺たちなら行けるぜ！」

「お前達に賭けるぜ！がんばれよ！」

「お前たちならきつとできるはずだ！、星の衝突止めてくれ！」

「がんばって、世界を救ってくれ！」

「僕、待ってます、レンさん達がきつと成功して帰ってくるって」

「大変なことになっちまったな！でも、お前らだったらなんとかしてくれる気がするぜ！がんばってくれよ！」

みんなが俺たちを応援してくれる・・・
絶対に成功させないとな！

「これからワシはネイティオの所へ行く」

「出発は明日だ、それまでに準備を済ませてくれ」

「わかった」

「レン、明日に備えて、ゆっくり休むとしましょう」

「そうだな」

「それじゃあ、また明日ね！」

「ああ！」

第36話 グラードンとの戦い！（後書き）

はい第36話 完 です

いや〜しかしこの小説ももうすぐ終わるねえ〜寂しいねえ〜でも新しい小説書けるから気が楽だあ〜！
いえ〜い！

次回もゆっくりして行ってね！

第37話 自分の役目（前書き）

はい、完成レス^^p^^
ではごじごじっ

第37話 自分の役目

第37話 自分の役目

「……」

「……ぐっ……く、苦しい……」

「夢の中……なんだよな……」

「でも……なんでこんなに……苦しいんだ……?」

まるで……首を絞められてるような……

「こんなの……初めてだ……」

その頃、現実世界では……

「どうだ?ゆめくいの味は?苦しいだろう?ケケッ!」

レンの前にゲンガーが立っていた

レンの苦しみはゲンガーが原因のようだ

「しかし……お前も昔人間だったとはな……驚いたぜ」

「まあ、どうせそんな奴、ろくでなしに決まってるだな、ケケッ!」

「お前の尻尾、掴んでやる!」

「俺のゆめくいでお前の心を見抜いてやる！ケケッ！」

フ・・・

ゲンガーの後ろが明るくなる

「むっ、なにか来る！」

「なんだ・・・あの光は？こっちにくるぞ？」

夢の中

「・・・あ、苦しく・・・なくなってきた・・・？」

フウ・・・

レンの前にサーナイトが現れる

「サーナイト・・・？」

「サーナイト・・・教えてくれるか？」

「俺が何者なのかを・・・」

「はい、時は来ました」

「あなたはなぜここに来たのか、そのすべてをお話します」

「レンさん、あなたは・・・」

「この世界を救う為にやってきたのです」

「俺が・・・ポケモンの世界を救う為にやってきた・・・？」

「はい・・・私たちは、この世界が危機にひんしている事を知り・・・」

「救世主を探し求めてきました」

「しかし・・・どこに行っても見つからず、なかば諦めかけた時・・・」

「ひとりの人間に出会いました」

「それがレンさん、あなただったのです」

「ま、待てよ！救世主なんて大げさな・・・俺には、」

「はい、はじめてお会いした時、そうおっしゃってました」

「自分はそんなに強くないと」

「でも、私たちが求めていたのは見せかけの力なんかじゃありません」

「真の勇気です」

「真の勇氣……？そんなんじゃないぞ……」

「それもお会いした時、おっしゃってました」

「ですので、あなたはその後、こい言ったのです」

「自分が救世主として、ふさわしいか見極めてほしい……と」

「そして、もしふさわしいとわかった時、はじめてこの事を教えてほしい……と」

「そして、あなたは、無心で挑むために人間の時の記憶を消し……」

「仲間と共に戦うためにみずからポケモンとなり……」

「この世界へとやってきたのです」

「俺が……そんな事を……」

「あなたの勇氣は証明されました」

「あなたは間違いなく、世界を救う役目を持っています」

「そして、その役目も……もうすぐ終わろうとしています……」

「……星の衝突を止めるのが、俺の役目……？」

「はい、そして、その役目を達成したとき……」

「あなたは人間の世界へと戻れるのです」

「そうか・・・人間に戻れる・・・のか」

「！、でもそれじゃあ・・・」

「フシギダネさんと・・・お別れする事になります」

「フシギダネと・・・別れる・・・」

「フシギダネさんはレンさんを慕っています」

「ですので、レンさんがいなくなれば・・・」

「かなしがるでしょう・・・」

「でも、こればかりは仕方ありません」

「出会いがあるから、別れもあるのです・・・」

「私にも、かけがえのない友達がいました・・・でも、どこかへ行ってしまいました」

「いなくなるのは寂しいです・・・」

「・・・でも、またいつかまた会える・・・私はそう信じてるんです」

・・・！

「……！今は！？」

「……誰でしょう？誰かが夢の中を覗いてたようです」

「でも、大丈夫、もうどこかへ行きました」

「……夢の中に悲しい気持ちだけが残っています……」

「なきながら走っていったみたいです……」

「もうすぐ朝みたいです、それでは……」

そう言つとサーナイトは消えてしまった

第37話 自分の役目（後書き）

はい第37 完 です
次回もゆっくりしていいってね？

第38話 天空の塔へ(前書き)

はい、第38話完成です
では、どうぞ！

第38話 天空の塔へ

第38話 天空の塔へ

朝・・・

「く・・・」

手を真上でクロスさせて体を伸ばす

「・・・フシギダネも来てるだろうし・・・」

サツサツサツ・・・

「レン、おはよう・・・」

「レンさん、おはようございます」

「ああ、おはよう・・・」

「さてと・・・私たちこれから天空の塔に行くために精霊の丘に行くんだよね」

「ああ・・・」

「話はほかの皆さんから聞きました」

「あ、ミナ、そういえば、お前昨日どこ行ってたんだ？」

「いやぁ・・・私、お祭りとかそつ言つゝの好きじゃないんで、先に帰ってました・・・」

苦笑いしながら言つ

ダダダダダ・・・

広場の方からポケモン達がやってくる

「あ、みんな！」

「レン！フシギダネ！ミナ！」

「がんばれよ！絶対に世界を救つてくれ！」

ハスブレロや

「ワレワレモ、オウエンシテイルゾ、ガンバレ！」

コイルや

「がんばれよ、俺たちはお前に賭けてるんだからさ」

リザードン

「自信を持ってよ！お前達なら行けるからさ！」

バンギラス

「天空じゃ、何があるか分からないから、気をつけるよ！」

カメックス

「レンさんとフシギダネさんなら、きっと大丈夫です！」

キヤタピー

「いよいよじゃのお・・・厳しい旅になるじゃろつが、がんばるんじゃぞ」

ナマズン達が駆けつけてくれた

「みんな・・・うん！私たち、絶対に世界を救ってみせるよ！」

「レン！ミナ！行きましょ！」

「ああ！」

「はい！」

タッタッタツ・・・

精霊の丘 頂上

「フーデイン〜！」

「おお、着たか！」

「ようやく来たようだな」

「うん、それで、方法は出来てるの？」

「ああ、勿論だ」

「このテレポートの結晶でお主らを天空へと飛ばす」

フリーデインが指さす所には、ふわふわと浮く、光の結晶のような物があつた

これが、テレポートの結晶・・・

「これで私たちを天空へ・・・？」

「そうだ・・・私と、フリーデインと・・・おや？」

「どうかしたの？」

「いや、もう一人、ゴーストタイプの者も手伝ってくれたのだが・・・どこかへ行ってしまったようだ」

「恥ずかしがりやなだけだろう、そつとしておいてやれ」

「それと・・・一つ問題があるのだが・・・」

「問題？」

「そうだ、私とネイティオ、そしてあのゴーストタイプの者の力でテレポートの結晶を作ったのだが・・・」

「この力では、最高でも、二人しか飛ばす事ができん・・・」

「ええ！？二人！？じゃあ私たちの中で誰か一人行けないって事じゃない！」

「それなら……」

「それなら私がここで待ちます！」

ミナが言う

「私より、フシギダネさんの方がレンさんは戦いやすいはずですよ」

「ミナ……」

「レンさん、フシギダネさん、頑張ってください！！」

「……ああ、わかった」

「行こう……フシギダネ！」

「うん！！」

「では、もう一度聞こう」

「この冒険は相当危険だ、それでも構わんのか？」

「ええ、勿論！」

「レックウザに頼めば、星を破壊してくれるんでしょ？」

「それで世界が平和になるなら、私は死んでも構わないわ！」

「それが私の願いだから！」

でも・・・その願いがかなった時、俺は・・・
サーナイトが言ってた・・・

「あなたは人間の世界に戻れるのです」

・・・これがフシギダネとの最後の冒険になるのか・・・

「レン！頑張りましょ！」

「・・・ああ」

「レン、フシギダネ、頼んだぞ！」

俺達をレポートの結晶が包んだ

そして、俺達を包んだ結晶は、そのまま上へ上へと飛んでいった

・・・

フツ・・・

俺たちを包んでる結晶が消えた

「わっ！」

「うおっ！」

「いってえ・・・」
「は・・・」

「もしかしてここが天空……なの？」

フシギダネが下を覗いた

「うわあ……すごい高さ……」

「あ、足がすくむう……」

「「わあ……」

「！おい、これ雲じゃん！！」

「ええ！？今私たち雲に乗ってるの！？」

「雲って乗れるもんなのか……？」

「さあ……」

上を見る

「……フシギダネ、上を見てみる」

「え？上って……！」

上を見ると、ここから真っ直ぐに雲が立っていた
塔のように……

まるで天空の塔だ……

「……この一番上にレックウザがいるんだよね……」

「ああ……」

ゴゴゴゴッ……

地面が揺れ、いや、雲が揺れている!?

「わっ!揺れてる!?!」

しばらくして揺れが収まった

「地震……じゃないよね……ここ雲の上だし……」

「もしかして、星が近づいてきてるから……」

「そうだとしたらまずいぞ!はやく行くぞ!」

「あ、うん!」

タッタッタッ……

天空の塔

サッサッサッ……

「階段……どこだ……」

「なんで、この階だけこんなに入り組んでるのよ!」

「んなの俺に聞くな!」

「はぁ……地道に探すしかないか……」

スウ……

「ひっ！やぁぁぁぁぁ！！」

フシギダネの悲鳴が聞こえる

「なっ、フシギダネ！？」

後ろを振り向く

目の前に又ケニンがいた

「わぁっ！なんでここに！？」

「くそっ、くらえ、たたきつける！」

バシン！

しっぽが又ケニンに当たる

……又ケニンは何事もなかったかのように浮いてる

「な、なんだと！？」

「ならこれで……！」

バックから鋭い鉄のとげを取り出した

「そらっ！」

ヒュン！

又ケニンに向かって飛ばす

背中の穴の中に入っていた

ドサッ

又ケニンが倒れた

一応あれでもダメージが入るようだ

「フシギダネ！」

「うう・・・レ、レン？さっきのは・・・？」

「倒した、行くぞ」

スウ・・・

「ひい！レン後ろ！」

「後ろ！？」

後ろを振り向いた

もう少しで息が掛かりそうなくらい近くにカゲボウズがいた

「どああ！？」

反射的に後ろへと下がる

「ひゃう！」

「あっ！」

後ろに飛び跳ねたせいで後ろにいたフシギダネにぶつかってしまった

「あつたあ……」

「だ、大丈夫か？」

「大丈夫な訳……あるか！」

バシン！

つるのムチでほっぺを叩かれる

「いってえ！」

「は、はたくことないじゃん！」

「知るか！それくらい痛かったんだよ！私は！」

「くう……」

「まったく……カゲボウズさつさと倒しちゃお」

「葉っぱカッター！」

ヒュン

「でんきショック！」

バリバリ！

カゲボウズにすべて当たった
カゲボウズは力つきたようだ

「・・・あれ？」

「どうかしたの？」

「いや、さっきの電気ショック・・・なんか変じゃなかったか？」

「そんなの私に言われても、分かんないわよ」

「それより、早く階段探さなくちゃ！」

タッタッタツ・・・

この天空の塔を登り初めて、何時間たったのだろうか・・・
まだ、頂上に辿りつかない・・・

「はぁ・・・はぁ・・・さすがにもう頂上に着いてもいいんじゃないの・・・？」

「いや、これでやっと半分なんだろう・・・」

「そんな！？あんなに登ったのに……？」

「ああ……」

ザツ……

ポケモン達が現れた

「こんな疲れてなのに……」

「てつとりばやく終わらせましょう」

「ああ……」

「葉っぱカッター！」

ドガースに向かって、はっぱカッターを繰り出す

「くられ！電気ショック！」

バリバリバリ！

チルトリスに向かって電気ショックを繰り出した

横にいたハツサムにも電撃が行った

それどころか、俺の周りにいたポケモン全員に電撃が当たった

「な……これは！？」

この技は、10万ボルトか？

そうか……あの時感じた違和感はこのせいだったのか！

この技で、チルタリスは倒れて、ドガース、レディアンを倒した

「レン！今のは！？」

「ちょっとした技のパワーアップだよ」

「もう一度！10万ボルト！」

バリバリ！

攻撃が周りにいるポケモンにあたる
バタッ

周りにいたポケモンを全員倒せた
最初の10万ボルトで弱ってたから・・・

「レン！また集まってくるとめんどろうだから、早く行くよ！」

「おう！」

タッタッタッ・・・

第38話 天空の塔へ（後書き）

はい、第38話 完 です
次回もゆっくりして行ってね！

第39話 最後の戦い vs レックウザ！ (前書き)

はい、第39話完成です

だんだん終わりに近づいていくね！

それではどうぞ！

第39話 最後の戦い vs レックウザ!

第39話 最後の戦い vs レックウザ!

天空の塔 最上階

タッタッタツ・・・

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ここが一番上・・・なの？」

壁の雲一つない・・・天井もないから・・・ここが一番上か

「多分な・・・」

『誰だ！我が領空を犯す者は！？』

突然声が聞こえた

「今の声は・・・まさか、レックウザ？」

『いかにも、ここは我が領域。すぐに立ち去るがよい！』

「そうは言われても・・・今は駄目なの・・・」

「レックウザに頼みが・・・」

『ならん！』

グオオオオオ!!!

空から、レックウザが降りてきた

「我は天空に生き、そなた達は地上に生きる者!」

「それぞれ、定められた場所があるのだ!」

「我は何億年もの間、一度も、地上に降りたことがない!」

「それはまた逆もしかり!」

「自然の掟を犯す者は容赦せぬ!!!」

「覚悟しろ!」

「くそ、今回ばかりは楽に事を終わらせたかったが・・・戦うしかないか」

「竜の舞!」

レックウザが蛇のように長い体を回転させた

「フシギダネ!気をつけろよ!」

フシギダネに警戒するように言う

「わかってる!」

サッ

レックウザが消えた

いや・・・後ろに回りこんだんだ！

目で追いつけたいスピードで・・・！

後ろに振り向く

だがそこにレックウザはいなかった

「なっ！？」

フシギダネの後ろにも居ない・・・

じゃあどこに・・・

「上だ」

声が聞こえてきた

この声、レックウザ！

その途端、後ろに殺気を感じた

やばい！そう思った

ザシユ！

その音と同時に背中に鋭い痛みが走る

「ぐあああああ！！」

悲鳴とでも言えるような叫びがこだます

「レンー！」

フシギダネの声が聞こえてくる

「次はお主だ」

フシギダネの次の次にレックウザの声が聞こえてくる
すこし離れた所で

「くっ、はっぱカッター！」

ヒュン！

「ふん、そんなもの効かん」

「かみくたく！」

グサッ

「うっ、あああああ！！！」

フシギダネの悲鳴が聞こえる

フシギダネ・・・ッ！

無理に体を動かそうとする

「ぐっ・・・」

背中痛みが強く、それを我慢するだけでも精一杯だった

「まだ、やる気が・・・？」

「くそ・・・高速移動！」

サツ！

体の痛みをこらえながら、技を繰り出す

「でんこうせっか！」

ダッ！

レックウザに向かってダッシュする

「竜巻！」

俺がレックウザの近くまで寄るのに約5秒

レックウザが技を仕掛けてくるのが約3秒

「しまっ！うわああああ！」

ドサツ！

背中から落ちる

「うぐっ・・・あ・・・」

さっきの攻撃のダメージにそして、打ちつけられたダメージでひどく痛んだ

く・・・少し・・・あと少しで・・・

ゆっくりと立ち上がる

「まだやるのか？」

「もうすぐ・・・終わるさ・・・」

「何？どう言う事だ！？」

「じじいっ・・・」

フシギダネが言う

フシギダネの背中の種が光を溜まった

「ことよ！！」

背中の種から光の光線が放たれる！

「ぐあっ！！」

レックウザにもろに当たる！

「よし・・・！」

「已・・・じゃくな・・・」

「これも食らいなさい！」

フシギダネがレックウザの口に向かって何かを投げつける

レックウザの口の中に見事に入った

「むっ！これは・・・体が・・・動かない!？」

フシギダネがレックウザの口の中に入れたのは縛られの種だったよ
うだ！

「あんまり私をなめない方が良いわ」

「レン！一気に行くわよ！」

「ああ！」

「うおおおおお!!!!」

拳に力を込める

「はあああああ!!！」

フシギダネも同時に力を込める

「くっ・・・おのれ・・・」

今だ！

タツ！

「気合いパンチ！」

「ソーラービーム！」

ゴオオオ!!!!

無防備のレックウザに当たる！

「グアアアアア！！！」

バタン！

レックウザが倒れた・・・

「なんとか・・・なったの？」

バツ！

レックウザがまた起きあがってきた！

「まだまだ・・・まだやられぬ！」

「くそっ！」

ゴゴゴゴゴゴ・・・

雲が揺れはじめる！

「わわっ！何！？何なの！？」

「これは・・・衝撃波だ！！」

「衝撃波・・・そうか！わかったぞ！」

「レックウザ！上をみるんだ！」

レックウザが上を見上げる

俺たちの目の先

そこには巨大な塊、いや星が落ちてきていた！

「な、なんだあれは！？」

「星だ！このままここにあたれば・・・世界は崩壊する！！」

「まさかあんな物が落ちてこようよしてるとは・・・」

「あの星を壊してもらうためにここに来たんだ！！」

「そうだったのか・・・」

「レックウザ！頼む！急いであの星を壊してくれ！」

「良いが・・・いいのか？この距離ではお主らは無事ではすみそつ
にない・・・」

「大丈夫だ！それも承知の上でここに来たから！」

「良くぞ言った・・・！」

キイイイイイ・・・

レックウザの口に力が集まってくる

「破壊光線！」

ゴオオオオオオ！！

レックウザの口から破壊光線が放たれた！

その破壊光線は星にぶつかる！

「うわああああああ！！」

「きゃああああああ！！」

う・・・ぐう・・・ここは・・・

俺はたしか・・・レックウザと戦って、そして、星を破壊してもらって、それに巻き込まれて・・・

じゃあ・・・今俺は魂の状態にいるのか・・・？
向こうから誰かが近づいてきた

ゲンガーだ・・・

「ケケツ！無様だな！レン」

「今、お前は死の淵にいるんだ！」

ああ・・・やっぱりか・・・

「どうだ？怖いだろ？」

「そっだ！こいつをあの世に引きずりこんでやるっ！」

ゲンガーが俺を引っ張る

あの世・・・？

そうか・・・俺、死ぬのか・・・

・・・もつとつでも良くなってきた・・・

・・・

ゲンガーの足が止まる

「チツ、俺とした事が道に迷っちゃまった」

「仕方ない、こいつはここに置いてくか」

「ケケッ！じゃあな！」

そついうとゲンガーはそそくさとどこかへ行ってしまった

俺・・・このままだとどうなるんだろっ・・・

一生、このままなのか・・・？
・・・

第39話 最後の戦い vs レックウザ！ (後書き)

はい、第39話 完 です

次回 最終回

次回もゆっくりしていったね！

最終話 さよなら(前書き)

はい、最終回です！

いや、この小説終わるね

それでは、どうぞ！

最終話 さよなら

最終話 さよなら

・・・い

誰かの声が聞こえる・・・

・・・きる

起きろ！レン！

「う・・・」

ゆっくりと目を開ける

カメックスやバンギラス、ハスブレロの顔が見える・・・

「あ！おい！レンが起きたぞ！」

「こつちもだ！フシギダネが起きた！」

「レンさん！大丈夫ですか!？」

「ミナ・・・？」

「よかった・・・本当によかった・・・」

ミナが涙を浮かばせる

体をゆっくりと起こす

「くっ……ここは？」

「精霊の丘だ」

ネイティオが言う

「うう……レン……大丈夫？」

「ああ、なんとかな……フシギダネは？」

「私も何とか……ねえ、レンもしかしてあなたもゲンガーに助けられた？」

「フシギダネ、まさかお前も……？」

「うん……」

ゲンガーが助けくれたのか……でもなんで……

「！星は！？星はどうなったんだ！」

「安心しろ、星は破壊された」

「はぁ……よかったぁ……」

「しかし、これで平和に暮らせるな!」

「ああ!今日はお祝いだな!」

「祝砲にハイドロポンプ打ちたいぜ!」

カメックスが背中中の銃身をハスブレロに向ける

「お、おおっと、こっちはやめるよ・・・?」

それを見て、一歩ずつ下がるハスブレロ

「ハハハ!いや撃て撃て!」

ダーテングが笑いながら、言う

「じよ、冗談じゃないぜ!」

ハスブレロが離れようとする

「私が逃げられないように捕まえとくわよん!」

ハスブレロを拘束するオクタン

「お、いいな!それ!」

「みんなマジかよ!やめてくれ!」

『アハハハハハハ!』

みんな仲良く笑う

「レンさん……」

この声……サーナイト……

サーナイトが姿を表す

「……サーナイト……」

「すべてはレンさんのお陰です、レンさんのおかげで世界の平和は守られました……」

「本当にありがとうございました……」

「そして……レンさんの役目はこれで終わりです……」

「もうすぐ、元の世界へと戻らなくてはなりません……」

「ついに……別れる時が来たのです」

「別れる時……ついに来たのか……」

「レンさん……つらいでしょうけど……みなさんにお別れを……」

「あ、あれ？レンさん？」

キャタピーがこちらに気づく

それと一緒にみんな俺のほうを向く

勿論フシギダネも・・・

「！レン！その体・・・」

よく見れば、俺の体が薄くなっていた

「一体・・・どうしちゃったの!？」

「フシギダネ・・・みんな・・・悪い・・・」

「今日で別れなくちゃならないんだ・・・」

「ええ!？」

「な、なんですって!？」

「みんな・・・いままでありがとう・・・」

「・・・え？」

「・・・お、お別れってどういう事？」

フシギダネが涙を浮かべる

「俺のポケモとしての役目が・・・終わったんだ・・・」

「俺が元いた世界・・・人間の世界へ戻らなきゃならないんだ・・・」

「

「な、なんと!？」

「人間の世界・・・戻るだって!？」

「え・・・な、なんでよ・・・どうして？」

「よく分かんないよ・・・別れるなんて!」

「せつかく・・・せつかく親友になれたのに・・・」

「そつだ・・・フシギダネ、俺とお前はいつまでも親友だ・・・」

「ずっと忘れないさ・・・」

「待って・・・待ってよレン・・・」

「お前と会えて、本当に良かった・・・」

「私・・・レンがいなくなっちゃったら・・・」

体がさらに薄くなっていく

「ごめんな、もう、さよならだ・・・」

「レンさん・・・」

「レン・・・さん・・・」

「レン・・・!」

フウ・・・

「レンーーーーー!!!!!!」

フシギダネの叫びが響く

「うう・・・レン・・・さん、私、よくわかりませんよ・・・急に別れちゃうなんて・・・」

「なんで・・・なんで居なくなっちゃうんだよ・・・」

「俺は、まだレンにお礼さえ出来てない・・・ありがとうすらまだ言えてないのに・・・」

「こんなに急にいなくなっちゃうなんてよ・・・」

「これからだって時に・・・うう・・・」

「・・・いや、レンのおかげで世界が救われたのだ・・・」

「あの時・・・天空に行くときのレンの様子は・・・まるで、なにかの定めを待っていたかのようにだった・・・」

「きっと・・・きっとレンは・・・」

「私達を助けるためにポケモンになったのよ・・・」

「そして・・・星を壊して、世界を救ったときが・・・別れの時って知ってたんだ・・・」

「なんで・・・なんでもっと早く言ってくれなかったの・・・？」
「別れるって知ってたんだったら・・・なんで教えてくれなかったの・・・？」

「言いたくても言えなかったのだろう・・・お前が悲しむのと同じくらい・・・レンは別れるのが辛かったはずだ・・・」

「わかってやれ・・・フシギダネ・・・」

「うう・・・レン・・・」

「・・・」

「これは・・・」

光が上へと向かって行くのがわかった

「天に向かって昇っていく魂・・・なのかな」

「このままどこに行くんだろう・・・」

「レンさん・・・」

「サーナイト・・・」

「レンさん・・・ついに人間の世界へ戻るんですね・・・」

「ああ・・・でもなんか寂しいな・・・」

「・・・レンさん、あなたが・・・もし望むなら・・・私の力でこちらの世界に戻す事が出来ます・・・」

「！本当か！」

「はい、ですが、もう二度と人間の世界には戻れなくなります」

「それでも、いいのですね？」

「ああ・・・フシギダネとまた一緒に居られるなら・・・！」

「・・・分かりました・・・」

最終話 さよなら（後書き）

はい！最終回 完 です

実はもうちっとだけ続くんじゃない

エピソード（前書き）

ついにこれで終わり・・・
嬉しいような寂しいような・・・
それではどござ〜

エピソード

エピソード

救助基地 前

ポケモン達がみんなここに集まっていた

「・・・レン・・・うう・・・」

悲しむフシギダネ

ほかのポケモン達も悲しみに暮れていた

フツ・・・

光が現れた

「あ、あれは・・・？」

それにキヤタピーが気づく

「ん？どうした？」

その後が続いて、ほかのみんなも気づく

光が消え、そこにいたのは

レンだった

「あ！！レ……レ……」

「レンさん！！」

「おい！フシギダネ！後ろ見る！」

ハスブレロがフシギダネに呼びかける

「え……？後ろ……？」

フシギダネが後ろを向く

「え……あ……」

「レ、レ……」

「レン……！！！！」

フシギダネがレンの元に駆け寄り
そして、レンに抱きつく

「レン！もう二度と会えないかと思ってた！！」

「ごめんな……寂しい思いさせちゃって……」

「みんなも……ごめんな」

小さな森

「うわ〜懐かしいなあ・・・」

「ここでレンと出会ったんだよね・・・」

「ああ、あん時は叫びまくってた記憶が・・・」

レンが苦笑いする

「そうそう、それにここで初めて救助もしたんだよね」

「キャタピーの救助だな・・・」

「そこから俺たちの救助隊が始まったんだよね・・・」

「思い起こせば、いろんな事があったよね・・・」

「サンダーと戦ったりだとか、逃避行したりとか、地底に行ったりとか・・・」

「今考えてみれば、凄いことづくしかったよね」

「ほんとだよな」

しばらく沈黙が続いた

「・・・ねえ」

「?どうした?」

「私たちって、親友なんだよね・・・」

「ああ、そうだけど・・・急にどうした？」

「いや・・・あのさ・・・もういつその事・・・うん、やっぱりいいや」

フシギダネがもったいぶる

「なんだよ、気になるだろ？」

「・・・もう、いつその事恋人同士に・・・ならない？」

しばらく沈黙・・・

「えー!? ちよっ!? 待て! それはいくら何でもいきなりすぎるだろ!?」

急なフシギダネの発言にびっくりして混乱するレン、ついでに頬を染める

「で、でもさ! もう何日も一緒に過ごしてるし・・・」

「だ、だからって・・・」

「はぁ・・・わかったよ」

「え?」

「実は・・・実は俺もお前の事・・・好きだったんだ・・・」

ほんのりフシギダネが顔を赤くする

「・・・何それ大胆すぎるでしょ？」

「なっ、お前の方が大胆だろ!？」

「ふふっ、そうかな？」

「絶対そうだから!絶対お前の方が大胆だから!」

「はいはい、わかったわかった」

「な、なんだよその適當すぎる返しは・・・」

「お二人さん、お幸せに・・・」

遠くからそれを見守るミナの姿

その後、レンとフシギダネは幸せに過ごすが、それは別の話・・・

END

エピソード（後書き）

はい、エピソード 完 です
七不思議の方も（ ^ ^ ）よろしくだお

サイドストーリー 1 その後(前書き)

えー、ある方のリクで、「エンディング後のサーナイトのイベントが見たい！」みたいな事を言われたので、悩んだ結果・・・他のストーリーも書きちゃおうかなと思い・・・

章を追加し、その後の話という事で、書く事にしました

サーナイトの話に辿り着くのはいつか・・・賭けてみよう！(おいレン「5年」

フシギダネ「3年」

ミナ「2年」

年単位で賭けやがったー！

サイドストーリー 1 その後

サイドストーリー1

レンとフシギダネの活躍によって、星の破壊は食い止められた
自然災害も、完全になくなった訳でもなく、すこしずつなくなって
いった

スターズも救助隊として活動を開始したのである
そんな後の数日後・・・

「く〜・・・ふう、と」

体を延ばす

「やっほー！レン！」

「レンさん！」

フシギダネとミナが入ってきた

「今、起きたばかりなの？」

「そうだけど・・・てか今日どれだけ寝てんだ俺は・・・」

「私たちが来てからざっと10分ぐらい」

「寝すぎだな・・・」

「で、まあ、レンがなかなか起きないから、ペリッパ―連絡所に行

ってきたんだとさ……」

「今日の分の依頼、いいのあったから取ってきちゃった！」

「お疲れ、でどんなのだ？」

「えっと……」

「ああ……あそこか……たしかサンダー居たよな……」

「あ、うん、いたね」

「よっしゃ！、ついでに会いに行くか！」

「ええ！？レン！救助と一緒に会いに行くたって、多分サンダー、戦おうとしてくると思うよ！？」

「だったら、バトルの準備をしとくか……」

「戦う事前提なのね……」

フシギダネが苦笑いする

「とりあえず、行きましょうか」

「だな……」

サツサツサツ……

「レンさん！」

この声は……

向こうからキヤタピーとトランセルがやってきた

「あれ？キヤタピーちゃんにトランセル君じゃない、どっかした？」

「ブルーさんが……なんか変です!」

なんか変って……

「変って……なにが変なの？」

「雰囲気が変わっちゃったみたいで……」

「レン、とりあえず、広場に行ってみよ？」

「だな」

サツサツサツ……

俺たちは広場に行くことにした

ポケモン広場 ナマズンの池

サツサツサツ……

「あ、フーデイン!」

「おお、お主達か」

フシギダネがあたりを見回す

「あれ？フーディン、ブルー見なかった？」

「なんか、雰囲気が変わったって聞いたけど・・・」

「僕だよ、ブルーは」

フーディンの隣にいたポケモン、グランブルが言った

「へ？」

フシギダネがすつとんきよんな声をだした

「ええ！？ブルー！？でも全然違うよ！？姿とか雰囲気とかその他
諸々違うよ！？」

「僕もよくわかんないんだよね・・・その洞穴に入ったら急に・・・」

「洞穴？」

「ワシも知らぬ間にできてたんじゃよ」

「ほれ、その岩の所に」

ナマズンが、滝の前にある岩の足場の方を向く

岩の所って・・・あ、でかい岩の中央に穴が開いてる・・・

「あの中に入ったの？」

「うん、そしたらこんな姿に・・・」

たしか、ブルーとグランブルってなんかで繋がってたような・・・

「ブルーは進化をしたのだ」

「進化・・・そうか！グランブルはブルーの進化系だから・・・」

「し、進化？」

「何なの？それって」

「進化って言うのは・・・うん、言葉で言うと言いにくいですが・・・え〜と・・・あ、パワーアップみたいなもんです」

大体合ってるな、それ

「お主達、よく知っておるな・・・」

「そりゃあ、元人間・・・いややっぱいいや」

「そして、おそらくあの場所は進化のできる場所なのだろう・・・」

「これは推測に過ぎんのだが・・・」

「いままで進化ができなかったのは、世界のバランスが崩れていたのが原因ではないだろうか・・・」

「しかし、星の破壊された今、世界のバランスは元に戻り・・・」

「何らかの弾みで、あの洞穴も解放されたのであろう」

なんらかの弾み・・・ブルーとか？

「じゃ、じゃあ！僕も進化したらトランセル君みたいになれるんですか！？」

「僕・・・はやくバタフリーになりたい・・・」

「ちょ、ちょっと待ってよ・・・僕は微妙だな・・・」

「可愛かったお顔がいかつくなっちゃったし・・・」

可愛かった・・・まあたしかにまだ可愛かったかもしれないけどさ

「進化する事は悪い事ではないぞ」

「進化で変わるのとは外見だけではなく・・・」

「自分の能力も上がる場合もあるのだ」

「え！？ほんと！？僕、強くなってるかもしれないの！？」

「僕、ますます進化したくなりました！！」

「早くバタフリーに・・・！」

「僕も！僕も！」

「じゃあ、もしかして、私たちも、あの洞穴に行けば、進化できるの？」

「その通りだ、条件次第・・・だがな」

たしかフシギダネの進化の条件は・・・レベルだっけか・・・

「レン！私も進化したくなっちゃった！洞穴に行きましょう！」

「え？ああ・・・」

「ミナはどうする？」

「え？私は・・・」

「まあ、どうせだし、付いて来いよ！」

「は、はい・・・」

サツサツサツ・・・

「うわ・・・案外ちっちゃいな穴・・・」

「こりゃあ、最低でも一人ぐらいしか入れないな・・・」

「じゃあ、誰が最初に入る？」

「私が！」

「フシギダネか・・・行つてこい」

「やったあー!」

サツサツサツ・・・

フシギダネが洞穴の中へと入っていった

「さてと、あいつが帰ってくるまで待つとするか」

「そういえば、フシギダネさんの進化系ってなんでしたっけ?」

「フシギソウだな、で、その後がフシギバナ・・・フシギソウ止まりだな」

「へえ・・・レンさんよく知ってますね・・・」

「まあな、なんでこつという事覚えてるんだろうか・・・」

「さあ?なんででしょう?」

・・・

「こつ言つことって考えてもほぼ意味ないよな・・・」

「言われてみれば・・・」

「やったあー!」

フシギダネによく似た声が聞こえてくる

「なんだ、あのまるで子供みたいな喜び方は……」

「いや、まあ、これ以外にどう反応すればいいのかわかんないですけど……」

「ただいま」

フシギダネ……じゃなくて、フシギソウが戻ってきた

「お帰りフシギソウ、だいぶ声変わったな……」

「そうなの？」

「はい、変わってますよ」

「じゃ、次やりたい人は？」

「俺が……」

「いってらっしゃい」

洞穴の中の階段を降りていく

サツサツサツ……

階段を降りきった

「なんだこれ……？」

光の柱のような物が中央に立っていた

「進化するって感じだな・・・」

『目覚める者よ・・・』

どこかから声が聞こえてきた

『ここは光の洞窟・・・汝は新たな進化を求めるか？』

「ああ！」

『汝、道具をあたえるか？』

「いいや、いらぬ」

『・・・目覚める者よ・・・でははじめるぞ・・・』

『・・・』

何も起きない・・・？

『残念だが、お主は進化できない・・・』

「進化できない・・・!？」

『道具が足りないようだ・・・』

道具か・・・

『また進化したければ来るがよい・・・』

道具が必要なのか・・・

どんな道具だろうか？

石系の道具か？

だとしたら、雷の石・・・今ないよなあ・・・

「ただいま・・・」

「お帰り・・・ってあれ？レン、進化できなかったの？」

「みたいだ、道具が必要だったばいし・・・」

「道具？もしかして、雷の石とかですか？」

「多分な・・・けど、どこで取るうか・・・」

「まあ、俺は進化してもしなくてもどうでもいいけど」

「で、ミナはどうする？」

「うーん・・・私は・・・」

「ミナ、どうせだし、行っちゃいなよ！」

「ええ・・・でも・・・」

ミナがこちらを見る

俺が進化してないからか？

「俺の事はいいさ、雷の石見つけたらすぐ進化しようと思っし・・・」

「・・・じゃあ、進化します・・・」

ミナはそう言っつて、洞穴の中に入っていった

「ところでさ、雷の石ってどんなの？」

「雷の石は・・・何て言うんだらうか・・・黄色い石みたいな物か？」

「ふうん・・・」

「でもさ、なんで石で進化できるんだらうね？」

よく考えてみればそうだよな・・・

「なんていうか、石の中には、そのポケモンになるための遺伝子とかが入っつてて、進化するポケモンが近くに来ると、その遺伝子が反応して、進化する・・・とかじゃないか？」

「つまり・・・どっいづこと？」

「つまりだ、雷の石の中には、進化するのに必要な情報が入っつて事だ」

「なるほどね・・・」

「た、ただいまです・・・」

ミナの声に近い声が聞こえてくる

「お、お帰り」

ヒノアラシの進化系はマグマラシ・・・正直、その次のバクフーンの方がいいと思うけど、レベルがな・・・

「へえ・・・ミナの進化ってこんな感じなんだ・・・」

「そつみたいですよ・・・」

「よっし、そろそろ救助に行くか」

サツサツサツ・・・

救助基地 前

「さてと、準備もできたし、行くとするか・・・」

「あ、レン！ちょっと待って！」

「なんだよ？フシギダネ・・・じゃないや、フシギソウ」

「名前とかどちらでもいいけど・・・じゃなくてさ、いままで、レンと私とミナ、全員一緒に行動してたでしょ？」

「ああ」

「これからは、一人ずつに分かれて行動できるようにした方がいい

「じゃないかな？」

「一人ずつ？」

「うん、危険は増しちゃうけど、依頼も沢山こなせるし、一人だから、仲間に気を使わないからさ」

「まあ、それはいいと思うけど・・・」

「どうする？レン、一人ずつ行動するようにする？それとも、今まで通り、3人で行動する？」

「・・・一人ずつ行動するようにするか・・・」

「わかった！私、他の依頼見てくるね」

「じゃあね・・・」

そう言うと、フシギソウはペリッパ―連絡所へと走っていった

「・・・さてと、俺も雷鳴の山に行くか・・・」

「ミナはどうするんだ？」

「私ですか？んゝとりあえず、体に慣れるまで広場の方で、みんなの話とか聞く事にします」

「そうか、じゃあ行ってくるな」

「頑張ってくださいね〜！」

サイドストーリー 1 その後（後書き）

終わり

次回もゆっくりね？

サイドストーリー 2 雷鳴の山で(前書き)

サイドストーリー2 完成くそれでは、どうぞ！

サイドストーリー 2 雷鳴の山で

サイドストーリー 2

雷鳴の山

さーて、ちゃっちゃと終わらせて頂上行くか・・・

サツサツサツ・・・

しばらく歩いていると、ポケモン達が集まってきた

ニドラン とラクライ2匹か・・・

ラクライが厄介だな・・・

「でんこうせっか!」

タッ!

でんこうせっかで、間合いを詰めていく

ドン!

ラクライに体当たりをする

ラクライは一撃で倒れた、さすがにレベル差があれだからな・・・

タン!

地面を蹴り、後ろにいたラクライの後ろに回りこむ

「たたきつける！」

そして、尻尾に力を込め、降りおろす
パシン！

尻尾がラクライの頭に命中する
ラクライは倒れた

残りはニドランだけか・・・

こいつも早々にやられてもらうか！

「10万ボルト！」

バリバリ・・・

俺が放った10万ボルトが、ニドランとは別の場所に飛んでいった

「なっ！」

なんだと！？た、たしかに狙ったのに・・・まさか、他のラクライ
が・・・！

ニドランがこっちに走ってきた

ドスッ！

額にある角で俺の腹に向かって突き立てた

「っ！」

急いで、ニドランから距離を取る

思ったより痛くないな・・・

「でんこうせっか！」

タッ！

でんこうせっかで、ニドランにたいあたりする

ドン！

ニドランが倒れた・・・

タッタッタッ・・・

俺は少し急ぎ目に走っていった

雷鳴の山 頂上

依頼も無事に終わらして、頂上まで来たわけだが・・・サンダーはどこ行ったかな・・・？

ギャオオオオオ！！

あ、この声は・・・

「遂に来たか！」

「ああ……」

「お主が、どれほど経験を積み、どれだけ強くなったか……試させてもらっぞ！」

「ああ、良いぜ！サンダー！お前も全力で来い！」

「よろしい！」

「高速移動！」

サッ！

高速移動か……
なら……！

「10万ボルト！」

広範囲のこいつでどうだ！

バリバリ！

「グアアアッ！」

後ろからサンダーの音が聞こえる
やっぱりな……！

「電光石火！」

すかさず、でんごうせつかで体当たりをする

ドン！

「ぐっ！」

サンダーにヒットする

「たたきつける！」

さらに連続で攻撃する！

「流石にやられぬ！」

サッ！

サンダーに攻撃を避けられる

「つつく！」

サンダーがつつくを繰り返してくる

「ぐあ！」

無防備だった俺は避けられなかった

タッ！

すぐさま距離を取る

だが、サンダーが高速で移動して、間合いを詰めてくる

「チツ・・・！」

「電気ショック！」

バリバリ！

「グアッ！」

「つつく！」

ドスッ！

「があっ！」

サンダーが連続で攻撃してくる

「くっ・・・」

「つつく！」

「でんこうせっか！」

タッ！

でんこうせっかで、サンダーの攻撃を回避する

「高速移動！」

タッ！

高速移動で、サンダーとの間合いを詰める

「甘い！つつく！」

サッ！

サンダーの攻撃を横に避ける

「何っ！？」

「予想通りだぜ！でんこうせっか！」

ドン！

でんこうせっかで勢い良く、サンダーにたいあたりする

「ぐうっ！」

タッ！

「たたきつける！」

タッ！

飛び上がり、サンダーの頭に向かって、尻尾を振り降ろす

バシン！

「グフッ！」

「くっ！・・・つつく！」

ドスッ！

「があっ！」

腹に当たる

タッ

サンダーから距離を取る

「はぁ・・・はぁ・・・」

「くっ・・・お主、なかなか強くなったな・・・」

「お前こそ・・・」

「これで・・・最後だ・・・！」

「行くぞ・・・！」

『高速移動！』

タッ！

ほぼ同時に高速移動で間合いを詰める

「つつく！」

「たたきつける！」

ほぼ同時に攻撃が繰り出された

「ぐっ……がはっ……」

サンダーが倒れた

「はぁ……はぁ……」

「勝った……のか」

「ぐっ……お主……大分力を付けたな……」

「サンダーだって、あの時から大分力つけてんじゃん……」

ガサガサ……

バックからオレンの実を出す

「サンダー、ここにオレンの実置いとくぞ」

サンダーの近くにオレンの実を置く

「すまぬな……」

「良いつて事よ！」

救助基地 前

「ふい〜・・・」

「あ、レン！お帰り！」

「あ、ただいま・・・」

「で、どうだった？サンダーと戦ってたさ」

「ああ、なんとか勝ったよ」

「そうなんだ・・・」

「ミナは？」

「まだ見てないよ、多分広場の方にいるんじゃないかな？」

「してみるか」

サツサツサツ・・・

ポケモン広場

サツサツサツ・・・

「来てみたはいいけど・・・どこかしら？」

「聞いてみるか」

「お〜い！ハスブレロ〜！」

「ん？ああ、お前達か」

「なあ、ハスブレロ、ミナ見なかったか？」

「ミナ？ああ、あいつなら、池に行ったと思っぜ」

「池に？わかった、ありがとな」

サツサツサツ・・・

ナマズンの池

ミナがいた

「あ、ミナ」

「あー！レンさん！」

「レンさん！凄い話がありましたよー！」

「凄い話？」

「はい！えつとですね、さっナマズンさんから聞いたんですけどね

「！」

「嵐の海域って言うダンジョンがあるらしんですよ！」

「そのダンジョンは海の中にあって、そこは、海の底へと続くほど深いそうなんですよ・・・」

「それで！さっきナマズンさんからダイビングって言う秘伝マシンをもらっちゃったんです！」

「ダイビング？」

「はい！これです！」

マグマラシが出したのは、金色に光る技マシンだった

「これがダイビングか・・・」

「ねえ、秘伝マシンって何？」

「秘伝マシンって言うのは技マシンの種類でして、何度でも使えるんです！」

「へえ・・・」

「でもさ、うちのチームの中で水タイプのポケモンいるのか？」

「そういえば・・・」

「大丈夫です！」

「え？」

「技マシンさえ持っていれば、行けるってナマズンさんが行ってきました！」

『えっ...』

「技マシンだけ持っていれば、大丈夫って……どういう事？」

「……さあ？」

「とりあえず！明日、行きましょう！嵐の海域に！」

「……まあ、行ってみるか」

「……そうね」

「やったあ！」

「それじゃあ、明日！」

そう言つとミナはそそくさと帰っていった

「じゃあ、私も帰るわね」

「ああ、じゃあな」

サツサツサツ……

「俺も寝るか……」

サツサツサツ……

サイドストーリー 2 雷鳴の山で(後書き)

はい サイドストーリー2 完 次回はもゆっくりゆっくりに！

サイドストーリー3 嵐の海域へ(前書き)

滅茶苦茶遅くなりました・・・
ごめんなさい！

レン「てめえ・・・後でしごいてやるからな・・・」

ひいひい！勘弁！（逃走）

レン「逃げんなあ！」

フシギダネ「・・・あの二人はほつといて・・・」

フシギダネ&ミナ「それでは、どうぞ！」

サイドストーリー3 嵐の海域へ

サイドストーリー3 嵐の海域へ

朝

「ふあゝ……」

大きくあくびをする

「よつと……」

さてと……今日はミナが海のダンジョンに行っちゃって行ってた・
とりあえず、外に出るとするか

ザッザッザッ……

「レン、おはようー」

「レンさん、おはようございます」

「ああ、おはよう……」

「それで、たしか今日は海のダンジョンとかに行くんだっただよな」

「はい、嵐の海域というダンジョンです」

バッグからダイビングの技マシンを取り出す

「とりあえず、この技マシンがあればいいって行ってたけど……大丈夫か？」

「大丈夫です……多分」

「……まあ、とりあえず行くとするか……」

ザッザッザッ……

嵐の海域 近く

「船で近づけるのは、大体この辺りまで……」

目の前には、海が荒れて、それから雨が大量に降り続けている

「うわぁ……ひでえ嵐だ……」

「でも、こっちまでは嵐の影響が来てないですよ……」

「ああ……変な気候だな……」

「それより、早く嵐の海域に行きましょう」

「だな……」

「そんじゃ、ダイビングの技マシンを……」

バッグの中から金色の技マシンを取り出す

すると、突然、ダイビングの技マシンが光りだした！

「え！？」

「ひ、光ってる！？」

フワツ・・・

光が大きくなり、俺達を包む

「ど、どうなってるんですか・・・？」

「俺に聞かれても・・・」

「もしかして、技マシンがあれば大丈夫って・・・こういう事？」

「・・・かもな」

「それじゃあ、海の中に入っても大丈夫って言う事ですよね？」

「・・・よし、とりあえず、入ってみるか・・・」

「うん・・・」

俺が歩くと、俺たちを包んでいる光も一緒に動いた

俺は海の中に飛び込んで入った

フシギダネやミナも俺の後に続いて、飛び込む

「・・・あれ？水が入ってきてない？」

俺たちを包んでる光の中には水が入ってきてないのだ

「ほんとだ・・・」

「・・・海の中に入ったの・・・？」

「みたいだな・・・」

「でも・・・ここからどうするんですか？」

「とりあえず、少しだけ進んで、そのまま沈んでいく」

「でも・・・帰る時は・・・」

「あなぬけ玉を持ってきたからこれで脱出すればいいはずだ」

「けど・・・このまま沈んでも大丈夫なの？」

「さあな・・・」

「・・・とりあえず、進んでみるしかないだろうな・・・」

俺達は、嵐の海域を目指して、手探りで進んでいった

・・・

「・・・あ」

「どうしたの……レン……？」

「あそこに……光が見えないか？」

「え……？」

それを聞いて、フシギダネが前を見つめる

「ほ、ほんとだ……！」

「ミナ！あれ！」

「え……？」

ミナを前を見つめる

「……光が……！」

「やっと見つけた！嵐の海域……！」

「よし、さっさと行くぞ！」

「うん！」

嵐の海域

「はぁ……はぁ……」

「やっとたどり着いたはいいけど・・・」

「ここからどうする？」

「最深部まで行く！」

「ええ・・・」

「もう、ここまで来たら最深部まで行こうぜ・・・」

「まあ、そうしないと来た意味ないしね・・・」

「さてと・・・行きますか！」

「そうね！」

「はい！」

「ここは、水ポケモンが全般だろうし、ミナはあんまり戦わない方がいいだろうな・・・」

「じゃあ、私は、どうしたら・・・」

「・・・とりあえず、後ろを警戒しといてくれ」

「わかりました・・・」

ピチャン・・・

水の上を歩く音が聞こえてきた

「こんな所にもいるのね・・・」

「そりゃあ、水ポケモンだったらな・・・」

音を出している張本人が出てくる

シエルターだ

「！レンさん！後ろから・・・！」

後ろを振り返る

後ろからは、メノクラゲやキャモメが来ていた！

「ちっ・・・」

「フシギダネ！ミナをしつかり守ってるよ！」

「へ？レン！？」

俺は、すぐに後ろに走っていった

バチッ・・・

「10万ボルト！」

バリバリ！

キヤモメや、メノクラゲに向かって、10万ボルトを食らわせる！

キヤモメに10万ボルトが当たる

キヤモメは一撃で倒れた

だが、メノクラゲは10万ボルトをかわした！

メノクラゲは、どくばりを飛ばしてくる！

ドスッ！

「ぐあっ！」

どくばりが俺の足に刺さる！

「くっ・・・」

「10万ボルト！」

足の痛みを耐えながら10万ボルトをメノクラゲに食らわす

メノクラゲに10万ボルトを食らわす！

メノクラゲも一撃で倒れた

「フシギだね！」

「大丈夫、こっちは何とか倒したから！」

「よし……早く下に行こう！」

「うん！」

バシャンバシャン……

……

「はぁ……大分降りてきたが……」

「まだ最下層に着かないの……？」

「な、長いですね……ここ」

「どんだけ深いんだ……ここ」

バシヤ……バシヤ……

脇にある通路からタマザラシとかカフトプスとかとかが出てくる！

「ちっ……戦うしかないか！」

サッ！

バチツ……バチツ……

「10万ボルト！」

バシヤ！

バリバリ！

俺は、通路から出てきたポケモン達に10万ボルトを食らわせる！

通路から出てきた大体のポケモンに10万ボルトがヒットする
だが、カブトプスが、10万ボルトを避け、俺の横に移動する

「やべっ……」

カブトプスが自分に付いている鎌を振る！

ザシユ！

「あぐっ！」

鎌が俺の腹あたりを切る！

すぐさまカブトプスから距離を取る

「ってえ……」

カブトプスにやられた腹を庇う

「電光石火！」

バシヤバシヤ……

カブトプスに向かって走りだす！

バシヤン！

カブトプスが俺に向かって、走ってきた！

「なにっ！？」

カブトプスが鎌を振りかざす！

「10万・・・」

ザシユ！

10万ボルトでカブトプスを攻撃しようとするが、それより早く、カブトプスに切られる！

「があっ！」

俺はその場に倒れ込む

「ぐ・・・あ・・・」

段々意識が遠くなっていく・・・

「レ・・・さん！」

「ちょ、レ・・・!!」

俺の意識が完全に途絶えた

「！」

俺は勢いよく目を開ける

フシギダネとミナがのぞき込んでいた

「あ、レン！起きた？」

「あ……あれ？」

ゆっくりと体を起こす

「レンさん、カブトプスにやられたんですよ」

「それで、レンが倒れた後、私がカブトプスを倒して、ミナが復活の種を使ったって訳よ」

「そうか……」

俺、倒されたのか……

なにかと言って初めてだな……やられるの……

「立てる？レン」

「ああ……」

俺は立ち上がった

「さてと・・・早めに階段見つけて、最下層を目指すとしてもしょうか」

「そうだな・・・」

バシャ・・・バシャ・・・

サイドストーリー3 嵐の海域へ（後書き）

フウハハハハ

捕まんないZ E

レン「待てや！ゴルア！」

待てと行って待つ馬鹿がいるか！

フシギダネ「まーだやってた・・・」ミナ「なんか・・・楽しそう
ですね・・・」

フシギダネ「まあ、二人はあのまま放置で・・・それじゃあ、例の
あれ、言いましょうか」

ミナ「はい」

フシギダネ「せーの！」

フシギダネ&ミナ「次回もゆっくりして行ってね！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2465n/>

ポケモン不思議のダンジョン 星の救助隊

2011年12月8日23時52分発行